

1

コクマの塔
こぼれ話

加名山炯斗

【魔女に愛される男の話】

樹歴 八六三年



伴侶にも我が子にも愛されている自覚がある。
だから逃げた。

ルルイエの魔女が塔を去り数年。あまり塔には寄り付かないと帰省した教え子から聞いた。我が子ももう随分大きくなった筈だ。別れの際はだいぶごねられたが、向こうから会いに来ることはなかった。今は落ち着いている筈だ。そんなこんなで、講師に推任した青年の様子を見にという建前の下、久方ぶりに嘗ての職場を訪れた。

「ようアルバ先生。調子はどうだい」

幻術の教室を探し当てると彼はやはりそこに居た。此方を見ると驚いたようだが、すぐに笑顔を浮かべて近付いてきた。

「お久しぶりです」

「おう。どうだ？先生ってのは」

「楽しいですね。前任者も中々気が合う方で、引き継ぎもスムーズでした」

「そりゃあなにより」

前任は誰だったか。いや、知らない奴かも知れないしそれはいい。着任からそこそこ経っている筈だが、そこから説明してくれる事に笑ってしまった。

「今日は何の御用で塔へ？」

そう言いながら席を勧めてくる。

「何ってそりゃ、アルバ先生の講義を聴きに来たんだよ」

素直に従って椅子に腰を下ろす。

アルバは「はあ」と気のない返事をした。

「幻術の最先端の研究者だろお？ そりゃ聴きたいに決まってる」

「おっさんは専攻ってもんがないよな」

「げ。おまえなんで此処に居んの」

横から現れたのは俺に今の塔の情報をもたらした教え子だった。

「弟子に会って一言目が「げ」ってどういうコトだよ」

「いや、つい」

幻術学研究室で遇うとは思ひもしなかった。

「あれケイナくん、この人の弟子だったの？」

「そっすよ。あんま公にしてないですけど」

面倒臭いから、と小さく付け足す。まあそうだろう。

「まさか先生がおっさんの先生とは、こっちも驚きです」

「いや、そんな大層なものでは…」

「なんだケイナ。てっきりダリの後釜に押し込められてるかと思ったが、まだ学生か。幻術も取ってんのか？」

「あつ！おっさんやっぱそこ解ってたんだな！」

ダリは錬金術の権威だが、もう歳だ。後継者を探していた。そこに俺の推薦で錬金術専攻生が入ってきたら確実に狙うだろうなとは思っていた。

「意地でもまだ学生やりますよ！」

「ケイナくんは色々幅広く取ってるみたいですよ」

そりゃ良いことだ。確か環境に進みたいと言っていた。雑多な能力が必要とされる道だ。

「環境系つつたら、トビオカだな」

あの変わり者。あいつも器用で大概の事はなんでもこなせた。

「トビオカ…？」

アルバが記憶を探るような顔をしている。まさか居ないのか？

「あー、おっさん。トビーはちょっと前に環境局専任になった」

「そーなの」

まあ元々あっちに行ってる事の方が多かったし何も不思議はない。

「まあケイナの話はいいんだよ、俺は先生の講義が聴きたいの」

「へーへー。んじゃまあ、最後でいいから私の所にも来いよおっさん。聞きたい事あるから」

最後でいいからな！と強調して、煩い弟子は去っていった。

「あの微妙に敏い感じが可愛げねーよなあ」

一応部外者にあたるので、講義という形は…とやんわりと断られ、あくまで私的な情報交換という体で研究の話を聞かせて貰った。

「この後はどちらへ？」

「うーん、まあ……娘のトコかねえ」

「お子さんいらっしやったんですね」

目を丸くするアルバに苦笑いを返す。

「いるんだよなあ……これまた強い^{こわ}のが」

部屋の前まで来てみたはいいが、どう入っていったものか思案する。何年振りだ？実子に会うのに心の準備が要るとかどうかと思う。

息を吸い込んで覚悟を決める。

コンコンと戸を叩く。荒っぽい、変なリズムになってしまった。

「どうぞ」

「……」

許可を下す短いその声に、ドアノブに掛けた手が攣る。

そうか。最後に言葉を交わしたのはあいつが一桁の年の頃だ。そりゃあ声も変わる。しかも最後の記憶なんてのは、おおぐずりの泣き叫びだ。

再度腕に力を込めて、極力何でもないような顔で扉を開く。こんなに重たく感じる扉は初めてだ。

「よお久し振り。おお、随分でっかくなったな」

「…とっ……」

此方を見るなり目を見開いて、まるで幽霊でも見たように固まっている。

「父様!? いらっしゃるなら連絡を…っ、いや、ええと……!!」

飛び付かんばかりに寄って来るルエイエを躲しつつ姿を確認する。

「なんだおまえ、母親に似てきたな」

「っ!?」

バツ！と自分の顔や頭を手で押さえ、何度も確認するように撫で付けた。

「いやっ、全体的に色味は父様似ですし髪質もっ」

「いやいいじゃねえか。あいつに似たら美人だろ」

色味なんか似たようなもんだし、髪も今は極端に短くしているがきつと伸ばしたらあいつと同

じようにカールが出る筈だ。

目に見えてしゅんとしたルエイエだったが、すぐに気を取り直して顔を上げた。

「どうぞ座ってください。話したい事はたくさんあります。紹介したい人もいますし」

「なんだなんだ、結婚相手か？ まだ早いんじゃないか？」

「そうですね、まだ早いのは承知ですので、ゆくゆくは」

「え」

冗談です、の一言を待つが来そうにない。真摯な顔で此方を見ている。

「……孫が出来るにや若過ぎるぜ……」

「すみません。孫の方は……お見せできるか解りませんが。ウイユ先生にかかっている、としか」

「ウイユ!？」

相手ウイユなの!？

後日紹介されたのはウイユではなかった。本当に安心した。勢いでこの変態！と文句を言いに行かなくて良かった。

因みに知った顔だった。だが、名前が変わっていた。彼には繁殖能せいせいべつがないので生体錬金術の一番だという事だったらしい。

塔には三日ほど滞在して、ルエイエともたくさん会話をした。最後に約束通り弟子の所へ寄ってからかわれた後。さあ帰ろうというところで猛烈な寒気に襲われた。

「私には会いに来てくれないの？」

音が聞こえるレベルで血の気が引いた。

「おまえ、仕事はどうしたよ」

「貴方に会う方が優先に決まってるじゃない」

美しく弧を描く唇。年齢不詳にも程がある。

「もうじき孫が出来るらしいぞ」

「フィアちゃんに会った？ いい子よね、あの子。私は好きよ」

義母が魔女とは同情を禁じ得ない。しかも気の毒に、気に入られてしまっている。

「あんま苛めんよ」

クスクスと笑って半身を絡めとる。

「ねえ、孫と同年の第二子なんてどうかしら」

勘弁して欲しい。

「：戻ってはくれないの？」

「うーん、やめとくわ」

伴侶と実子が自分を取り合って家庭崩壊：なんて体験をした事がある奴はいるだろうか。しかもふたりが強すぎて、もう全然間に入れない。

もう二度と味わいたくないあの空気。

伴侶と我が子に愛されている自覚がある。

だから、逃げるしかない。

【塔下の小料理屋の話】

樹歴 八七三年



盛況するのは良いことだが、と店主は汗を拭いながら店内を見渡した。

実に賑やかな店内を従業員が慌ただしく動き回り、店主自身も厨房で絶え間なく料理を作り続けている。

自分の目指した物とは少し違うかと、こっそり溜め息を吐く。もつと隠れ家的な落ち着いた空間を目指していたのだが。

最初の頃は順調だった。塔下街の表通りからひとつ曲がった場所に新しく出来た小料理屋。少し雰囲気は暗いが居心地と味はよく、すぐに一定のリピーターがついた。安価ではないが、価格と立地と味で集客のバランスは巧く取れていた。

それが崩れ始めたのはいつからか。明確に判っている。あの日、でっかい猫が来たのだ。

「見つけたー!!」

「…見付かった…!」

店の扉を開け放ったと同時に大声を出すその男に、店主は絶望の声を上げた。

ふんすふんすと鼻を鳴らして店内を真っ直ぐ進み、カウンターにどかっと腰掛けた。

「あの肉!」

「せめてメニューを見ろ」

そうは言いながらも、店主は諦めの境地で、仕込んでおいた肉を取り出した。

金の髪に褐色の肌、真っ赤な上着。並べ挙げれば学生時代と何も変わらない自由な男。三十を越えてもやんちゃな顔付きは健在だ。

「フィア結婚すんだって」

「知ってる」

最近はその話題で持ちきりだ。店主からすれば学友の話だが、世間からすればその相手側：塔の魔女が主題になる。学友が妙な噂の的にされないか心配になる。

「えらい相手を選んだな本当」

とは言え、猫や人喰いや己の複製品よりマシだろう。何度もやり直して選んだ相手だ。是非幸せになって貰いたい。

「ほら肉だ。付け合わせも残すなよ」

「うえ、なんで草付けるの……」

「野菜も食え。中年が肉だけで生きてこうとすんな」

小さく唸った後、ペロツと肉だけ平らげた。完全に残す気だ。店主が厳しい視線を向けると、フォークで野菜をつつく素振りだけをしながら話を再開した。

「まー、んで、けっこんしき？にお呼ばれしたので暫くこの辺に居たいんだけど。住み込みでちよっと雇ってくんない？」

「人手は足りてるんだけど」

「んーじゃちよっとお手伝いするから、三食昼寝付きで部屋貸して」

「人手は足りてるんだけど」

まあいいか、とその時は思った。同期のよしみだ。少しくらい居させてやるか、と。

それが間違いだった。

ジユウはとにかく目立つ。愛想がいい。店主の無愛想さは常連以外を受け付けない空気があったが、ジユウが居座るようになってジユウ目当ての騒がしい客も増えてしまった。ジユウが居なくなればまた落ち着くだろうが、今はとにかく忙しい。とんだ招き猫だ。望まれない。

当の本人は手伝うとか言っておきながら客との歓談に花を咲かせており全然役に立たない。しかも気が乗れば幻術でちよっとしたショーを披露するから、また客が増えた。結果店を回すためにバイトを雇う羽目になった。

結婚式の招待状は店主も貰っているが、挙式はまだ何ヵ月か先の話だ。この状態が長く続くと思うと店主の心労は凄まじかった。

出禁にするか、店を休業するか。

ジユウの空っぽな笑顔を眺める。

うん。まあ。

楽しくないと言えば嘘になるし、もう暫くは様子見だ。

【襲撃の話】

樹歴 八六五年*

「ルルイエ師。お出掛けかい？」

立ち上がった私に、ザイは此方も見ずに声を掛けた。勘のいい彼の事だ。不穏な気配を感じ取ったのだろう。

「ええ。ちよつと部隊の子たちも借りていくわね」

笑顔で告げると、軽く息を吐いて漸く私に視線を向ける。

「いいけどね…あまり面倒な事はごめんだよ」

「あら。貴方に言わせたら何もかもが面倒でしょうに」

まあ気を付けるわ、と適当に返して今度こそ宰務室を後にした。

折角だから、まずは…：…そうだ。出向させている部下の講師はたらきっぷりでも確認してみよう。

「驚いた。ちゃあんと先生してるのねえ」

生徒からの評判はまずまずだ。「堅いけど」「恐いけど」と某か付くにせよ、多くが「いい先生だ」と評していた。

「ああ、居た居た。——『動くな』」

「っ、」

指先で弾くように呪術を送る。狙い通り左腿にヒットして、華のように呪紋が広がった。

「何故…」

何故此処に居るのか、何故突然攻撃されたのか。呪縛の理由から答えてあげよう。

「ふふ。頑張っているから、それはご褒美よ」

二時間程度は動けまい。

訝しげな彼の頬に指を這わす。

「これから『合同演習』なの。良かったわね、貴方はど、ち、ら、の、味、方、も、し、な、く、て、済、む」

「!!」

焦りの色を垣間見て気分が良くなる。ああ。『非常時訓練』の方が良かっただろうか。そんな気もする。まあ何でも良い。後でザイが巧いこと纏めてくれるだろう。

従順な彼は私を呼び止める事も人を呼ぶ事もせず、ただその場に膝を着いた。

それでは始めよう。

まずは私が、塔を覆う防御結界を打ち払う。キレイに解除したっていいが、手始めの宣戦布告だ。派手に行こう。

最大出力で攻性術を展開、目標は塔その全て。絶大な威力を以てして全ての防御術式を一撃の下に剥ぎ取ってやる。

轟音が響き渡る。警戒又は臨戦態勢を取った講師たちがすぐに表に現れた。

「ふふふ。戦時下でもないのに良い反応ね」

連れてきた部下たちに魔術で合図を送る。

一斉攻勢開始。目標は、塔の陥落だ！

「母上！」

声と同時に、攻撃が届く。風の攻性術。威力は上々。でも定義がまだまだ甘い。届く前に相殺する。強い風が巻き起こり、私のフードを攫っていった。

「相変わらず小生意気ねえ。これが久々の再会の挨拶かしら？」

次は此方の番だ。組み上げられていく電磁の術式を見せつける。さあ、どう動く。発動前にどうにか出来なければ範囲内の生物の命はないぞ。

「母上こそ、相変わらずお若い！その本気の殺気、心までお若いとみえる！」

文句を言いつつも高速で術式の無効化を図っているようだが、ああ残念。これは間に合いそうにない。

「！」

発動間際、場に投げつけられたのは一粒の宝石。

「あらまあ小癩」

術式を飲み込み切れず、宝石は粉々に砕けて散った。

「横から失礼。ですが此処は学び舎。その危険な親子喧嘩はどうぞ他所でやって頂きたい」

苦い顔で入ってきたこの講師は見覚えがある。石を使った術を得意としていた——ああそうだ、確かファズといった筈だ。当時から封術を使っていたが、ここまで成長したか。

「ごめんなさいねえ。でもダメよ？ 私たち、塔の力を監査に来たの。ほら、貴方達の実力、教えてくれる？」

そこかしこで戦闘が起こり始めている。一応こちらも演習という態で連れて来ている。一部血の気の多い者もいるが、無駄な殺傷は控えるだろう。そう、つまり、魔術師以外には手を出さないだろうという意味だ。

ルエイエは厳しい顔を崩さない。

「馬鹿な。塔はもう戦力を育てる場所ではない。監査など」

「でも、ねえルエイエちゃん。貴方好き勝手やっているけど、塔は国の物なの。役立たずなら、要らないのよ？」

今回は本当に私的な思い付きでしかないのだが。口八丁は御手の物だ。

「それにしても」

エントランスゾーンで派手にやった甲斐あって、講師や上級学生が多く駆け付けている。

「ゾロゾロ出てきちゃったわねえ。攻城戦の心算だったのだけど」

これは単純な殲滅戦になるだろうか。自隊の練度を上げるというのも嘘ではない目的のひとつではあったが、期待できないかも知れない。飛竜隊まで連れてきたのに。

「空の護りは大丈夫かしら…」

見上げると、塔から放たれた数条の光矢。

「ご心配なく」

それは過たず飛竜を射抜き落雷の如き音を幾度と響かせた。

「塔の護りは盤石ですので」

「……」

視力を強化する。大きな弓を構えた人影が次矢を装填している。あの青の長髪は…

「そうね。あの子が居たわね」

魔弓の主候補だった弓使い。当時の塔でも指折りの攻性術士だった。

反対側の空では別の一団が燃え落ちた。あの広範囲を燃やし尽くす炎術はすぐに判る。

「スナフくんはあそこね！ふふっ」

すぐに魔術で連絡を送る。本当は近くで見守りたいが、エントランスの制圧は少しくらいは手間取りそうだ。

「さあルエイエちゃんとその他大勢。遊びましょうか。皆で来てくれて大丈夫よ」

楽しい宴の始まりだ。

ルエイエは魔女の攻撃を打ち消すのに必死で攻めが弱い。そんな片手間の攻撃ではこの魔女には届きはしない。強力な攻性術士が上空の防御に回っている以上、この場で戦力になるのはルエイエくらいだ。いや、此処に集まっているのも皆優秀な魔術師ではあるのだが、魔女の格が違いすぎる。魔女が多少厄介に感じているのは、ファズの封術と竜の娘くらいだろう。どちらも防御が主だが、リフレクトを警戒し魔女の攻撃は今のところ範囲攻撃のみに限られている。激しい攻防を交わしながらも、ルエイエの魔女は暇そうにふらっと視線を泳がせた。もうひとり、魔女の相手になりそうな人物が居る筈だが姿を現さない。それを不審に思っている。

「まあ出てこないのなら仕方無いわね」

魔術の相殺合戦に飽きてきた魔女は、ファズの持ち石が尽きるまで怒濤に攻め立ててやろうかと考え始める。

その時、塔の中腹に何か現れた。背に二、三軒家が乗りそうな大きさの、ドラゴン蜥蜴だ。魔女も思わず呆気に取られる。

「なにあれ！玄獣なんて飼ってたの!？」

言っではみたが、玄獣が飼えるモノではない事は魔女も解っている。だからこそ驚いており、その一瞬は隙となった。因みにあれは購買店員の私的なペットだが、飼育許可を出して良かったとルエイエは思った。世の中何が役立つかわからない。

ルエイエは好機を逃さず大術を組み上げる。漸くの攻勢チャンスだ。講師陣から多くの強化を

施されたルエイエの『鎌鼬』が放たれる。顔をしかめた魔女は舌打ちして地を蹴った。爆風と共に空へ逃れ、再び空を蹴るようにして少し離れた場所に着地する。直前まで居た空間は切り裂かれ、巻き返しの気流は草木を吸い寄せ煉瓦を剥がした。

「真空刃ねえ。危ないわあ」

はためくスカートを抑え砂を払う。局所的に一瞬で気圧を極端に下げる、中々に殺意の高い術だった。

すぐに電磁結界を張ろうとする人が何を、と思いつつルエイエは避けられた事に唇を噛んだ。

「有翼種の真似事を…」

「そりゃそうよ。そもそも魔術ってそういうものだもの」

有翼種の真似事をするために産み出された技術体系が魔術だ。有翼種のように自在にはいかないが、例えば。空気を圧縮し足下で解放する事で自らを撃ち出す。威力調節やその他の魔術で補助すれば極短時間の飛行も可能だ。

「因みに私やルエイエちゃんの『魔力』だって、彼らの力の劣化版ではあるけれど、大放ししたら少しくらいなら飛べるのよ？」

劣に見合わないからやらないけれど、と魔女は手を振った。

塔の一部から黒煙が上がっている。蔦に被われた通路を焼き切ろうとした者がいるらしい。生木が簡単に燃えるわけじゃないでしょう、と息を吐く。それこそ真空刃でフリーズドライにでもし

てしまえばよく燃えただろう。まあしかし、派手に上がる黒煙は塔の人間の焦燥を煽るだろう。

「ここまでかしらね」

魔女は両手を広げて顎を引く。足元には視覚出来る強力な術式が拡がっていく。ルエイエの顔に強い焦りが滲み出る。静寂の檻は使えない。体術では敵わないというのもあるが、何より。

ゴウン、ウウ……ン

「!?」

魔女は思わず上空を見上げる。見えはしないが、塔の頂上。瞬間移動のような速度で降ってくるそれに目を奪われた。

「が……ッ、!!」

その隙を衝いて放たれた気弾を喰らい、魔女は噎せ返りながら後退る。

「お待たせしました！塔の結界、再起動完了です」

魔女の目の前に、フィアはふわりと着地した。

「……やられた。貴方が？」

「飛び出していく学長から術式を託されました」

フィアは自らの手に持った虹色の宝石に目を遣った。

「まさか」

ルエイエはコートを開いて胸元の宝石を見せ付ける。同じ色のふたつの石は共鳴の光を放って

いた。遠隔操作での結界の再起動という離れ業。それを、魔女と戦いながら。

「出てくるのが遅かったと思ったけど、私の結界破壊の術式も解読済みなのね」
フィアが託されて塔の結界に追加したのはその術式の対策だった。

「この私相手に並行処理とは…舐められたものね」

それでいてあの鎌鼬。笑いが洩れる。

「いいわいいわ！許してあげる！成長してるじゃないルエイエちゃん！」

ガバッとルエイエを抱き締めてその頭を撫で回す。

「…引き上げを」

抱き締められた当人は顔を盛大にしかめつつも、大して抵抗はしない。周りの講師たちは呆氣にとられているが、フィアはそれに構わず、深刻な顔で上を見上げていた。

「…スナフ先生に、クドルの相手をさせたんですね」

ルエイエは我が子を撫でる手を緩やかに止めた。

「ええ。観察出来なかったのが残念」

「外道ですね」

フィアの静かな怒気に周囲に緊張が走る。折角落ち着いたのに魔女を刺激されては堪らない。しかし魔女は気にした風もなく。

「そりゃあそうよ。お誉めに預かり光栄だわ。私、魔女ですもの」

ルルイエから走った術式の気配に皆構えたが、それは彼の軍勢に向けられた引き上げの合図だった。

「抜き打ち非常時訓練はこれでおしまい。じゃあね皆さん。また来るわ」

そう言って踵を返した魔女がひとつ踵を鳴らすと、塔の破損箇所や焦げ落ちた竜たちはみるみる元の姿を取り戻していった。

初期状態の記憶と以降の総ダメージの記録の保持。彼もまた多大なハンデ付きで塔を相手にしていたのだ。立ち去る背にもう来るなど声を掛けつつ、ルルイエは悔しく思った。魔女の称号を奪い取れるのは、まだ少し先らしい。

「先生。スナフ先生を…慰めてあげてくださいね」

総点検に忙しく動き始めた人の中で、フィアはルルイエに向き合い、きゅつと唇を噛んだ。

「……解った」

彼らにとってフィアは親しくない他人でしかない。

「ねえフィア。もう一度…改めて知り合ったらどうだい？」

「……ええと…」

違う関係性を一から築き直すのはとてもこわい。ジユウもマキもカルタも、毎回同じ流れで知

り合っ、同じ様な関係性を築き直せた。しかし、スナフとクドルは状況がかなり違う。考えておきます、と小さく漏らした。

「…それで結局、お母様は何しに來たんでしょね？」

「ああ、それは多分…いつか君が僕に教えてくれた事だよ」

「戻ったわ」

「ご機嫌だねルルイエ師。面倒事はごめんだと伝えた筈だけだな」

「あら」

ルルイエが塔に向かった後、宰相は迅速に動いた。訓練という態の根回し。人員を手配して塔の観光区画での状況説明と避難誘導。国への正式な報告。

「ザイは優秀で、いつも助かるわ」

「師は奔放でいつも苦勞するよ。それで収獲は？」

「んゝ、ふふ。取り敢えず、うちの隊員は扱き直しね」

御愁傷様、とザイは心中で隊員たちに弔辞を述べた。

「やっぱり、偶に全力で魔力を使うとスッキリするわね〜！」

魔女は伸びをしながら隊員たちの元へと足を向けた。

【泣き虫竜の独白】

塔の歴史はまだ浅い。国の歴史はまだ浅い。

世界の歴史、ヒトの歴史に比べれば。

まだまだたったの八百年。

その八百年の間国を護ってきた、齡二千を超える竜の話聞いてくれるか。

ディエルゴの名を持って生まれた。悪^{エヴィル}き竜の名で呼ばれた事もある。いつしかダートと繋がり、知識の竜と呼ばれるようになった。今ではターミナルに繋がれた『国家守護獣』だ。とは言え、境遇は他の守護獣どもよりマシなものだ。この国を創った男は賢かった。隷属の鎖は殆どがフェイクに替えられている。こうして我を保っていられるのも、私くらしいものだろう。

例えば。ビナーの魚、名をグランチェスカ。彼は最早ただの獣。海底の禍などと呼ばれている。例えば。ケセドの蛇、名をシェレスキア。彼は最早死に体だ。僅ながら幼く変貌した人格を保持しているようだが、凡そ消えるのを待っただけの存在だ。例えば。ホドの兎、名をオルデモイデ。彼は賢明だ。殆どを眠って過ごしている。自我の消耗を極限に抑えているのだろう。偶に夢の欠片のように彷徨して出てくるようだが、多くの機能を未だに残している。だが、長く強くは動けない。このように、永くヒトと在るのは私くらしいものなのだ。

我らを国などというものに縛り付けたあの男は、白ホームの樹に世界を喰わせ異界へと飛んだ。推測される彼の目的は『この世界の存続』。言い換えれば、白ホームの樹の長命。その為のあ

らゆる手が打たれている。思わず感心してしまうほどに。異界へ渡ったのもそのひとつ。八百年の時を経てその種は芽吹き、世界の脅威のひとつであった玄霊は討たれた。

忌々しいターミナルもまたその手段のひとつ。あれは白ホームの樹の枝根。存在を記録し、可能性を繋ぐ。記録された存在は白ホームの樹の自衛手段として利用される。十匹のカラ・フィッシュ。聖霊なんて呼ばれても、所詮樹の使い魔だ。守護獣わくごとなんら変わらない。いや、それより酷い存在か。この国のカラはそれを嫌がり「おれさまを完コピして使役しよーなんざいー度胸だ。頗るハイコストに設定しておいてやったザマーミロ」と中指を立てていた。勿論。他のカラや守護獣は自らがどう使われているのかなど知らないだろう。何とどんな契約をしてしまったのかすら解っていないかっただろう。

さて。世界の脅威とは何なのか。幾つかの世界の終わりの要因は鬼神であり——つまりは結局の処、ヒトなのだ。魔女が焼き尽くした世界がある。開獄コロバチイロンの鬼神が目覚めて消失した世界がある。神秘が消え去り消滅した世界がある。これらはヒトの業に因る。自業自得の因果応報。世界を巻き込んで無理心中とは、なんと迷惑な生物か。

『起きた悲劇』を未然に防ぐ。それが世界樹のやり方だ。

そしてそれを利用したが故、この世界の塔は今も健在だ。塔の崩壊を世界の崩壊レベルに誤認させることで非常用アクセス権を獲得、『やり直し』を可能にした。力はかなり劣るとしても、間違いないアレは現代の有翼種だ。そんな稀な存在がタイミングよくそこに居たのは奇跡のよ

うだ。…いや。つまりは『奇跡が起きた世界』が此処なのだ。

塔の崩壊が防がれた事で、私にも新たな未来が開かれた。永く喪われていた記憶は蘇り…哀しくも、温かなものを見付けられた。ヒトと生きた記憶。私が愛したもの、私を愛してくれたものの記憶。はた迷惑な生物だが、面白く、愛しい。

私は国を護る存在だが、塔には破格の恩が出来た。ラッシーが建て、フィアが護り、ハトが学ぶ塔を。この先どれ程私が保つかは解らないが、出来る限りは見守っていききたいと思う。

【ラベゼリンの祭の話】

樹歴 八六七年*



「うおーい、ソーマ！」

授業後、今の授業内容をノートに纏めていたソーマは掛けられた声に顔を上げた。

「ケイナ」

ケイナはソーマのひとつ前の席の椅子に、背凭れを抱き抱えるようにして座った。

「ソーマ、ワーナー出身だろ？ ちょっと聞きたいんだけど、もうすぐラベゼリン神殿の祭があるらしいじゃん。どんなの？」

ケイナはリディウムの出なのでこの国の事はまだ知らない事も多い。いつも群れている友人たちもティアアラにコカブ、ビルグラントにマルジュ：他国籍ばかりだ。塔の生徒はワーナー出身者が多い筈なのに、言われてみると結構偏っていると気付いた。

「どんな：って言われても、詳しくないよ。花撒いてキャッチするヤツでしょ？」

特筆すべきはそのくらいだ。後は多くの祭でそうであるように、屋台が出て、酒が振る舞われ、ドンチャン騒ぎをする。勿論神官による祈祷やら何やら祭事は行われているのだろうが、集まる人々はまあ騒ぎに来るだけだ。

「行ったことは？」

「一回くらいはあるだろうけど、あんまり覚えてないかな」

「よし。じゃあ皆で行ってみようぜ」

ソーマは曆を思い起こす。

「うーん。まあ、オクの日なら」

「じゃ、前日の夕から移動な」

「えっ…泊まり？」

「当たり前だろ。当日移動してたらちよつとしか居られないじゃん」

朝経って昼過ぎに到着でも二、三時間は居られる。そもそも祭だって色々始まるのは九時からいからだろうし、そんなに気合いを入れて見に行くものでもないと思う。

「そんなに祭好きだったの？」

「あーいや…そういうワケでもないけど…折角だしさ」

まあ、時間に追われるよりはマシかも知れない。学友のワガママに付き合う気持ちで、ソーマはその約束を受け入れた。

（思ったより賑やかだ）

前日の夜用意した宿ではしやぎすぎたケイナたちが神殿に到着したのは結局十時頃で、会場は既にそこそこ温まっていた。お菓子や串焼きを売る呼子の声や、朝から酒が入ってご機嫌な大人たち。ラベゼリンの花のレプリカを手に走り回るこどもたち。二日酔いでグロッキーになっているケイナとユグシル。

「うつぶす…人多…。ちょっとあの辺で休んでるから、テキトーに見てきて。大丈夫、昼には治る」

そう言つて、ケイナは拝殿脇のベンチへ向かつて行つた。

「ごめん、俺も…」

ユグシルも続く。

「何しに來たんだか…」

ソーマは呆れながらふたりを見送つた。

「花撒は午後二時かららしいから、まあいいんじゃない」

「屋台回つて朝ごはんにしよー!」

「あのこどもたちが持つてる花、何処で手に入るんですかね?」

同じだけ飲んでいた筈なのに全く平常なピノとルカ、ネレーナは早速屋台を物色し始めた。

「元気だなあいつら。私だつて弱くはないんだぞ……」

「知ってる。ピナーの子はお酒強いみたいなのあるけど、あのふたり見てたら納得」

「ピノは回復かけてるかもだが、確かにあのふたりは素っぽいなあ」

ベンチから皆の様子を眺めてばやくふたり。

ふとユグシルが問い掛けた。

「思い出作り？」

「んー？ んー…。まあそうかなあ」

少しの沈黙の後。

「そろそろ就職決まりそうなんだよなあ。環境局行きたいつつたら講師になってからだ、つてさあ」

「そっか。じゃあ暫くは塔に居るんだ？」

それにケイナは首を振り、頭を揺らした事を後悔して項垂れた。

「おえ。…んーにや。講師の称号取得とともにティフェレト戻る。まあ暫くはちよくちよく行き来あるだろうけど、その後は数年行ったつきりかな」

「そうなんだ。頑張ってね」

「そっちなもな」

また暫く沈黙の後。

「あ、そう言えば。助手をひとり雇えるそうだから、ピノも連れて行きます」

「そうなの？ 寂しくなるなあ」

ピノの扱いは生徒のまま、ケイナの研究室に入ったという形になる。ケイナよりは塔に戻る機会も多くあるだろうが、基本は環境局に身を置く形だ。

「ごめんなさいね」

「へー、就職祝いの小旅行だったワケね」

「なるほど。はしゃいでましたもんね、と」

此方も此方で串焼きを摘まみつつピノから話を聞いていた。

「それならそうと言えばいいのに」

思い出作りなら、ハトも来てくれたかも知れない。いやどうだろう。でも可能性は上がった筈だ。解らないが。

「そういうの気恥ずかしいんじゃない？ ひねくれてるから」

あー、と面々から曖昧な音が漏れる。納得、ということでもいいだろう。

「んじゃま知らんぷりしといてあげるとして。でも花は掴ませてあげたいね！ 譲りはしないけど！」

ラベゼリンの神官が神殿の高台から花を撒く。

それを掴み取れた者は望みが叶うとされている。年一である祭だ。真偽はともかく、縁起モノなのだ。

「ルカ叶えたい望みがあるの？」

「もっちゃん！ 私もそろそろ就職狙っていきたいし！」

ぐつと拳を握り込む。

ルカは玄獣の保護を目的としたレンジャーになる事を目標にして学んできた。元々の体力や腕っぷしの強さもあり、あとは実践経験を積んでいくのみという処まで成長した。

「ネレーナは？」

「私は現状結構稼がせて貰ってますし」

何も働き始めたらず学生を辞めなきゃいけないワケではない。勿論就職先にも拠るが、例えばネレーナは芸事で稼ぎながら学生を続けている。芸術科の学生には珍しくない。

「ピノは？」

「あ、ケイナについてく事になってる」

ルカは「ん？」と首を捻った。

「ケイナの弟子になるって事になる…？」

「そうなるかなあ」

ケロリと肯くピノを皆で覗き込む。

「抵抗ないの？」

「あんまり」

元々引き摺り回されていたし、関係性にそう変化はないのかも知れないが…。

「まあ本来だいたい先輩ですしね、と」

「それはそうだけど」

自分だったら色々考えてしまいそうだな、とソーマは思った。

花撒の時間になり、神殿前の広場は凄い人混みとなった。六人はいつの間にかバラバラになり、それぞれに奮闘した。結果。

「取れたぞ！」

「おめでとうケイナ。俺も取れた！」

「いいなあ、私は取れませんでした」

「僕も……」

「ダメだった……」

皆が結果を見せ合う中、ルカは

「なんか私のやつだけ蕾なんだけど!!」

手にしたそれを掲げて大きく叫んだ。

皆が手にしているのは白い花卉の開いた花で、こどもたちが持っていたレプリカや祭のイメー

ジとして用いられている花も全てそうだった。

「この花一応天然だろ？そういうこともあるだろ」

「花には変わりないんだし、取れたんだからいいじゃないですか？」

皆のフォローを受けて尚口を尖らすルカに、見知らぬ人が近寄ってきた。

「蕾だったんですか!? 見せて貰っていいですか？」

吃驚しつつも、ルカは手の中の蕾を見せた。

「ああ、本物だ。寧ろ大当たりですよ！」

「? ? ?」

意図してひとつだけ、または少数のみ、形の違うものが混ぜられている…とか、そういうものなのだろうか。

「祭では形骸化されてますが、ラベゼリンは加護や利益を与える時蕾を投げるんです。キャッチ出来たら、その蕾は貴方の成功とともに花開く。大切に持っていて下さい」

一方的に言うだけ言って、その人物は去っていった。

「ええと？」

ポカンとする面々だったが、真っ先に気を取り直したのはルカだった。

「まあつまり、ラッキーレアって事よね！」

「良かったですね」

と、すぐにキヤイキヤイ騒ぎ始める。

「……なあ、今の」

ケイナは声を低めてユグシルを肘で突く。

「うん…学長の直弟子の…」

「だよなあ」

塔内で数度、学長とともに撃ち合う姿を見ている。攻性術には縁のないケイナもあれには感心した。最近はまだ派手な動きは見せなくなったから、若い子たちは知らないかも知れないが。

「あれ、カレシかな」

「さあ知らない」

彼が去っていった先には、赤い髪の軍人が彼を待っていた。合流したふたりは、仲睦まじそうに見えた。

「ラベゼリン！」

「おや。来ていたのか」

拝殿上空から祭を見下ろす祭神にフィアが声を掛けると、ラベゼリンはふわりと降りてきた。

「そっちは初めて見る顔だな」

クドルは無言でペコリと頭を下げた。

「これで漸く花が咲く！」

満面の笑みにラベゼリンもつられて笑う。

フィアは勇気を出して、クドルやスナフと知り合い直した。勿論元の関係とは大きく違い、時間も掛かったが、それでも再び仲良くなれた。

今回はその報告にラベゼリンの元を訪れたのだ。

「そうか。フィア。頑張ったな」

「！」

笑みから一転、泣きそうに顔を歪めるが、ぱん！と両手で顔を挟むと、より一層の笑顔を見せた。

「うん!!」

「フィア、そろそろ時間」

「あっ、うん」

クドルの口数は以前よりうんと少ないはまだ。少し寂しいが、仕方がない。

「あ。ラベゼリン。さっき蕾持った子に会ったよ。お気に召したんだ、珍しいね」

「珍しいと言うほどではない。オレは、前向きに強欲なバカは好きだからな」

去っていくフィアを見送る。『この世界』では、彼とルエイエは師弟でしかない。護られる関係を選んだフィアは、誰も選ばず、皆と仲良くやっている。それもいい。

フィアに心残りがあった為、彼の手元の花は塔が救われても咲いていなかった。本人が満足したのなら、これで花も咲いただろう。

ラベゼリンのもたらす成功は、花が咲く処まで。結実までは約束されていない。

「あいつの行く先は、見届けたいもんだ」

どんな実をつけるのかは、神にだって解りはしない。

* 【恋人の話】



「ねえフィアちゃん。マキちゃんとちょっと仲良すぎない？」

先輩は頼杖をついて、溜め息のようにそう吐き出した。瞬きで返す。あまりに今更な気がする。
「前々から羨ましくはあったけど。ちよつと流石に、仲良すぎない？」

「ええと」

どう返したものか悩む。

先輩は日に日に人間の真似が上手くなっていく。本人がそうだと信じて演技しているから、最早真偽も定かではない。

「…冬期休暇の予定は？」

「年越しはマキちゃんトコで鍋パ、新年はルエイエ先生について祝賀会と挨拶回りからの温泉旅行」

「ほら〜〜！」

先輩は顔を埋めて嘆き出した。

「そりゃあ縛りたくないし自由なフィアちゃんが好きだけど、流石に俺の事放置し過ぎじゃない？」

確かに、こういう事を言い出すのは珍しい。誰だ先輩に嫉妬なんて教えたのは。

「…カルタ」

「っ、」

名前で呼ぶと、怯んだ様に身を固めた。

「こうして『恋人』の枠にいるのは、カルタだけだけど？」

現に今同じベッドで寄り添って寝ている彼の頬に手を添える。

「実はグレッゲル祝祭も先輩の為に空けてある」

「……ホントフィアちゃんさあ……ズルいよね」

「何度も、ちゃんと好きだって伝えてるでしょ」

うん、と先輩は私の首元に顔を埋め直した。

「……それはそれとして、マキちゃんとはやっぱり仲良すぎ。鍋パ俺も行く」

まあたぶん。マキちゃんは許してくれるだろう。

【冬期休暇の話】

樹歴 八六六年*



「よし、お疲れさま。疲れただろう。ゆっくり休んでくれ」

宿泊施設に着くとルエイエは同行者たちにそう労いの言葉をかけた。それから眉根を寄せて付け加える。

「…まあ、同施設に厄介な客も泊まっているようだから部屋の外では重々気を付けて貰いたいが」

こればかりは仕方がない。

国主催の新年祝賀会に、ルエイエ、フィア、ナナプトナフト他数名は塔の代表として出席した。毎年、その後の数日分宿泊施設を用意して貰えるのだが…参加者の多くが同じ施設で過ごす事になる。会いたくもない人物と遭遇してしまう可能性も少なくない。

（今年は、ルルイエさんとクドルがいたものな…）

例年、自国での挨拶を終えると宰相はすぐにゼクトゥズへ向かいケテル王の誕生祝いに参列していた。今年は王が自ら向かったらしく、宰相及びその私兵達はここで年始を過ごす事にしたらしい。

それを知った際、フィアとルエイエは苦虫を噛み潰したような表情をした。

（タイミング悪くスナフ先生を誘ってしまった…）

しかし、とフィアは今は期待していた。クドルがいた。今ではフィアとも知り合い直し友達のような関係性を築けている。だがフィアはスナフとクドルの仲も出来ればあの時のようにと願っ

ていた。だから、これはチャンスでもある。

流石はラインストレート最高のリゾートホテル。リラクゼーション施設に遊技場、お洒落なバーやカフェ。色々入っている。

クドルを探して館内を散策していると、先に一番厄介な人を見付けてしまった。

「あらフィアちゃん」

「こんにちは」

隣に宰相が立っていたので声は掛けられまいと思っていたが、ルルイエも宰相も気にした風もない。

「ああ、君がフィアくんか。はじめまして」

「はじめまして」

権力者にどう対応していいか解らず、当たり障りなく会釈しておく。

「今はプライベートだから気にしないでいい。誰か探しているのかな」

「あ、はい」

気遣いに感謝しながら肯く。彼らならクドルの居場所も知っているだろう。

「クドルを……」

「あらあ。じゃあ呼んであげるわ。来るまで一緒に喋りしましょ」

えっ、と思わず宰相に目をやるがやはり気にした風もなく。

「じゃあ何か頼もうか。何飲む？」

「…ジンジャーエール…」

まるで近所のお兄さんくらいの気さくさに面食らってしまった。

「ねえねえフィアちゃん。お返しに、スナフクんの部屋を教えてくれないかしら」
ルルイエの魔女は悪い顔だ。

「…ダメです」

「あらなんでえ？」

「ルルイエさんは、先生を苛めるからダメです」

ルルイエはそれに心底愉しそうに嗤った。

「あらあら庇われてるの。そうよねえ、もうフィアちゃんの方がお兄さんだものね」

「そうなのかい？」

むむむ、とフィアは口をつぐむ。そういうつもりはないけれど、否定も出来ない。しかしそれを言ったら魔女も…いや、意外と同年以上かも知れない。女性は特に年齢が知れない。実子すら知らないその年齢をフィアに推測することは難しすぎた。

「ルルイエ師はスナフくんがお気に入りでからねえ」

「そうよ。私はルエイエを大事にしてくれる子は皆好き。ふふ。フィアちゃんもね？」
フィアは驚いてルルイエを見上げた。

「え、まさか、先生が『置いていかれた』のは」
ルルイエは当然のようにフィアを見返す。

「だって、あの子がよくないから」

私もあの人も居なくなつて、周囲に親しい大人が誰も居ないじゃ可哀想じゃない？と、ルルイエは髪を指に巻き付けながら苦い顔で笑つた。

「じゃあそう説明してあげてくださいよ！」

「いやあよお、あの子が逆恨みされるかも知れないじゃない」

そんな事にはならないと思うが、恐らくそれよりもスナフの落ち込み様を楽しんでの事ではと思えてしまった。

「ルルイエ師は誤解を受けやすいけど。意外と子煩悩なんだよ」

フィアにはその事実は意外過ぎた。可愛い子は苛めるタイプにも程がある。

「だって、先生にクドルけしかけてたりしたし……」

驚きのあまり口からポロツと溢れ出た。

「あれは、自分からお願いした」

「!？」

振り返ると、クドルが来ていた。私服姿は珍しい。

「クドル。フィアちゃんが御用だそうよ」

「何、フィア」

じゃあこの辺で失礼します、とフィアがクドルの腕を取ると、

「ああ、フィアくん」

宰相に呼び止められた。フィアはキョトンとした顔で振り返る。

「君の功績は、魔女と守護獣が評価している。王も宰相もその結果だけは聞き及んでいる。事が事だけに公にする訳にはいかないが——国は救国の勇士に『自由』を約束するだろう。覚えておくといい」

「——」

言葉が見付からず、フィアはひとつ頭を下げた。

「フィア、国を救ったの？」

「なんか、そういうことになったみたい」

救ったのは塔のつもりだが、結果的にそうなったみたいだ。守護獣というものにフィアは会っ

た事もないが、どういうわけか知られているらしい。

「それで、フィア。用事って？」

「あ、そうだ。ていうか」

その前に確認すべき事が出来た。

「スナフ先生と戦ったの、クドルの意思なの!? なんで？」

詰め寄るフィアにクドルは数度瞬きした。

「一度は本気の先生と手合わせしてみたかったから」

敵として現れたらその本気が見られると思った、と悪びれもせずそう答えた。

机上の空論を追い求める理論至上のロマン主義。そう評されるナナフトナフトだが、攻性術士としての腕は極上だ。何よりも火力が高い。得意とするのも炎術なので文字通りである。自惚れの強い性格も実力あつてのものなのだ。

その本気が見てみたい。そう日頃から思っていた。あの日、その好機だと思った。

「…因みに、勝敗はどうだったの」

「本気じゃなさそうだったけど、負けた」

あれ、と。フィアは気が付いた。淡々と言っているように見えて、これは。

「…悔しかったんだ？」

「……………」

言われて気付いたと言わんばかりのクドルに、フィアは顔面に徐々に喜色を浮かべていく。

「悔しかったんだ！」

「…なんで喜ぶ？」

「だって！」

それは感情の発露だ。歓びから覚えたあの時とは違うけれど。気付かせてくれる人が周りに居ないから発見が遅れただけで、クドルの感情は戻ってきている。

「やっぱり、クドルは先生の側に居た方がいい」

「それは——」

「いいのいいの、働いてたって里帰りくらいするでしょ！クドルの帰る場所は先生の処だもん」

クドルは何処か上の方に視線を遣って、

「…多分、怒られる」

「でも喜ぶよ！」

フィアに腕を引かれて歩き出した。

この休暇中は強引にでも一緒に過ごそう。偶には遊びに来易いように、迎え入れ易くなるように。

【冷蔵庫の話】

樹歴 八六四年*



ケイナはピノの事を気に入っている。

いつも澄ました顔の呪術学講師を動揺させた様はまあ笑えた。絡んでみれば、嫌味も素で通じないその性格もありがたかった。無意識に口の悪いケイナとしては、うっかり口を滑らせても深く気にしないピノは一緒に居易い相手だった。勿論、だからといって甘えすぎないようにには気を付けてはいる。出来ているかはともかくとして。

ピノはピノで、異国の地でよく構ってくれる同郷の先輩はありがたかった。

ピノが塔で初めての収穫祭を迎えた日。ケイナは彼が抱えた食料の山を見て忠告を贈る事にした。

「ピノ、部屋に冷蔵庫あったけ？」

「え、ないよ。でも冷暗所に置いとけば大丈夫じゃない？」

北国で且つ標高の高い塔は空気が冷たい。大概のものは冷暗所に置いておけば凡そ大丈夫だろう。……冬季以外は。

「冷蔵品は、冷蔵庫に入れたかないと凍るぞ」

「え!？」

冷蔵庫は冷やす為のものというよりは、『一定の低温を保つもの』だ。これからの時期、外気は冷凍庫級である。食材を守る為には冷蔵庫に入れないならぬ。

「嘘でしょそこまで寒い？」

「寒いっていうか痛いな」

塔の結界がある程度の防寒はしてくれているが、ある程度である。特に寮自室の暖房は自力で調達しなければならぬ。人によっては廊下の方が暖かいと言い、人によっては研究室や教室になるべく居座ろうとする。

ピノは熱系術の適正が高いので暖をとるのはお手の物かもしれないが、部屋を暖めれば今度は冷やす目的でやはり冷蔵庫が必要になる。

「おいくらぐらいですかね……」

震える声でピノが問う。まだピカピカの一年生、預金はあまりない。

「簡素なものなら？ 一〇〇はいかないだろ。？ 八〇かそこらで手に入るんじゃないか？」

仮にも術具。買おうと思えば安くはない。そして自作するにはまだまだ経験不足が過ぎる。

「ノルドさんに相談してみる」

「ああ、中古とかあるかもな」

ノルドは塔の学生相手に商売をしている——いわば『購買』の店員だ。金欠な学生たちの相談にも乗ってくれる。

「てことで安い冷蔵庫ないですか」

「今の時期はね、同じように国外から来てる生徒たちが慌てて買っていくから……在庫としては持てないね」

あからさまに落ち込むピノに慌てながら、ノルドは「でも」と付け足した。

「まだ時期も早いし、廃棄場を見に行ってみたらどうか。運が良ければ無料だよ」

無料という言葉に目を輝かせ、ピノは立ち直った。

「ありがとうノルドさん！見てくる！」

塔の学生は千差万別、若人から老人まで様々な人が国籍や身分を問わず学びに来ている。ハトのように貴族の子息もいるのだから、この時期、買い換えた古い冷蔵庫が棄てられている可能性はある。廃棄場に置かれたものはフリー素材だ。塔の住人であれば誰でも持っていて良い事になっている。

しかし、いくら探しても使えそうな冷蔵庫は見付からなかった。ひとつ比較的状态の良いものを見付けたと思えば、肝心の要石が外されていた。これではどうにもならない。諦めて手ぶらで戻ろうと立ち上がると、ケイナの声がした。

「お。いたいた。どうだ？使えそうなんあったか？」

「ないよ」

ピノの足元の冷蔵庫を眺め、ケイナはよしと頷いた。

「最終手段だ。そいつがあつたのはラッキーだったぞ」

訝しむピノをケイナは指先で招いた。

「それ持つてついて来い。但し多少金は掛るぞ」

「先生。課外授業をお願いします！」

購買で買ってきたまっさらな要石と冷蔵庫の外側を突き出して頭を下げる。

術具作成用の石は教材として購買で三〇程で手に入る。ケイナ曰く、の最終手段。学生の権利の行使である。

「なるほど…」

鉱石学講師は全て察した顔で溜息を吐いた。

「いいだろう。おいで。教えてあげよう」

そうしてピノは鉱石学講師の厳しい監修の下立派な冷蔵庫を完成させた。

術具作成術の講師は興味を引いたもの以外そこそこテキトウなのでケイナは選ばなかった。ノルドではお金を払わないと失礼だ。鉱石学講師は面倒見も良いが何より『手を抜かない』。まだピノの力が及ばない部分は講師が補ってくれる上、故障や不具合が出た際は相談という形で補修も受けられるだろう。

「はゝ助かったゝ。ありがとうケイナ」

「おう良かったな。自作とはいえ、並の安物よりはいいぞソレ」

「へへへ」

多くを手伝って貰ったとはいえ自作は自作。愛着も湧く。

「ケイナも結構面倒見良いよね」

「気が向いた時だけな」

これは照れてるなーと思いつながらも、ピノは黙って食材を冷蔵庫へ詰め込んだ。

【塔の噂話】

塔は名の知れた施設なので、巷では色々な噂が出回っている。入学に向けて情報を仕入れる際、凡その生徒はそれらの噂に触れただろう。

例えば。塔には結界が張られており、相応しくない人間を弾くとか。弾かれた人間は塔の中階に留め置かれ、時間をかけて洗脳されているらしい。

例えば。高い高い塔の上は、煌月に近くなる分発狂しやすくなるとか。ターミナルを介してやってきた旅人が、激しい眩暈や頭痛を訴えるケースが間々あるらしい。

例えば。塔……というよりワーナーとモンテスクの人間は総じて舌バカであるとか。薄味を好む癖に作る料理は味が濃い、と他国ではバカにされている。「塔に行く」と言う「舌がバカになるぞ」と返すテンプレートまである始末だ。

入学してから聞く噂もある。

例えば。寮で自炊すると早死にするとか。占術が非公式に宣言したとかで、信じる者も少なくない。

さあしかし、噂に踊らされ難いのが塔の住民の良いところ。見事入学を果たし学び出せば、数年も経たずこれらの噂の原因、真実は解るだろう。

塔は、『山』なのだ。

【特別課題のその後の話】

樹歴 八六四年*



「聞いたよガイくん、この時期は下着を贈るのが最近の若い子のトレンドなんだって？」

錬金術学の老講師から振られた話題に、呪術学講師は思わず噎せ返りそうになった。

「……誰からそんな話を」

「医学の若い子。去年君がたくさん貰ってたって言ってたよ」

決して表には出さず、あのヤロウ……とガイは口の中で悪態を吐いた。

未だ精力旺盛なこの老師と医学講師は趣味が合うらしく仲が良い。度々酒を共にしているようだが、悪い影響も受け合っている。

「去年の特別課題の件はともかく、流行っている……という訳ではないですよ」

性質の悪い老人だが一応恩師である。某か恥をかかないように情報を改めてやる。

「なあんだそうなの。サイズとかあるし難しそうだなあと思ったのよ」

「……」

昨年贈られた下着たちはサイズもピッタリだった事を思い出しながら、ガイは口を噤んだ。

「今年はやんねーの？」

「思った以上に大変だったのよ」

やってくるなりスルッと会話に入り込んできた元凶に溜め息混じりに応えると、パールは「ふーん」と気の無い返事をしてダリの肩へ腕を回した。

「それよりダリちゃん、『エディブルフラワー』予約とれた。しかもアリーちゃん居るって。

これからだけどう？」

「そりゃ君、行くに決まってるでしょ。凄いいじゃない」

「だろだろ？あ、ガイちゃんも行く？」

「遠慮しておきます」

いつまでも若くて結構なことだ。

静かになった席でひとり、ガイはグラスを傾けた。

「もう此方を向いてもいいと思うが」

「……」

此処は塔の飲食街にあるバーだ。カウンターの向こうで存在を殺し頑なに此方に顔を向けないバーテンに声を掛ける。

「では君に注文をしよう。なにか、今流行りのものをひとつ」

バーテンは諦めたように振り返る。接客業にあるまじき全力の「嫌な表情」を浮かべていた。

「承りマシタ」

手慣れた様子で計量と攪拌を行っていく。錬金術学のホープは、実に手際よく完成させた一杯をしかし乱暴に差し出した。

「オマタセシマシタ」

「ほう？」

白濁した青緑の液体に、削られたチョコとミントの葉が散らされている。こっそり楽しみにもしていたが、下手な悪戯はされていないようだ。口をつければ、香り通りの甘くて爽やかな味がした。

「この時期贈り物に人気なのは、チョコつすよ。……あー、まあ、言われるまでもないでしょうけど」

フフと笑ってもう一口。

チョコは未だ高価ではあるものの、少しずつ値は下がってはきている。なにせ塔では需要が多い。こうして酒にまでなっているのは感慨深い。

「処で君、このミントの真意は？」

「お似合いかなと」

含みのある表情だとは気付いても、流石にそれ以上は解らない。

「…ふむ、まあ悪くないね」

「アリガトウゴザイマス」

まだゆっくりしていく気だと察して、偶々この日この時間に手伝いを頼まれたタイミングの悪さを呪ったケイナだった。

【攻性術と癖の話】

樹歴 八六八年*



「先生、手合わせをお願いします！」

「手合わせ？」

突然の私の申し出に先生はちよつと面食らつた様だった。でもすぐにバカにして鼻を鳴らした。

「このぼくに攻性術で挑もうと？ ルエイエの弟子、調子に乗りすぎだ」

だって。クドルから話を聞いて以来、私も挑んでみたかったのだ。

期待の詰まった私の視線に、今の申し出を取り下げる気はない事を理解したらしい。

「なら来い。ルエイエと競る程度でよくに挑んだ事、後悔させてやる」

結論から言うと、こてんぱんにやられた。ここまでとは思わなかった。実践経験の無さは先生だつて似たようなものだろうと思つていたが、そうでもなかったのかも知れない。魔術の威力や技術は同等か少し負ける程度だと思ふのに、戦闘技術が段違いだ。更に腕力や体力も加えたらお話にもならない。

「つよっ」

「あたりまえだ」

本当に当然という態度で、座り込んだ私に近付く。それから少し難しい表情をして私を見下した。

「おまえ、攻性術を誰に習った」

ギクッと肩が跳ねる。

あなたからです、とは言えない。言えないが、恐らくそうであることを感じ取られている。あ
あしました。ルエイエ先生にも手合わせの時に疑念を抱かせたらしいし、また考えなしにやつ
てしまった。先生というのは意外とよく見ている。

とは言え、教えた記憶もないのに自分から教わったとは考えられないもの。先生は頭が痛そう
な様子で考え得る最も有力な説を構築した。

「クドルか？」

「あ！はい」

それだ！と食いつく。それは如何にも無理がない。

「……まあいい」

納得はいかないが他に考えあたらな、そんな感じだ。

「とにかく、満足したか？」

「ありがとうございます！またお願いします！」

いやはやしかし、これは悔しい。クドルが悔しさを覚えたのも当然だ。

ルエイエ先生はバランス型だ。凡そ全ての魔術を平均以上に扱える。対してスナフ先生は特化

型。専門分野である攻性術に突き抜けている。ルエイエと競る程度で、と言われたときは正直むっとしたが、そこはまあ当然で、仕方の無い事だった。だから悔しいのはそこじゃなくて。決して先生を低く見てはいなかった。どころか優秀な攻性術士だと理解していた。それでも足りなかった。上をいかれた。しかも余裕気に。これが悔しい。

先生が私を褒める度に言っていた「ぼくには及ばないが！」が今になってジワジワ効いてきた。

「先生が凄く強かった」

「うん」

私の報告にクドルは力強く肯いた。それからふと気付いた様に

「手合わせして貰った？」

「うん」

「羨ましい」

今は「羨ましい」が言えるようになったことへ祝辞を贈る余裕もない。

「凄い悔しい」

「うん」

クドルは再び力強く頷いた。

「クドル、隊の人達と手合わせとかする？」

「望まれれば。三対一とか、集団相手が多いけど」

それは、手合わせとは少し違うのでは。

「最近はあるまり誘われなくなった」

多分、その条件でもクドルが勝つからだろう。そんなことをする術士では程度は知れている。とは言えやはりルルイエの魔女の弟子の中でもスナフ先生は特別優秀だったんじゃないだろうか。それでも連れていかなかったのだから、ルルイエの魔女は本当に我が子を優先したのだろう。

「よし、クドルちよっと手合わせしよう」

「いいけど。訓練場、借りられるかな」

割と良い勝負が出来たと思うけど、負けた。

そりやもう就職もして本職にしているのだ、学業として学ぶ程度の私に負けてはいられない。しかしそれはそれ。

「悔しい〜ッ!!」

「うちの隊の半分以上には勝てると思う」

「フィアちゃんは体術が弱いよねえ。魔術だけなら申し分ないのだけど」

「!!」

そりゃあ居る。此処は治安維持部隊のホームだ。その訓練場を借りたのだから、部隊長が現れる事に何の不思議もない。

「あの子と一緒にね。ふふ」

「く、訓練場をお借りしまして……ありがとうございます……」

「あら。ふふふ。いいのよ。態々敵地で手の内を見せてくれるんだもの。安いものよ」
敵地……。そんなつもりはないのだが、此処は敵地……。なのだろうか。

「フィアは敵にはなり得ません。国から自由を約束された身の筈です」

「そうだったわね。フィアちゃん個人は、ね」

そう言えばそんなこと言われたな、とクドルのフォローを聞いて思ったが、魔女は不穏を漂わせたままだ。まあ、事が起きれば私は塔の——ルエイエ先生の味方をするし、敵になるだろうけど。けど、事ってなんだ。起こさないで欲しい。

「フィアちゃん、私とも手合わせ如何かしら？」

「お受けしたいのは山々なのですが、体力が……」

一戦終えた後だ。連戦で魔女の相手はキツイ。

「あら、足りないのは体力でしょう？ 完全な魔術戦にしましょう。お互い場所を動かない。先に大きく場所を動いた方が負け、というのはどうかしら？」

「ええと……じゃあ三十分休憩を下さい」

「あんまり手の内を見せるなと警告を受けたのに、なんで応じちゃうの」

「うっ…だって、興味あるし…」

先の襲撃の折、私は手合わせ処か魔女の戦いぶりすら見ていない。魔術界最高の魔術師の腕前を見てみたいと思うのは仕方ないだろう。

「ほら、こっちはもう見られちゃったから、今度は見せて貰う番ってことで」

魔女の戦い方はルエイエ先生にそっくりだった。なるほど。実際そういうのって意外と解るんだと感動する。さっきのクドルの戦い方は、スナフ先生の教えと魔女の教えをどちらも取り入れたものだったと今なら解る。

「貴方攻性術に関しては完全にスナフくんの弟子ねえ」

「長い間お世話になりましたので！」

「ふふ」

魔女は嬉しそうだ。何故かは解らない。

「スナフくんが知ったら吃驚するわね」

「実はうっかり吃驚させてしまいました」

「あらまあ。ああ、だからクドルさんと手合わせしに来たのね」

流石魔女。理解が早い。

何かの折りに裏を取られてもいいように、クドルとは偶に手合わせをする、少なくとも一度はしたことがある、という事実を作りに来たのだ。

それはともかく、スナフ先生やクドルの時より対応出来ている。と思う。魔女の術構成がルエイエ先生と似ている分、馴染みがあつてやり易い。ただルエイエ先生よりも遥かにいやらしくはあるけれど。

「スナフくんもあの子も、技術はあるけどなんというか『素直』なのよね。フィアちゃん、私の戦い方を覚えて帰りなさいな。少しは歯が立つようになるかも知れないわよ？」
それは…魅力的なような、とんでもない罠のような。

「例えば：スナフくんやクドルくんとやるなら、こんな感じね」

リズムが変わる。相手の術式を利用して防御と同時に攻撃へ転じさせる絡めとるような一手。相手の術の威力に依存するので、格上との対戦に有効だ。

「石を使つたりフレクトは確かファズくんが得意だったわね。あれ本当戦い難くて嫌だわあ」なるほど。今度封術も履修しておこう。

貴方もやつてごらんなさいとばかりに魔女が『素直な』魔術を放つ。先程見せられた通りにやつて返すと

「うわあ!？」

何か凄く持っていかれた。

弾みで、大きく動いてしまった。私の負けだ。

「……えー……」

「ふふ、楽しかったわね？」

「……はい」

洩々肯く。最後の騙し討ちは納得いかないが、楽しかったし参考になった。

「今のは」

「ドレイン。隊長の隠し技。触れた術式を展開中の術士：魔力持ちから魔力を奪う」

決着を確認したクドルが寄ってきて説明をくれる。つまり、私かクドルカルエイエ先生くらいにしか使えない技だ。

「見せるとは思わなかった」

「サービスよ。フィアちゃんにはこのくらい捌けるようになって欲しいもの」

「……ありがとうございます」

手合わせの礼をする。魔女はにっこりと応じた。

「この訓練場は頻繁には使わせてあげられないけれど、私たちの攻性術が習いたければディマスキュンに教えを乞うといいわ。塔に出走している部隊員よ」

聞いたことがある。堅くて固いと噂の、基礎攻性術の先生だ。

「考えてみます」

「攻性術は色々な先生から教わった方が有用よ。それこそ、攻性術以外でも。貴方の幻術を交えた戦い方、悪くないもの」

「ありがとうございます」

魔女に褒められた。これは素直に嬉しかった。

「隊長」

物言いたげなクドルに、フィアを見送ったルルイエはにっこりと微笑んだ。

「あの子、きつととてもイヤなカオをしてくれるわ」

「師は本当に人が悪いね」

「あら見てたの」

現れたザイにクドルはサッと礼を取る。ルルイエはいつも通りだ。

「可愛い弟子の戦い方に知らない間に貴方の陰がちらつくようになっていたらそりや面白くないでしょう」

「でも、弟子の成長は嬉しいのよ。複雑でしようね」

本当に愉しそうに笑う。

知らず溜め息を吐きながら、クドルは友人の行く末に思いを馳せた。

【攻性術と三十年分の十年前の話】

樹歴 八六八年*



「フィアちゃんさあ、そんなに攻性術に興味あったっけ？」

頼杖について、先輩は私を見つめている。

「うーん……」

そう言われると少し返答に困る。

多分、先生たちと競い合える、肩を並べられる技能がそれしかないからうつかり嵌ってしまったのだ。それも三十年分のズルがあつてこそで、もう既に貯蓄が切れて置いて行かれつつある。だから余計に勉強熱心になっている。

先輩の何気ない一言でそんな事を考えてしまつて少し落ち込む。ただ、

「楽しくて」

それは本当だ。

「そうなんだ。フィアちゃん呪術取つてたっけ。あれも一応攻性術だよ。呪術なら教えてあげられるんだけどなあ」

そういうえば呪学は担当講師が変わつて、今は名称も『呪術学』になっている。それに伴いウィユ先生は生体錬金一筋になってイキイキしている。まあ今となつては担当がウィユ先生だからと避ける理由もないのだが。なんとなく未だにあの人は苦手だ。

「新しい呪術学講師も結構癖のある人だけだね」

「先輩取つてるんですか？」

呪学は修了していた筈だ。

「どんなものかなーと思って、一度ね。やっぱり教える人が違うと得るものも違ってくるから」
ルルイエの魔女と同じことを言う。そういえば魔女も呪術が得意だった。

「呪術か…でも多分、多分向かない…」

「ふふ。うん。そうだと思う」
なんで勧めた。

「君か。私から攻性術を習いたいというのは」

テンプレートでもあるのだろうか。既視感を誘うセリフに一瞬気持ち揺さぶられた。

私が訪れたのは治安維持部隊から出向している攻性術講師・オブシディマス先生の元。塔の体制変換時から変わらず『見張り役』として機能しているらしい。

特待の期間は入学後六年。特別授業を受けられるのもその間だけだ。私は五年も前に切れている。だからこれは個人的なお願いなのだが。

「ルルイエ師から聞いている。君から望みがあったら通せと」

お願いのつもりだったのだが、命令だったらしい。申し訳ない。

「君が何度か学長と術戦を行っていたのを見た事がある。私は基礎攻性術を教える身だが、何

を望む？」

「ええと……ルレイエさんから、先生なら『そちら』の戦い方を教えてくれる、と」

「了解した。では場所を移ろう」

その長身の背を追う。身長はスナフ先生と同じくらいだと思うが、やたらがっちりして大きく見える。堅くて固い。噂通りだと早々に理解できてしまった。

クドルだった。もう完全にちよつとよく喋るようになったクドルだった。いやクドルより更に少し融通が利かない。立場的に言い包めが使えない所為かもしれない。

「あいたたたたた……ッ、ちょ、痛い痛い！」

「ああもう……普段身体動かさない癖にいきなり動くから。もう若くないんだからね？」

部隊式の戦闘訓練を受けた私は打ち身の痛みや筋肉痛に襲われている。呆れ顔の先輩は完全に介護者だ。でも私はまだ二十代だから。私はまだ二十代だから！

「だって魔術……魔術は筋肉なんて使わないだろ……！」

「攻性術やるならそうとも言い切れないよ。身体が資本だから」

ぐぬぬ。スナフ先生は現状の身体での体の動かし方、捌き方は教えてくれたけど、鍛えろとは言わなかった。実践魔術を教えているわけじゃないからということだったのだろう。考えてみ

れば先生自身は意外と鍛えられたいい体格をしている。パツと見は判り難いけど。

「ウイユ先生もあれ多分筋肉ついてるんだよなあ呪術士の癖に」

先輩がぼそと呟く。前体制の塔は基本身体も鍛えさせられていたのだろう。実戦に向けて育てられていたのだから当然といえば当然だ。そうだった。

そこへ、ノックが響いてマキちゃんがやってきた。

「あれ？ マキちゃん？ どうかした？」

「いや、笑いに來た」

「帰って」

ギチギチと痛む筋肉を無理矢理動かしてマキちゃんを押し返す。意に介さず、まあまあと言いながらしれっと入ってきた。

「ディマス先生にボコボコにされたって聞いて」
相変わらず耳の早い事で。

「はいはい、年甲斐もなくってんでしょ」

「年甲斐？ 今更だろそれは」

「なんだと」

マキちゃんだってひとつしか変わらない癖に！

「そうじゃなくて。なんで近接系に行っちゃったの。旧体制で学びたいんだったら遠距離系の

マツリ先生の方にしたら良かったのに」

「遅いよ!」

やはりおかあさんには相談した方が良かったか。しまった。

「いや…いやいやマキちゃん。マツリ先生は…」

「? 何かある?」

「かなり厳しい人だから。筋力体力付くまでは本題教えてくれないだろうし、そもそも多分授業外では教えてくれないと思うかな」

それにマキちゃんは「あー」と納得の音を漏らした。

「それもそうか。じゃあ妥当だったな」

「…っふ!」

「フィアちゃん?」

いや。なんか笑ってしまった。懐かしい気もするけど、ずっとこんな感じだ。十年経っても何も変わってなくて。成長の無さは笑い事じゃない気もするけど、でもなんか、うん。

「あはは! ッたたた!」

腹筋が!

笑った拍子に腹筋が痛んで、マキちゃんに指をさして笑われた。

【緑化計画立ち上げ時の環境局での話】

樹歴 八六八年*



環境局でその報を一番に受け取ったのはケイナだった。

「……………」

塔からの手紙を難しい表情で眺めていると、背後から師と助手が覗き込んできた。

「なんのお知らせ？」

「呼び戻しですか？」

「いや…」

チラリと師に視線をやり、一瞬迷うが、直ぐに口を開いた。

「マスカルウインの緑化始まるらしいです。事前調査への同行依頼が来ました」

「へえ！ 漸く！」

ただでさえいつも驚いたように開いた眼を更に大きく開いて、目がこぼれ落ちないか心配になる。

「中々始まらないから、気を揉んでいました。良かったです」

「……………」

師の発言に、再びケイナは顔を顰める。

「どうしました？」

「トビオカ先生ずっと準備してきたんだから、嬉しいニュースじゃん」

「それだよ」

ケイナはピノに指を突き付けた。

「ずっと準備してきたトビオカ先生じゃなくて、私に第一報が入るってどういうことだ。失礼じゃないか？」

「それは——」

ピノも押し黙る。

「私に報せればトビオカ先生にも伝わるだろうが」

「ならいいじゃないですか」

「よくないでしょう！」

トビオカは玄霊が討たれ塔の体制が変わった頃からこの時を見据え、研究を重ね準備し、宰相や魔女に呼び掛けてきた。そんな人に第一報を寄越さなくてどうする。怒れるケイナにトビオカはまあまあと手を翳した。

「それはですね、トビオカくんはまだ来るな、ということですよ」

ピノがキョトンとトビオカを見る。

「トビオカくんは間違いなくこの緑化計画の先導研究員になります。一番準備してきたのを、皆知って来ていますからね。今回は正式な計画発足の前の事前調査。トビオカくんの出番はまだちょっと先、ということですよ」

教え子ふたりは未だ納得いかずという表情で、トビオカは笑って付け加えた。

「おふたりはマスカルウィンについて詳しくないかな？ 安全の確認が出来ない内は主要研究者は送れないってことです」

立ち入るだけで発狂する、玄霊直下の危地。玄霊が居なくなった後も影響は色濃く、未だ立ち入れないと噂されている。そこへ赴くのだ。いきなり主要戦力を投入して万が一になってはならない。

「うーわ……」

ケイナは寧ろ今までで一番イヤな表情をして開いたままの書面を見下ろした。

特に興味もない、縁も所縁もない土地の命懸けの緑化計画。自由時間が限られているケイナには更々面倒でしかない。

「いやあ羨ましいなあ。トビオカくんも早く参加したいです。まさか蹴りませんよね？」

「……………」

師からの圧が凄い。

ケイナは視線を彷徨させつつ、なんとか逃れる術を探した。

「……代打、ピノ行ってきた。精神異常耐性高いだろ」

「そうなると思った」

ピノは眺めていた書簡から目を離した。

そもそもこの差出人からして、ケイナは受けないだろうと思っていたのだ。

【恋する魔女の話】

樹歴 八三〇年



一見何でもないような少年だった。他国からやって来たのが少し珍しいかもという程度。呪術の伝わるホドの地でも医術の盛んなケセドの地でもなく、商業と芸術の都からわざわざ魔術を習いに来た少年。特別攻性術に秀でているわけでもないのに、何故こんな者を招き入れたのか疑問だった。

氷のような奴だと思った。一桁の年齢で塔に在籍している天才児。やたらとフリルやリボンを纏っているが、その鋭利な眼差しが幼さを掻き消している。冷めた眼で全て見下した様な無表情のクセによく嗤う。次代の塔の代表になるだろうと言われているが、これで人がついてくるのか疑問に思う。

その少年は術具作製の天才だった。呆れるほどポコスカと術具を考案し特許を浚っていった。革新的な発明の数々に、現代魔術は新時代を迎えたと評された。古代種のような私にはあまり関係のない話だ。

そのこどもは本当に天才だった。呆れるほど万能で、見聞きしたことを丸ごと覚えているのかと疑うレベルの知識量。齢十一にしてこれ以上成長の余地はないのではという完成度。バカを言え。どうみても伸び悩んでいる、犠牲にされた部分があるだろう。

「コミュニケーションを取れ」

「必要だろうか」

「だろうよ！そこがおまえのノビシロしろ」

外で育った少年は馴染んだ魔術師たちとは少し感性が違っていて、ちょっとだけ行動が読み辛い。忙しい時に變なのに絡まれた事に溜め息を吐き立ち上がる。

「私は今から忙しくなる。控えてくれ」

不服そうながらも一歩下がった彼に一度向き合う。

「おまえなりの氣遣いだったと受け取っておく」

「お、おう」

「これから発表する事だが。先程父が亡くなった。これからは私が代表だ」

高い位置で結っていたリボンを解いて髪を流す。背後でポカンと口を開いていた彼が言葉を思い出したのは、私が部屋を出てからの様だった。

代表就任も就任挨拶も、スマートで堂々としたものだった。歳若さなど問題にされないほどの圧倒的な実力と風格。だがそれは魔術師としての、だ。アレに塔の運営など出来るのだろうか。代表就任後から、彼女は自ら攻性術の教鞭を執っている。万能ながらに彼女が最も得意なのは

呪術の筈だが、選んだものは攻性術だった。むちゃくちゃ厳しいらしい。ついてこれない者は容赦なく落第させる。その内に『氷の魔女』なんて呼ばれ始めた。お似合いすぎる。

「ならいつそ、もっとそれらしく振る舞ったらどうだ？」

何を言い出したのか、と彼を振り返る。

「思うにあんた、いや失礼。先生、真っ直ぐ過ぎるんだよ」

「そんなことは初めて言われる」

性格が悪いと噂されているのはよく聞くが。

「そりゃコミュニケーションサボってきたツケだ」

「む……」

「先生、会話が足りてないぜ。あんたは一を聞いて百を知るんだろうが、塔の人間でも精々十だ。一般人なんか一は一だ。んで、あんたは自分が解っちまうから一すら発信できてない」

「だから、必要ないだろう？」

「違う違う、言葉は他人を動かせるんだぜ」

「私は呪術は得意だが」

「ええつとなあ……」

彼はガシガシと頭を掻いてから、腕組みをしてうーんと唸った。

「例えば、笑顔だ」

コミュニケーションという大枠の話に戻ったらしい。

「あんたが優しく微笑めば、相手を魅了させられる。逆に冷たく嗤えば、心臓が冷えて疎み上がる。笑い方ひとつで、魔力消費もなしにそれだけ出来るんだぜ？損はないだろう？」

理論上それは知っている。表情ひとつ、言葉ひとつで呪術の効きだって変わってくる。ただ私はその小細工を必要としない。でも解る。彼が伝えようとしてくれている真意くらいは。

「あんた絶対美人になるし」

「……今は？」

無駄な質問が口をついた。

「お？おう、今もキレイだろ。成長したら効果範囲が広がる」

「ふーん。じゃあ、『貴方』に効くようになるまで後何年？」

「……ン？…あー、五年くらいかな…？」

「ふふ。解った。練習しておく」

今のは巧く笑えていなかったのだろうか。目の前で苦い顔をして見せる彼と目を合わせる。

「私はルリエ。改めて、貴方の名を聞かせて欲しい」

「……エリス。エリス・リル・ラーレ」

「顔に似合わない繊細な名だ」

「気にしてんだよ……」

「いいじゃないか」

そうか、確かに彼の言った通り。私は私の考えを他人に伝えようと思った事がない。全ては私が対処すればいい事だと思っていた。でも、例えば。

「かわいいと思う」

「ッ！」

真ッ赤になったこの表情は、今私が伝えなければ見られなかったものなのだ。

そうして魔女は他人を翻弄する愉しみを覚えてしまった。氷を融かして現れたのは、毒々しい程に艶やかな大輪の華。元々解り辛かった優しさは言葉に飾られより解り辛くなった。

「ああ、うん、ルルイエくん。お父さん亡くなってからだいぶ変わったものねえ」

「あらあら。アレは恋の力よ。あのくらいの年頃はそれで変わっていくものよ」

ダリとユーリカの思出話を背で聞きつつ、ザイは溜め息混じりにグラスを傾けた。

（師は、まだ恋の途中なんだよなあ）

こどもができて距離を取られても変わらない。幼年期に完成してしまった彼は今も中身が成長しない。小さい時から大人で、大きくなってもこどものままだ。いつまでも家族愛に変わらない現役の恋なんて、そりゃあ相手も参ってしまう。

(リル・ラーレはよく耐えてる)

再婚どころか遊びもしない。まあ死者を出したくないというのも間違いない本音だろうが、それなりに愛もあるのだろう。ただ恋にはもう応えられない。距離を取ったのは正しい選択だ。自分ならどうするだろう、と思い掛け……あまりの無意味さにグラスの中身を一息で飲み干した。

【地竜の孫娘と夢の王の話】

樹歴 八六一年*



ドゴォン……と低い地響きの後は、こどもの泣き声が響き渡る。

「またか」

ここ数ヶ月で最早珍しくもなくなったその騒動に慌てる者は居ない。冷静に保護者が呼びつけられ、居合わせたものは溜め息を吐きながら瓦礫を修繕する。呼びつけられた保護者——学長から監督役を仰せつかった鉱石学講師は、偶々居合わせたその人物に泣く子の世話を任せ一帯の修繕に向かった。

「……」

ぐずり泣くこどもを見下ろすこと数秒。泣き声に消されずに声を伝えるため、しゃがみこんで頭を近付けた。

「泣く必要は、ないと思うわ」

「だって だって」

「力の制御を学びに来ているのでしょ」

だからこそ、うまくいかずに泣いているのだ。そう目にいっぱい浮かんだ涙が訴える。

「地の竜はうまくやった。だから、あなたは泣かなくてもいい」

「???」

「私にも櫻色の爪を持つ知り合いがいました。あの子も制御が効かなくて、よく困っていたわ」
櫻色の爪は地竜の血をひく証だ。記憶の中の彼はそれをとて誇っていた。

「あなたたちの祖は、ただあなたたちの生を、存在することを喜んだ。力を遺してしまった事をととても悔やんでいたけれど。櫻色の爪を喜んでくれる息子たちを愛していた」

自分の血がなるべく薄くなるように、彼は同種での婚姻を禁じた。竜の力を求めた他の竜種は全て滅びた。地竜の血脈のみが今も残る。

少し難しかっただろうか。いいや、彼は力強く鼻を吸って涙を止めるべく目に力を込めている。「私の知り合いも、大切な人を守る為に力を制御してみせた。あなたもすぐにものにできるわだから」

始祖の話を何処かで聞いたことがあっただろうか。この子が生まれた頃にはもう彼はこの世にはなかった筈だ。それでも意志は語り継がれていただろうか。

「あなたが生きていることに、胸を張りなさい。泣く必要は、ないわ」

彼は涙を拭うと力強く一度頷いた。

「おじいさまのお話は、昔聞いたことがあるわ。少し記憶と違ったけれど、不思議ね。あなたのお話が本当な気がするわ！」

微笑みを返して立ち上がらせる。丁度戻ってきた鉱石学講師に気付き、彼はパッと駆け出した。

「先生、ごめんなさい！わたし、壊しちゃっても直せるように頑張るわ！」

「それはいいね。その内に壊さなくても済むようになればもつといい」

そ、そうね！と慌てる彼は恐らく今のが最善の案だと確信していたのだろう。

もう用は済んだろうと立ち去りかけたが、裾を掴まれ振り返った。

「ケミオ先生……よね？？あのっ、またお話を聞きたいわ！」

「……………」

遠慮がちな様で図々しくて、ダイナミックな様で繊細な。地竜の血脈は皆こうなのかしらと考
えながら

「ええ。次はあなたの話を聞かせて下さいね、オルクレア先生」

頭を下げた鉱石学講師に会釈を返して、今度こそその場を後にした。

【元宮廷魔術師の冬休みの話】

樹歴 八六二年



雪で埋もれた大地を冬晴れが照らす。

ケテル国王都にて、新年と煌王の誕生日を祝う祭りは今年も盛大に行われた。

その夜。ゼクトウズに在るゾランアルド公邸の一室で、邸宅の主はタイを緩めながら息を吐いた。

「どうだった、新王は」

「ええ。どうやら、公とは相性があまりよろしくないようですね」

それを聞いたゾランアルドは声を立てて笑った。

「そんな返答を寄越すのは君くらいだろうよ」

煌王とゾランアルドの付き合いはそれなりに長い。彼が新王として戴冠してからはまだ日が浅いが、王子だった時代からよく見知っている。そして、本人たち以外には悟らせはしないが、ふたりは大変に仲が悪い。

「いやいや、これでも巧くやっているんだがね」

煌王の側近すら気付かぬ機微をあっさり見抜いたこの魔術師を、ゾランアルドは気に入っている。以前宮廷魔術師として傍に置いていたのだが、現在ではケテルを離れ、塔で教鞭を執っているらしい。似合わぬものだと思いつつも、偶に呼び寄せてはこうして話をしたりする。

「先王は概ね賢くあらせられたものの愚直なきらいもありました。此度の王は——…厄介そう、

です」

「ハッ、私と張る程のひねくれ者だ！なおかつ奔放で読み難い」

「ああ…」

思い至った、という態で魔術師は視線を上げる。ゾランアルドはそれを面白くなさそうに一瞥した。

「飲み込んでおきたまえ」

「ではそのように」

したりと頷き、別の話題へ切り替える。

「公がご所望だった例の件ですが——…」

こうしてガイの冬期休暇は人脈維持の為に消費されていくのだった。

「いいんですよ。公邸に一室用意して頂けていますし。ええ。学生の世話に追われるよりはゆつくりできます」

【甘い話】



「甘味をたくさん貰っちゃったんだけど、食べない？」

突き付けられた箱を覗いて、マキは少し顔を顰めた。

「ひとつでいい」

「同じく」

後から覗いたジユウも同じ反応を示した。

「困る！ 甘いのが好きだろ!？」

「限度がある」

大量に貰ってしまったこの菓子は、ただひたすらに甘い事で有名な店のものだ。好きな人は好きなのだろうが、生憎私の周りにこの甘さに耐えられる者はいなかった。幸いそれなりに日持ちするものではあるが、この量は厳しい。地道に配り歩いているが私の知り合いはそう多くはない。ケミオ先生にはそつと断られたしスナフ先生には元々甘いもの自体好きじゃないと怒られた。プリンとか好きそうな顔してるくせに。

「そもそもなんでそんなにたくさんあるの」

「ノイチェさんが置いていったのを先生たちに押し付けられた…」

「あーあ」

ノイチェさんは本当にこれが好きらしく、あくまで好意でたくさんくれたらしい。苦手だったとなんとか伝えないと二度目があつては堪らない。

一応ファズ先生はルガッガの伴にと一個は持っていてくれた。優しさだったと思う。

「先輩は食べないし：あとはクドル？」

「ああ、良いんじゃないの。部隊に差し入れしたら？あの人たち味覚壊れてるでしょ」

コクマ軍の携行食は味が最低だと評判だ。あれが食べられるなら何でも食べられるだろう。

「貰ってくれるかな」

「あらやだフィアちゃん、とんでもないものをありがとう」

「ひえ：すいません良かったら：皆さんに」

部隊長は愉しそうに嗤った。

「こんな拷問食平然と平らげるのはディマスくんぐらいよ」

オブシディマス先生と甘味の組み合わせが想像できなすぎて脳がエラーを吐く。今度、自分用に取った一個を差し入れてみよう。

「糖分は魔術師には必須だけど、流星にこれはねえ：あ」

一瞬、魔女から表情が消えた。

「どうしました？」

「いえね、居たわ。これを好んで食べる子が」

信じられないが、店が経営を続けているのだからある程度この甘さを好む人間は居るのだ。現にノイチェさんは常連らしい。

「因みに、どなたです？」

「宰相サマよ」

「おや珍しい。師は甘味が苦手じゃなかったっけ」

「好きな方よ、常識的な甘味はね」

この甘さがないと甘味と呼べないのなら話は別だが。

「フィアちゃんから差し入れよ。あの子からで私を通しているんだもの、食べられるでしょう？」

「…構わないけどね。へえ、なかなか趣味が良いじゃないか」

その趣味はちよつと理解できない。気に入って貰えたようなので処理はお任せしよう。

「はけた!!」

スッキリした笑顔で腕を伸ばす私に、マキは淡々と拍手を贈った。

「ノイチエさんもまさか自分が贈った菓子が宰相の口に入ってるとは思うまいよ」
まず私がルルイエさんと親しくしていることすら予想外だろう。

「なんとか穏便に不評でしたと伝えたい：お土産は結構です、だとただの遠慮に聞こえるよな」
「そこは自分でがんばれ」

お勉強では頼りになるマキも、コミュニケーションの面では似たり寄ったりだ。

「いいもん先輩に相談するから」

【お月見の話】

樹歴 八六四年*



「つて事で、ユークも行くだろ？」

今晚皆で遊びに行こう、という話になり、その場に居たユークにも声を掛けた。

「今日はお月見」

その返答に一瞬面食らったものの、ケイナは直ぐに「ああそうか」と何処か上の方へ視線をやった。

「つきみ？」

ルカが興味深そうに首を傾げる。ユークは肯くに留まり、ケイナが説明する羽目になった。

「月見。ユークはホドの出だからな」

月といえば一般的には煌月を思い浮かべるものだが、ホドの出だと付け加えられればルカにも推測はつく。

「老月を観察しに行くって事？」

「まあそうなんだが、観測というよりは：眺めるんだよ。眺めながら酒飲んだりすんの」

「月餅を食べる」

「秋の祭事のひとつだな」

秋頃の夜に静天のタイミングで老月を眺める。皆で美味しいものを食べながら天を仰ぐ。家族単位で行われる祭事だが、コクマで言う収穫祭に近い雰囲気はあるかも知れない。

「えーじゃあ皆でやろうよ。今日の静天何時だっけ？」

「そりゃいいな。ユーク、どうだ？」

「……いいけど」

場所、持ち物は、と話は進んで行く。ユークはぼんやりとそれを眺めた。

故郷を遠く離れ、異国の学び舎に独りでやってきた。やりたいことだらけで毎日、は充実しているし、元々群れに安心を求めるタイプでもない。郷愁、寂しさを感じることはあまりないが――毎年この日は、月を眺めている間は、少しでも故郷の事を思い出す。今年の冬休みは帰ろうかと毎回思うのだが、やりたいことに追われて気付けば冬期休みが終わっている。

今年は騒がしうだから、郷愁に駆られる暇もなさそうだ。

そう感じながらユークは騒ぐ学友たちに月餅を買う店の指定だけを明確に伝えた。

【おぼけの話】

樹歴 八六六年*



夏も終わり、塔はもう随分と涼しくなってきた頃。その話は広く噂されるようになっていた。

「塔でこんな噂を聞く日が来るとは」

呆れ返った顔でケイナは紙面を机に置いた。読んでいたのはユグシルから渡された記事の草案だ。

「読んで良い？」

興味深々なピノに向かって紙面を滑らせる。読み終えたピノは瞳を輝かせてケイナを見た。

「調査しようよ！」

「私は遠慮する」

内容はそこまで珍しいものでもない。割とよく聞く話だ。ここが魔術師の集う塔でさえなかったら。

「幽霊だなんて、鬼神のなり損ないじゃないか。そんな危険物がもし居るなら、魔祓い師でも呼んで来なきゃだ。魔術師の領分じゃない」

幽霊。人の念が何らかの理由で認識されるもの。

一般的に、魔術師はこれを認めない。鬼神が存在する以上完全な否定は出来ないが、それでもその多くは思い込み、見違い、誤認：受容側のエラーだ。今回、もしそうではなく本当に何か居るのだとしたら、魔の類いや人類に好意的ではない鬼神、玄獣などの可能性が上げられる。玄獣であればまだ対処も出来るが、神魔の類いなら魔術師にはお手上げである。

「だから、本当にそうなのか確認しなくちゃ」

「そんなの、治安維持部隊に任せとけ」

「幽霊の噂があるから見てきて下さいって？」

軽くあしらわれる想像しか出来ない。取り合っても貰えないだろう。

「とは言え危険は危険だ。ピノ。絶対行くなよ」

ピノは不服げに口を尖らせるのみだった。

「えっそんなの面白そうじゃん！」

行くでしょ、とルカは拳を握り込んだ。

「でしょ！」

「止めとけって言われちゃったんでしょ？」

ルカとピノの盛り上がり、ネレーナは苦笑気味に制止を掛ける。だが、聞くようなルカではない。

「確認するだけだから！ちゃんと確認取れたら報告だって出来るじゃない」

「それはそうですけど……うん、と」

「皆で行ったら大丈夫だって！」

人を集めて、肝試しが敢行されることになった。

「えーっと、話によると……この辺り……」

廃棄場の外れでユグシルは足を止めた。元々廃棄場には人気は少ないが、噂の事もあってか此処まで誰にも出会わなかった。屋内とも屋外とも言い難いごっちゃりと物が積まれた空間に、冷たい風が流れ込む。

「寒……」

「なんで夜にしたのよ」

「目撃例が夜に多いからそうしようって言ったのルカですよ、と」

廃棄場には幽霊が出る。その体験談は零時以降、二時頃までに集中している。

薄ぼんやりと浮かび上がるなんとなく人の形をした白い陰。水の滴る音と突然襲う冷たい感触。何かをすり抜けたような感覚。少女の笑い声。

「本当どうしてこんな深夜に廃棄場へ」

「最初は多分偶然で、その後は私たちと同じ感じなんでしょね」

結局集まったのはピノ、ルカ、ネレーナ、そしてユグシル。エトラには馬鹿馬鹿しいと一蹴され、ユークにも断られた。ハトは見付からなかったし、ソーマは乗らないだろうと最初から声

を掛けなかった。

「ケイナが乗ってこなかったのが意外よね」

「そうかな。彼、結構慎重だからね」

それぞれ異変を探してふと沈黙が落ちたその時。

「！ 今、何か…」

「笑い声、みたいなものが…」

ふふふ、と微かに響いたのは少女の笑い声。

「ッ、きゃ！」

「きゃあ!？」

ネレーナが小さく悲鳴を上げて身を屈めたのに驚いて、ルカが大きく悲鳴を上げる。連鎖して皆が身を竦ませ、ルカに視線が集まった。

「何々、どうした…!？」

「吃驚しました…っ」と

ネレーナにまでそう言われ、ルカが憤慨する。

「吃驚したのはこっちよう！何!？」

「あ、いえ…何か、水滴が…」

ネレーナは首筋を擦りながら視線を天井へと向けた。塔の天井は高い。半分屋外に近いとは言

え、この真夜中に天井までは視認できない。

「雨も降ってなければ結露するような時季でもないね。なんだろう」

——ふふふ、ふふ

「また笑ったあ……！」

「ねえあれ……、あれ！あれあれあれ！」

ピノがユグシルの裾を引っ張って廃材の隙間を指しながら小声で捲し立てる。

「っ、」

ぼんやりと白く浮かび上がる陰が、すうっと横切っていく。

「あれが笑ってる……！」

どくりどくりと脈打つ心臓を抑えながら、ユグシルは今は何もない廃材の隙間を凝視した。

やつぱり、止めておけば良かった。あれが何にせよ、確かに何かが居る事は確認出来た。もうすぐに引き返して先生に報告するべきだろう。ただ、証言だけではなく何か証拠が得られれば一番なのだが——

「ねえ」

「「「！！！」」」

背後から少女の声。心臓が一瞬動きを止める。

「なにをしているの？」

恐る恐る振り返る。この声は多分。いやでももし違ったら。そして、その姿を視界に収めた途端、四人は膝から崩れ落ちた。

「ハトか〜〜!!」

「マジなにしてんのはこっちの台詞よお!!」

きょとんと四人を眺めているのは、ハトだった。

「ちょっと、研究。人の居ない時間にしたくて。でも最近よく人が来るようになった」
独自にそして秘密裏に、水系攻性術式の開発に勤しんでいたらしい。

「も〜〜人騒がせにも程があるわよう！」

「あはは、やっぱり、いつも黒幕はハトさんだね…」

「？」

噂を知らないのか、ほっと力の抜けた四人にハトは不思議そうな顔を向けている。

「幽霊がいるかも、って噂になってたんですよつと」

「ゆうれい」

「そう。やっぱいなのかな幽霊なんて」

これはこれで笑い話として丁度いい。記事に追記を入れて調整しよう。先生に報告を上げなくて良かった。そう笑い合う四人に「なるほど」とハトは頷いた。

「ゆうれいって、あなたたちから見たら珍しいのね。此処にもこんなにいるのに」

「え？」

「それじゃあもう夜も遅いから、おやすみなさい」

「え、ちよつとハト？」

呼び止めにも答えずハトはその場から立ち去って行った。

冷たい筈の夜風が、生ぬるく四人の背を撫でた。

【未来へ繋がる話】

樹歴 一八年



軍服のような格好の人物が、つかつかと塔を登っていく。止める者も居らず、彼は塔の主の元へ辿り着いた。

「お久し振りです、ラツィー」

王佐の地位に据えられた彼は少し疲れた顔をして、嘗ての主に礼を取った。

「おう。ちよつとやつてねーか？ 今日はどうした」

「陛下、来てらっしゃいませんか」

「今度は何があった」

はあ、と盛大に溜め息を溢し、王佐は勧められた席を辞退する。

「いえ…そろそろ身を固められては、と進言しているのですがその度逃げられてしまって」

「あー。次見たら話をしてみる」

「ええ」

現王ももう適齢期を超えている。のんびりした性格は知っているが、流石にそろそろ…と周囲は気を揉んでいた。

「多分あいつ一緒にになりたい奴が、居んだろ」

「でしたらその方で構いませんので、紹介していただきたいですよ」

疲れた王佐は妙な間も気にすることなく。暫しの雑談後、一礼をして踵を返した。

「だつてよ。囁むなよ」

退室を確認して一声掛けると、当の現王はラツイーのロープからもそもそと這い出してきた。

「余計なこと言うからだろ！」

親の脛を齧るを物理でやってのけた三十歳児を適当に宥める。

「反対しねーってよ」

「解ってないからだろ!？」

王が想う相手。それが誰かを王佐は予想もしていない。

「ま、おれさまも『三十年も育ててきた子が遂に結婚か』なんて感慨に耽ってみたいもんだがな」

王は「む…」と唇を尖らせた。

「孫、楽しみ？」

「曾孫くらいまでは見て逝きてーな」

「……うーん、じゃあ仕方ないなあ！」

少しだけ勇気を出してみるのも親孝行だ。

「陛下、そろそろ伴侶を決められては？」

「うえー。気が乗らないー。君がずっと一緒に居てくれるから、もう君でよくないか？」
流れなく発せられた話題に、王は顔を顰めるでもなく淡々と返した。

「血が絶えますよ」

宰相もまた王のプロポーズをサラリと受け流す。

「聖霊の血なら、塔が継いでるから良いんじゃない」

「残念ながら遅れをとりましたね。あちらはもう無性体を伴侶に選んでしまったようです」
「嘘。絶えるじゃん」

「ええ。ですから私ではダメです」

この男が明確に「ダメ」と言うのは珍しい。

「ふふ。僕か君の性別が違ってても、似たような断られ方をする気がするなあ」

恐らく我が聖霊は血が絶えることを気にしないだろう。元々北方の民は血の繋がりを重視しない。それでも八百年続いてきたこの血脈を自分の代で絶やすのは忍びない。

「仕方ないなあ。いいこ選んでよ」

「仰せのままに」

その代々すべてを見てきた竜は、彼の血を繋ぐすべての縁に祝福の息吹を贈る。

【香りの話】



「うびっ」と潰れたような声を出して、ジユウは大仰に顔を顰めた。次の瞬間逃げ出そうとするから急いで捕まえた。

「フィア、くさい。近寄らないで。喉が痛い」

「ええ!? そんなに!」

臭いと言われてショックを受けたが、原因は解っている。さっき香油を塗られてきたのだ。

「もうそんなに匂わくない?」

「離して。気持ち悪い」

ころなしぐったりしてきたジユウに驚いて手を離す。途端、脱兎の如く逃げて行ってしまった。

「え、なんか、ショック…」

「そりゃ気の毒に…ジユウの方な。猫に精油はダメだろ」

「そうなの」

舐めさせたわけでもないのに。

「そもそも鼻が良いから、コレは敵しかったと思う」

「もうそんなに匂わくない?」

「いやプンプンする。くさい」

「嘘」

付けた部位を直接嗅げば多少香るが、自分じゃ全然判らない。

「え、でも臭くはないでしょ。結構いい匂いだったよ」

「まあ主観は否定しない。でも付けすぎは何であれ鼻にくる」

そんなに言われるほど付けてはない筈だが、鼻の良いふたりには不評のようだ。

因みにここは休憩室だ。マキちゃんの部屋には入れて貰えなかった。部屋に香りが残るのが嫌らしい。

「……それ、先輩のと同じやつ？」

「うん」

先輩はいつも良い匂いがする、と言ったら私にも少し分けてくれた。

「マーキングじゃん」

小さく「キモ」と付け加えられた。マキちゃんにしては直接的に口が悪い。

「うーん、先輩は良い匂いなのになー」

「まあ香りの類いは人によって変わるから。そもそも」

区切られた言葉の続きを待って首を傾げる。

「…そもそも、人喰種センパイは人間おれたちにとって良い匂いだ」

狩りを優位に進めるためだろう。彼らは自然体で人間の好む香りを纏っている。

「ズルい」

「ズルいは狡かしこいと書く」

「悪賢い、でしょ」

「一緒でしょ。知恵に善悪はないし」

あると思うが、この話はここで止めておく。

「でもじゃあ先輩を良い匂いと感じるって事は、私は人間だな」

「はあなるほど。まああんたは人間でしょ。どう分けても」

マキちゃんは満足げにお茶を口に運ぶ私を暫く眺めてから、

「ところで。香油それ、今後も付けるつもり？」

「うーん……不評だったしなあ。たくさん貰ったわけでもないし……」

部屋で楽しむだけにした方が良さそうだ。

「いや別に好きにしたらいいけど。付け続ける気なら、膝裏の上とか、足の方に少しずつにしたら良いんじゃない」

「おかあさん……！」

今回もまた有用なアドバイスを貰えたおかげで、取り敢えず貰った分の香油はあまり回りに迷惑を掛けずに使い切れた。……と、私は思っている。

【新任の話】

樹歴 八七三年*



「先生、聞きました？」

「えー何？あー、新しいセンチセ？」

医務室で医療士に問い掛けられ、医学講師は急速に頭を回転させた。そう言われれば、そんな通知が来ていた気がする。医師会を脱退した、マルジュ総合病院に勤めていた医師だったと聞けば同郷の同職としてそれなりに興味も湧いたが、今の今迄忘れていた。

「センチセとエミリちゃんの城にオジャマムシたあ歓迎出来ないね」

「ふふ。でも専門は内科のようですから私は助かります」

「頑張つて科外も診てるオレによく言うよ」

とは言え、本音は歓迎だ。専門が何であれ、塔の医務室は戦場だ。人手が増えるのは嬉しい。

「しかしマルジュにまだ魔術師が居たなんて驚きだぜ。やっぱそれで首切られたんかな」

さあ、と首を捻った後、エミリは顔を上げて医務室の入口へ目をやった。

「噂をすれば」

コンコン、と落ち着いたノックの音。

「生徒じゃなさそーだ」

「どーぞ」

「失礼。医務室は此处で…良さそうだね」

入ってきた男の柄の悪さに、ふたりは暫し面食らった。

挨拶を済ませてみれば、恐いのは外見だけで少しのんびりした気さくな男だった。

「マルジュの大病院に勤めてた医師が、何やらかしたんだ？」

「いやあ特にこれといって…本当に、僕は悪くないと思うんだけどね」

解る解る、医師会は碌でもねえもんなとバンバン背を叩く。

「それで、先生はどんな魔術が得意なんです？」

「あー、その。僕は魔術はからっきしでね」

「は？」「あら…」

驚くふたりに苦笑いを返す。

「医療士あたりだと思っていたら講師として迎えられるとは…あまりの場違いさに、僕も肩身が狭いんだ」

「がくちよーそーゆーとこあるよな…」

パールは呆れ返ってしまった。言葉が足りないというか、人事が奇抜というか。

「まあ実践前の基礎知識なら教えられるし、医務室の手伝いくらいなら出来るよ」

「いやそれがマジ助かるのよ」

学生相手じゃ魔術を使うような治療も少ない。軽傷軽病の対処がメインだ。

「そういやセンチ、あんたいくつ？」

「ん？」

問われるままに年齢を答える彼に、パーブルは大仰に驚いて見せた。

「マジか。いつこ下じゃん。老けてんな！」

「…相応だと思うけど。君は確かに若作りだ」

エミリとしては、年齢よりもふたりの服装センスの方が気になってしまふ。ケセドの民は派手な色が好きなのかしら、と考えたが、他のケセド出身者はどちらかというと地味な色を好む傾向にみえる。偶々ふたりが特殊なのだろうと結論付けた。

「君は医師会に所属していたことがあるのかい？」

「俺自身はないね。所属医師に師事してたコトがある」

「パーブ先生は元々軍人だったと仰ってましたよね」

エミリの言葉を聞いて、新任講師は暫し考える素振りをみせた。魔術を使う同年代の軍人の噂を聞いたことがある。

「グナードの…？」

「おっと。その話はそこまでだ」

態度こそ変化はないが、その眼は確実に笑っていない。

「失礼、では僕はこの辺で。これからどうぞ宜しく頼むよ、先輩」

「オーケー、仲良くやろう」

退出する大男を手を振って見送る。退出を見届け、その手の動きをだらりと止めた。

「同郷の同年代は問題あったわ。俺ってばゆーめーじんで困っちゃう」

「なるほど。今度個人的にお話を聞きに行かなきゃですね」

「エミリちゃんたらー。俺のコト知りたいなんて照れちゃうなーやめてね」

態々彼の口を止めたという事は、以前にパールから直接聞いた以上の過去があるのだろう。気にならない方がおかしい。

「まあ大切な戦力ですから。うまくやって下さいね」

常識的で人当たりも良くて、何より虐め甲斐がありそうだった。

エミリはにつこりと笑む。医務室はますます騒たのしくがしくなりそうだ。

【購買員の話】



天才奇才秀才の集う塔の中にも、更にズバ抜けた者は居る。卒業試験に受かり、貴人や国の専属魔術師になったり、大企業で研究職についたり。はたまた、意外と身近で働いていたり。

「最近の子は凄いよねえ」

そうぼやいていた彼に

「本当に凄いのはソーマくらいかなあ。あとセンパイ」

なんて返していた自分を省みる。穴に埋まりたい。ケイナは今猛烈に自省していた。

平々凡々を絵にかいたような男。本人もそう自負しているようだったし、「ノロマなノールなんて呼ばれてた」と朗らかに昔話を聞かせてくれたこともある。術具作成を好み、憧れもあるようだったので、自分がエリスに師事していたことは伝えない方がいいな、なんて思っていた。とんでもない。

「ノルドさん、卒業生…だったんスカ」

「え？言わなかったっけ？」

聞いていた。言葉通りに捉えていなかった。完全に、「過去在籍していた」「生徒だった事がある」と認識していた。

「わつつつか！」

若い。若すぎる。ノルドが童顔だという話も奇しくもあの時同時にしていたが、真相を知ればもうとにかく若すぎるという驚きしか出てこない。

「きちんと授業に出て、きちんと授業を聞いてたからね」

ケイナには些か耳が痛い。とは言え、授業を真面目に聞いているだけでは普通卒業試験は合格で
きない。

「でも、どうして急に？」

「あゝ……いやあゝ……」

ドラゴン
玄獣を飼ってる購買員がいる。そんな雑談はなしを師に振った折り、弾みでノルドの名を出した。

「……ノルド？ って、『ノロマのノール』？ あの地味な？」

「あー、そう。本人そう言ってた」

「……何してんだアイツ」

心底呆れ果てたといった表情で師は天を仰いだ。

「目立つタイプじゃないけど、穏和で付き合いやすいイイヒトだよ」

「埋もれてんのか。まあそうだよな、もう試験もねえもんな」

悪目立ちするほど成績が悪かったのだろうか、と続きを聞くのを躊躇うと、師は呆れ顔のまま
ヒラヒラと手を振った。

「逆だ逆。座学の成績は常にトップだったぜアイツ」

「は？」

「魔術の方はまあ、それこそ平々凡々な才能だったみたいだが。単純な学力の高さでアイツ以上を見たことねえ」

ところが本人は、恵まれなかった魔術の才にしか目を向けていない。本気で自分が平凡だと思いい込んでいる。

意外と頑固で、自分の作りたいものしか作らない。更にはセンスが些か独特で大衆受けしないものばかり作り出す。その所為で術具作成学の修了ランクもA止まりだった。

「アイツの作品、よく見てみる。何一つ奇抜な手段は用いてない。オリジナルと言い張れるような技術も使っていない。のに、緻密に計算され尽くした術の組み合わせ、掛け合わせで誰にも作り出せないものになってんだ」

そんなに大層な話じゃなくても、とケイナは黙した。

そんなに大層な話じゃなくても、言われてみれば。例えば、彼は計算がとても早い。学生たちが口々に注文を告げても正しく整然と対処する。会計に間違いがあったことは殆どない。設計中を覗いて見れば、多桁の計算を暗算でやってのける。

ひえー、と小さく口から漏れた。

「なんで天文とかいかなかったんだろ」

「それはオレも言った」

そう師は笑った。答えは「興味があんまり…」だったそうだ。

「うーん、……おっさんに、ノルドさんのことを少し聞いて」

「あれ？ 共通の知り合いがいた？」

居た。ずっと隠していた。

「私の魔術の師……えーつと……この人、なんだけど」

丁度開かれていた頁に載っていた名を指す。今も技術の参考になっている、彼の憧れの発明家の名。

「え。 えっ!？」

ケイナの指先と顔を何往復も見比べて目を丸くする。それにぎこちなく肯きを返した。

「まあ……おおっぴらにしたくないんで、あんま口外しないで欲しいんすけど」

「そうなんだ……驚いたなあ」

一度驚きを飲み込んでから、

「つて、え？ 先生が僕の事を？」

もう一度、さっきよりも強く驚いてみせた。

「話振ったのはこっちからだけど。ばっちり覚えてましたよ」

うわわ、と。ノルドは嬉しそうに頬を緩めた。

「そっか。嬉しいなあ」

平々凡々、地味で目立たないノロマなノール。

ケイナは曖昧な愛想笑いで、身近な大天才を盗み見た。

「超、詐欺……」

そこに居るのはどう見ても、昔の先生に覚えてて貰えてちよつと喜ぶ、ただの購買員なのだから。

【暖まる話】

樹歴 八七三年*



晩夏たる秋は一瞬で去る。収穫祭を終えるとワーナーは一気に冷え込み、雪に閉ざされる冬が来る。

「さつつつむ……！」

震えながら医務室に駆け込んできたフェディットにエミリは暖かいお茶を差し出した。

「ああありがとう」

「大変そうですね」

塔内には気圧や温度、酸素量を調節する結界が張られてはいるが、学生や講師の寮区画は観光区域に比べて手厚くない。特に魔術の基礎の基礎で対応可能な「暖をとる」という事に関しては「自分でなんとかしろ」という方針だ。魔術師でもない暑い地方出身の人間には過酷過ぎた。「本当に、君たちが居なかったら僕は死ぬ」

寒さ対策をしていないわけではないが、まだまだ不慣れで苦勞している。冬期休暇中は医務室も毎日ふたりが居てくれる訳ではない。自力での対処法を確立せねばならない。

「耐寒魔術くらい習得したら？」

軽く口にする同僚に苦い顔を返す。

「勉強はしてみたが使えないんだ」

「術具の類いは？」

「それも試した」

既に術式が組み込まれた、起動するだけで魔術効果を得られるという機械たちも、フェディットにはどれひとつ起動させることが出来なかった。

「そこまで魔術適性低いやつ初めて見た！」

「誰でも使える物だったらもつと世界中に広がってるよ」

そりゃそうだ、と笑いながらフェディットの背を叩く。

「うーん、俺魔術適性アリアリだからなあ」

「適性ゼロで塔に居るの先生くらいですからねえ」

今の生活に寒さ以外で不満がない以上、なんとか対策を考えたい。

「魔術適性低い奴ってーと…ケイナ…はまだ帰ってきてないか」

「ああ、そうですね。彼のアイテムはフェディット先生でも使えるかも」

とは言え、今塔に居なくてはなんともならない。

「んーじゃ購買行ってみれば？」

「ノルドさんは親切な方なので、援けてくれるかも知れませんね」

そんな流れでフェディットは購買までやって来た。休暇中とはいえ、学生は多い。講義がない間というのは学生たちにとって、自ら探究し知りたい事を貯め込む期間である。教材、素材に軽食まで扱う購買は、混雑しているとまではいかなくとも人が絶えない。

熱心な学徒たちの隙間から、なだらかに且つ的確に客を捌く購買員を眺めていると、

「おまたせしました。何をご希望で？」

少し離れた所から様子を窺い続けるフェディットを不審に思ったのか、店員はそう声を掛けてきた。

「あ、えーとその…すみません、少し相談が」

「はい、どうしました？ あなたは確か新任の…お医者さん」

「ああうん、そう。それで――」

挨拶と情報交換を済ませると、ノルドは気の毒そうな表情を浮かべた。

「そっかあ。魔術が使えないんじや塔の冬は厳しいよねえ。何かあったかなあ」

「ごそごそと棚下を漁った後、「ちょっと待って」とバックヤードに引込んだ。何かが倒れる音、何かをひっくり返した音、小さな悲鳴。暫くすると分厚い冊子を数冊抱えて戻って来た。
「それは？」

「カタログ！ 何か入り用の物があれば仕入れるよ」

見れば、毛皮や簡易な暖炉など、寒冷地用のアイテムがたくさん載っている。

「輸入品になるから高価だし、塔ではまず買えないなあと思っけしだいこんでたんだけど」
雪と氷の国、ケテル域の商社の品々のようだ。魔術の普及していない北国で用いられる暖房器具の数々に目を通す。

「なるほど」

高価だ。これに更に輸送費や工賃がプラスになると思えば、流石に手が出し難い。

「据置器具だと、自室だけだしなあ」

医務室や講義室でも暖まりたい。

「そっかあ。毛皮のコートと帽子とか？ 君が着けたら迫力凄そうだね」

「着るもので調節できる域は超えてると思うんだよね」

「あっそうだ。なら——」

再び「ちよつと待っててね」とノルドはバックヤードに引っ込んだ。ガタガタと引出しを開ける音が何度も聞こえ、やがて小さな箱を持って出てきた。

「何度も申し訳ないね」

「気にしないで。これとかどうだろう」

小さな箱を開けて見せる。中には直径二cm程の鈍い光沢を持つ濃灰色の石が入っていた。

「『力』をたくさん貯め込める性質のある珍しい石だね。この石で触れれば術具も起動させられるかも」

そう言って適当な術具を取り出すと、「やってみて」とフェディットに差し出す。術具の核石にその石を押し当て、そのまま少し待つと術具は起動した。

「おお……これは助かる！」

「良かった。使えそうだね。ただ、勿論使った分石が貯めてる力は減っちゃうから。その内補充しなくちゃいけないんだけど……玄獣の知り合いとか、いないよね」

「いや、いる」

「えっ」

幸い、不定期にだが訪ねて来てくれる知り合いが二体もいる。

「そうなんだ。一応、購買でも有料で充填出来るから覚えておいて」

「ありがとう。それで……」

「ああうん。そうだね」

貴重なものだから、と前置きして提示された金額に、うっかり石を取り落としそうになった。

「へー。凄いなこの石」

「こんなものでしょうか」

眼帯の少年は握っていた石をフェディットに返す。鈍色だった石は白色に輝いていた。礼を言つて石を受けとるとフェディットはまじまじと石を観察した。

「なるほど。残量で色が変わるのか」

購買では満タンにするのに数日掛かると言われたが、流石は大玄獣、数分で充たしてみせた。

「魔術って玄力でも起動するんだね」

「玄獣寄りの種族も魔術を習いに来ているみたいだしね」

そうなんだと返事をしながら、赤毛の少年はフェディットを観察していた。以前は全く着けていなかったアクセサリーの類いを今は幾つか身に付けている。術具の類いなのだろう。

「先生、これもあげる」

「これは？」

「あっ勝手に！」

少年が差し出したのは細い棒状の細工だった。アクセサリーのトップに使えそうな小さな品だが、細かな彫刻が施されている。

「高価そうな品だけど…これは？」

「プライスレス！ エイラの角と僕の鱗」

「でも先生はアクセサリー着けなさそうだから、どう加工しようかって思ってた」

少年は照れ臭そうに目を逸らしている。

「御守りになると思うから持ってたよ」

「そうか。いやありがとう」

首から提げたアクセサリーの紐に通す。黒と赤のそれは繊細ながらも力強くフェディットの胸元を飾った。

「へへへ」

ふたりは満足そうに笑みを浮かべた。

まだ自覚の無い事ではあるが、ただでさえ魔術が効き辛かったフェディットに悪意ある攻性術が完全に効かなくなった瞬間であった。

かなり高い買い物だったが、あらゆる術具が使えるようになったと考えれば損はない。心身ともに暖かみを感じ、フェディットは「やはり此処での生活は悪くないな」と頬を緩めた。

【印鑑を作る話】

樹歴 八六七年



魔術師は一人前になると紋章を作る。

主に正式書類の署名や封書の封印に使われ、協会に登録したものは身分証ともなる重要な物だ。大概は修了の証に師から贈られるが別に自分で作ってもよい。ただ、その意匠を誰に頼んだかはある種のステータスとされる。現在最も栄誉なのは勿論協会の長である学長に贈って貰う事なのだが……

「どうも、僕にはデザインの才能がない」

項垂れて頭を下げるルエイエにフィアは慌てた。

「いいです！ いいですから！ 学長から貰えるなら丸描いてチョンでも私は嬉しいですけど、無理にとは言いません！」

「それは流石に僕も嫌だ。しかし、君の紋章が他の誰かからの物になるのも凄く嫌だ」

それでも頑張ってはみたんだが、と手元に散らばる丸められた紙の数々に眼を配る。

「専門家に頼んでもいいと思いますけど……」

デザイナーを紹介したとしても原案は依頼人だ。イメージや要素を伝えてデザインして貰う。その為に紋章師という職業があり、大半の師はそうしている。

「最終的にはプロにお願いする事は間違いないが、うーん、もう少し頑張らせて貰っても構わないだろうか」

「いえ、はい。急いではいけませんので」

「フィア、まだ貰ってなかったんだ」

「うん。ずっと保留状態だった」

デザイナーも交えて何度か検討して貰っているようだがこれというデザインが決まらないらしい。そんなに悩むものでもないような気もするが、ルエイエは中々こだわりが強い。

「クドルは誰に作って貰った？」

普通なら就職のタイミングで師——スナフ先生から贈られている筈だが、フィアはその事を知らない。スカウトの手紙が来た時の先生の不機嫌さから考えると、ひょっとしたらルレイエの魔女か、もしくは自らで用意した可能性もある。

「スナフ先生」

「えっ」

思わず目を見開いた。

「就職祝いだ、って。…意外？」

「意外。だって絶対、機嫌最悪だったでしょ」

少し考えるようにしてから、肯いた。

「でも、絶対先生にお願いしたかったから」

そう言って柔らかに微笑むクドルを抱き締める。なんか泣きそうになった。

「うん。うん良かった。うん」

「???」

「オレ? オレは持っていないよ。魔術師として独り立ちする予定はないからね」

先輩にも聞いてみたらそう返ってきた。

「まあ、作るならウイユ先生にお願いするかな。あの人紋章学もやってたみたいだから」

「そうなんだ。マキちゃんは?」

「俺もたぶん持たないと思うけど。頼むとしたらダリ先生かな」

マキちゃんが頼むなら確かに錬金術の大家であるダリ先生が妥当だろう。ただマキちゃんは職業魔術師になる気は本当じゃないらしい。

「師が多い人は大変そうだよな」

明らかに『誰か』を想像している顔でマキはそう呟いた。

「……」

就職が決まった。となれば、そろそろ紋章について考えねばならない。

ケイナは選択肢を紙に書き出した。

・おっさん

妥当な気はする。鍊金術並びに諸々の基礎を叩き込んでくれた、魔術師としての育ての親だ。ただ、系統が異なる。彼は元々術具作製の権威だ。

・トビー

受けてくれるなら、こっちの方がいい気がする。現在の環境魔術の師だし、方向性が一致している。ただ付き合いはまだ浅い。同僚、先輩であれど、教え子とは思って貰えていないかも知れない。

・自分で

一番しつくりくる。幸い意匠を考えるのも…上手くはないが、嫌いではない。人に頼むストレスも発生しない。しかし、折角頼める人がいるのに頼まないのは惜しい気もする。ひょっとしたら失礼にあたるかも知れない。

「うーんどうしょ！」

自分で作るなら、いつも着けている髪飾りの藤、鍊金術の象徴である天秤、得意属性の一つで取り組んでいる研究対象でもある水を示す魚……適当に円の中に配置してみるが、どうにもとっちらかっている。

「センスね」

「ああ、紋章ですか？」

「うわあ！」

背後から覗き込んでいたトビオカに、ケイナは盛大に飛び上がった。

「気配ないんですけど！」

「よく言われます。中々良いじゃないですか？」

「…そうですか？……あの、良かったら、ですけど。意匠をお願い出来ませんか」

「…うーん…」

「あ、いえ、しません。無理にとは」

「エリスくんが贈りたいんじゃないかなあと思うんですよ」

「それはどうですかね」

面倒臭がる画しか想像できない。

いい、いい、トビーに作って貰え、なんて幻聴さえ聞こえてきそうだ。

「考えてるんじゃないですかね。ルエイエくんの時も——」

「あ。そうか。やっぱダメです。先生にお願いしたいんですが」

言われて思い至った。学長と並べる立場ではない。おっさんはおっさんだが、あれは学長のお父さんだった。

「一度エリスくんに聞いてみて下さい。彼が作っていないようならばトビオカくんが引き受けますよ」

「ホントですか！ありがとうございます!!」

後日。ケイナは立派な印章を正式に登録した。作成者はエリスである。

「なんだよオレからじゃ嫌か？ 贈ってみたかったんだよ。受け取れ」

その意匠は、ケイナを表すに十分だった。珍しく悪態を吐かず、恭しく受け取ったケイナに満足気に頷き、

「ルエイエの時は贈れなかったからな」

「えっ」

「考えちゃいたんだが、考えすぎてルエイエに決められちゃった」

「うわ」

手にしたものの畏れ多さに戦く。これは学長に恨まれないかが心配だ。ケイナは自分の命が物凄いバランスの上に在る事を理解している。この件ではルエイエの天秤は傾かないだろうが、ルエイエの天秤を傾けてしまうかも知れない。彼の度量は知ってはいるが、僅かな傾きがいづか致命傷になることもあり得るのだ。

——今迄通り、内密に。

吹聴せずに黙して過ごそう。

さき

【未来の無い話】

樹歴 八六〇年**



「…どういう事だ…」

常に研究に勤しむ彼が塔を出たのは実に珍しい事だった。偶々諸々の手続きや申請書類が溜まっていた、億劫ながらも城へ向かった。そこでまた偶々…とはいえそうなる可能性は低くはなかったが、ともかく偶々師に出逢い、いつものように難癖を付けられ、なんやかんやで引き留められた。そんな最中、その報は飛んできた。

師の率いる部隊とともに急いで塔へ戻ると、無惨な瓦礫の山が、焼け焦げた匂いが、大量の軋死体が、そこで待っていた。

呆然とする彼の横で、師は厳しい顔ですぐに部下へ指示を出し始めた。

「生存者の確認を最優先だ！ まだ崩れる可能性は高い！ 各自警戒を怠るな！」

侵入禁止の結界を張るには範囲が広すぎて難しい。先行隊はまず人命救助に充てる。他は後続部隊が来てからだ。であれど圧倒的に人手が足りない。

「本当につ、何が起きた!？」

瓦礫を続々と空に持ち上げながらルイエが洩らす。その珍しい焦燥にも気付く事なく未だ茫然としている弟子に、師から喝が入った。

「ナナプトナフト！ 立っているだけなら邪魔だ！ 退避するか手伝うかしろ！」

「っ、あ、ああ」

生体感知を走らせながら街であり塔であった瓦礫の上を進む。ガラリと音がして、瓦礫の塔が

また崩れる。足下の何かが重みに耐えられなくなり、ガラガラと突然沈み込む。それらに注意しながら暫く進むが、生体感知に引っ掛かるものは虫か鳥くらいのものだった。だからそれを見た時、彼はうっかり幽霊かと思ってしまった。

「おう、ごころーさん」

「生存者か!? 見ない顔だが…」

「^{チメ}自分の魔術は信じた方がいい。体温までは再現してねー」

「…何者だ？」

普通に、人間に見える。仮に人間とは違うものでも、生物であれば少なからず体温はある。幻覚か、神魔の類いか、それとも。いや、今はそれよりも。

「おっと。おれさまは塔の崩壊には関わっちゃいねー。被害者の方だ。もうじき消える」

「消える？」

「気にすんな。それより、原因が知りてーならオススメの調査スポットはターミナルだ。残念ながら、この瓦礫の中にゃ生存者は居ねー」

ナナプトナフトよりも長身のその男は古くさいローブを翻して背を向けた。

「じきに樹の根が暴れ出す。この世界に未来はねー」

「何を言っている」

生者でもない者の言葉など聞いている時間はないのに、ナナプトナフトには彼を無視してはい

けないような気がした。

「砂漠の翼蛇がどうなるかにも依るが……恐らく最初はケセド域だ。次がコクマ、そしてイエソド。天寿を全うしてーなら……そーだな、ケテルかホドに移住しろ」

「だから、何の話——」

「あー、そーだ」

振り返った彼と目が合う。不思議と口を閉じてしまう。

「有翼種の生き残りが一人生きてる。テメーを見たら喜ぶだろーよ」

「、」

言うだけ言って、彼は忽然と姿を消した。透けるでも溶けるでもなく、パッと一瞬で居なくなっ
てしまった。化かされた気分のまま周囲をもう一度走査する。生体反応は無し。

「……」

有翼種の生き残りが、『一人』ルエイエか、フィアか。ルエイエであればもう既に合流して
いるだろう。フィアの方だ。であれば、自分と同じように出掛けていたのだろう。クドルを伴
してはいないか。知らず祈るような気持ちで、ナナプトナフトは生存者の搜索を再開した。

崩落から一ヶ月余り経つが、現場は凡そそのままだ。立入禁止の結界が張られ、瓦礫の撤去や

遺体の回収も引き続き行われてはいるが…果てがない。遺体も身元が判るような、個の判別が付くようなものは殆ど無い。埋め立てて再建した方が建設的だと声を上げる者も居る。

「なあるほどねえ？」

ターミナルに拳をぶつけ、魔女は顔を歪ませた。冷たい石に押し付けたままの拳は細かく震えている。ナナプトナフトが出逢ったという人物の言葉は真実だった。生存者ゼロ、原因はターミナル。そして、この世界に未来はない。

「…ふふ…」

当然だ。我が子亡き世界など既に滅びたようなもの。

「アハハ！………馬鹿な子…」

その愛弟子が生き延びたという。ならば、会いに行かなくてはなるまい。

手元の薔が花開いた。向こうの私をダウンロードして、改めてこの世界に絶望した。

ルルイエさんが会いに来た。この世界では初対面だったけど、こっちのルルイエさんも当たり前前に察しが良くて、直ぐに私の状況を理解してくれた。

スナフ先生が生きていると聞いて会いに行った。魔女の誘いには乗るなと警告を受けた。

魔女は言った。

「あちらの世界は救われたんでしょ？ ならもう、未来の無いこの世界は不要だわ。保って百年。ふたりで壊してしまわない？」

ひとつの世界を救った記憶を持ったまま、絶望のこの世界を滅ぼす。本当に未来が閉ざされているのか自分には判らない。だけど魔女の抱く絶望は解る。

「私、は……」

『魔女の誘いには絶対乗るなよ。道を踏み外すな。折角拾った命だ。自分から消しに行くな』スナフ先生の言葉が過る。彼も誘いを受けていたのだろうか。

「考えて決めて頂戴。世界を敵に回すか、私を敵に回すか」

「私は——」

私は。

最期まで、その選択を後悔する事はなかった。

【初対面の時の話】

春先のソーマは常に機嫌が少し悪い。花粉症：ではない。ワーナーの四月はまだまだ寒い。そもそも花粉症はこの自然豊かな世界にはまだ少ない。塔においてこの時期増えるものと言えば、新入生である。

「……」

自分の生活空間に知らない顔が増えるのは些か緊張感がある。嫌なわけではない。自分だってそうして入ってきたのだ。学友が増える事も悪くない。頭では解っている。ただ、ストレスになる。

深く息を吐いてソーマは自習室の戸を開けた。珍しい。今日は誰も居ないらしい。小さな幸運に少し機嫌を持ち直し、適当な席に腰掛ける。広い机にノートや資料をここぞと広げ、悠々と自習を開始した。

最初に出逢ったのは確かハトだった。寮の部屋が同じだったから、入学前に出来た知り合いだ。あの適度な距離感が僕にはとても助かった。

ケイナとは手続きの為に事務課へ行った時に知り会った。ケイナは事務の人と親しげに話していて、僕が新入生だと知るとハトについて聞いてきた。同室だと答えた記憶がある。それから顔を見るたびにちよくちよく話し掛けてくれるようになった。塔について詳しいなあとは思っ

たけど、まさかそんなに先輩だとは思ってなかった。

ユークとは防衛術の授業で一緒になった。少しでもハトに似ていて、放つとけなさはハト以上。つい目が追ってしまつて、いつの間にかよく一緒に居るようになった。

エトラは図書館でよく見掛ける『知った顔』ではあったけど、話すようになったのはユークと一緒に行動することが増えてからだだった気がする。ユークに振り回される苦労人と呼ばれ、同情されたのが初会話だったと思う。

それからケイナ経由で知り合つたユグシルさんには親しみを感じてすぐに打ち解けられた。彼の落ち着いた優しい雰囲気には憧れすらある。

芸術科のふたりとは…確か、ユグシルさん経由で知り合つた。僕は芸術は取っていないけど、操音が得意なユグシルさんが音学の体験授業に行くのにピノと一緒に付き合つた。

ピノはケイナが「面白いの見付けた」と連れて来て…しよっちゅうケイナが連れ回していたから、いつの間にか僕とも話すようになっていた。

それで、ピノの友達だというリーヴィーとは戦術の授業で一緒になって…

「……ん…」

「お。お目覚めか？」

「そりゃこんだけ騒げば起きるでしょ」

聞き覚えのある声にソーマが頭を起こすと、少しぼやけた視界にケイナが映った。

どうやら眠ってしまったていらしいと目を擦る。数度の瞬きの後、改めて周囲を見回した。

「…あれ、どうしたの皆して」

「おはようソーマ。自室以外で寝落ちとは珍しいな」

「うん…」

少し離れた場所で自習しているエトラ。正面から他人の寝顔を眺めていたらしきケイナ。その隣で歪なもによらを製造中のハト。エトラから離れた場所にはピノとニーニャにユグシルが基礎科目を教えている。部屋中に花が舞っていると思えば、出入口付近では芸術科の四人が幻術の練習をしていた。目の前が見えない程の幻術の集中砲火を受けながら全く意に介さず瞑想を続けているユークの姿も確認できた。

「いつの間に、こんなに」

「よく寝てたな。エトラなんてそろそろ耐えきれずに帰ろうと思ってる頃だぞ」

「寝てるソーマだけだと思ったら、続々と来るんだもの。やっぱり図書館の方がいいわね」

「あ！ソーマ起きたの？ ちょっとと錬成して欲しい鉱物があるんだけど！」

「ピノ、ここで燃やしちゃダメだからね？」

「えっ！そのヒト鉱物錬成出来るんですか？」

「ちょ、ちょっとだけ、ね…」

賑やかだ。でも、慣れた騒がしさ。

『ソーマくんは真面目すぎて……』『ひとりが良いんでしょ。私たち見下されてるみたい』『皆と遊んでいらつしゃい』『友だちを作りましょう』

キライだった言葉たちが一瞬脳裏を駆け抜けた。ひとりは落ち着いて居られるけど、別に独りが好きなわけじゃない。騒がしい場所や人とのコミュニケーションはストレスにはなるけれど、別に嫌いなわけじゃない。

環境が変わればこんなにも変わる。

知らない顔も、新たな学友だ。学友が増える事も悪くない。再度改めてその言葉を実感する。ストレスに変わりはないけれども、今年からは例年よりも、少しは受け入れられそうな気がしてきた。

【着任準備の話】

樹歴 八七一年*



「改めまして先生方。暫くは環境局と行き来しますが、まあ…これから宜しく願います」
講師陣の連絡会に参加し挨拶を終えたケイナはひとつ礼をし壇を降りた。

「お帰り、ケイナくん」

「環境局はどうだったかしら？ お話を聞かせてね！」

真っ先に挨拶に来てくれたファズ先生は記憶より少し老けただろうか？ 正直あまり変化は感じないが、その後ろ。小さかったオルクレア先生は、今や立派な『レディ』になっていた。

「先生、大きくなって…」

「えっ！ 別れた時から身長はそんなに変わってないわ??」

「大人になった、という意味合いだね」

ファズ先生のフォローに肯き、会場を見回す。

「先生たちはお変わりなさそうですね」

大体知った顔で、増減は感じない。ダリ先生がいなくなっているだけだった。

多くの先生たちと挨拶を終えて一息つく頃。

「おかえりなさい、ケイナ先生。待ち侘びましたよ」

「うげ は？」

その声にケイナは顔を歪ませて振り返り、目を見開いた。

「引き継ぎがありますのでお時間を見付けて私の元までご来訪をお願いしますよ。ええ。授業中以外は何時でも結構ですの」

真つ先に浮かんだ疑問も塗り潰される内容に、ケイナは再び顔を歪める。

「ダリ先生が居なくなった後、貴方が不在の間…、不肖、錬金術学も担当しておりましたのでね」

「オセワカケマシタ」

解つてはいたが、やはりそうだったか…と心の中で天を仰いだ。だがダリ先生が居なくなった際、そこで戻る選択は出来なかった以上この結末は受け入れるしかない。

苦い顔のケイナを、ガイ先生は愉しそうに見下ろしている。大きく息を吐いてから、ケイナは改めてガイ先生に向かい直した。

「正式に着任するまでまだ二年以上ありますから、引き継ぎにはまた時が近付いてから改めて伺います。今の処は生徒の時の対応で構いません。それで…今ひとつお訊ねしたいんですが」
「なにか、と首を傾げる仕種に苛っとしつつもそれは飲み込む。どうしても気になっていたのは…」

「あの鬱陶しい長髪はどうしたんですか」

「ああこれか」

ガイの髪型だ。サッパリ短髪になっている。似合わないにも程がある。

「似合わないかね？私もそう思う。：気になるかい？」

気になるが、本意ではないという事は今ので解った。細かく知りたいとは言わない。

「いえ。驚いただけで」

「ふふ」

その笑いが癪に触って、ケイナはまた顔を顰めた。

「さて。今日で粗方の先生方とは挨拶出来ただろう。明日以降は嘗ての学友たちの様子も見ておいで。彼らは色々と変わっている」

「でしようね」

一体何名が今も塔に居るだろう。それぞれが今何をしているのかも、それなりに気になりはする。年齢的に結婚している者も少なくない筈だ。色んな意味で、一番残っていそうな者と言え
ば：

「ソーマはまだ居ますか？」

「ああ、そうだね。まずは彼の元へ行ってみると良い」

生徒と講師の合間の微妙な期間。この稀有な瞬間を、ケイナはまったりと楽しんで過ごした。

* 【彼女が塔に来た理由の話】



塔には眠鬼が三人居る。一人は末娘。人間に一番近い位置に居る。一人は森の主、フルーゲルの女主人。人間觀察を愉しみ夢を操る妖の徒。一人は夢の王。眠鬼の中でも血が濃く力の強い、達觀の觀測者だ。

「なんで眠鬼って、『女』って表現されるんだ？」

「確かに」

ケイナの疑問にソーマも思わず頷いた。

「彼女」や「少女」など、性差を付けた表現は基本的には南からの輸入語だ。だが、北方に多い筈の眠鬼が何故か昔から女性として強調されている。

「女しか居ない……なんてことないよな」

「どうなんだろう」

實際知っている眠鬼……つまり塔に居る三人は外見的特徴を見る限り全て女性だ。そもそも稀少種であり、ふたりは彼ら以外の眠鬼を知らない。

「どうなんだハト」

「いないことはないわね。四割くらいは男性でしょう」

「普通じゃないか」

「普通だね」

当の眠鬼であるハトはこの話題に興味はないらしく、話の間もマイペースに自習を進めている。

「じゃあなんでなんだろう」

「さあ」

ふたりは推論を交わし合うが、ハトが応える様子はない。

末娘は一番人間に近い。

「世界の記録に触れられる眠鬼は無遠慮に記録を漏らしてはならない」。明言されてはいない、眠鬼のルールだ。倫理、マナーに近いかも知れない。多くの眠鬼は言われなくても触れた記録について口に出さない。世界の記録は独りでコッソリ愉しむものだ。

だが彼女は物心ついた頃からずっと警告を受けて育ってきた。秘密を暴いてはならない。知るべきでない事を教えてはならない。それは心も能力も人間に近い筈の末娘が、倫理観が人間に近いまま本来あり得ないほど眠鬼としての力を持っていた故だった。

殆ど人間として生活していた末娘の一族は彼女の力に困惑し、親交のあった森の主に助けを求めた。だが当代は塔にいるという。王に助けを求めれば、これまた塔にいるという。では塔に送るしかあるまいと、そういう経緯でハトは今塔に居る。愛しのねこと引き離されたのは不服だったが、今の塔での生活には概ね満足している。

「ハトは自分の事あんまり話さないもんね」

「……………」

それはそうだが、今の内容に関しては別に秘密でもなんでもない。単に興味の無い煩わしい会話だったただけだ。億劫に思いつつも、ハトは学友の為にひとつアドバイスをしてやることにした。

「図書館にそんな内容に触れた本があつたと思うわ」

「気になるなら自分で調べろってか。そこまでじゃない」

机にへたばったケイナに呆れながら、ソーマは今度調べてみようとこっそりメモを取った。

【共存の話】

樹歴 八四五年



その小さなこどもに引き合わされた研究生たちは、暫しざわめいた。

「先生……これどうするつもりです？」

「生体錬金術研究室の研究生として迎え入れる。母親を失ったばかりの幼子だ。優しくしてあげたまえ」

それは人間に恨みを持つてゐるんじゃない……という言葉呑み込んで、研究生たちはそのこどもを覗き込んだ。くりくりの瞳は不安そうに彼らを見ている。人間を騙すための外見は上手く機能し、研究生たちは溜め息混じりに先導講師の言葉を受け入れた。

「チョロい。えらい簡単やったな」

「まずは言葉だな」

「『とても簡単でしたね』」

「イントネーションにも気を付けるように」

外見的には十歳に満たない少年だが、不相応に賢明だった。復讐よりも生存を選んだ彼は、命の恩人には従順だ。

「食事の周期と必要量を把握せねばな。今腹は減っているか？」

「うん」

母親はそれこそ自分が狂化する程にこどもを優先していたが、育ち盛りのこどもにはそれでも

足りていなかった。

「そうか」

そう頷いて体重計に乗った男に何度か迷い躊躇いつつもこう呼び掛けた。

「あの…『先生』…」

男の動きがピタリと止まった。量りの針を止める為だったかも知れない。体重計を降りてメモを取り終えると、少年に向き直った。

「それは私に呼び掛けているのか？」

「はい」

「何故『先生』と？」

「そう呼ばれていました」

「ふむ。ふむふむ。良かろう。ではそう呼びなさい」

「？」

先生は何やら機材を準備し、自らの袖を捲ると、躊躇いなく腕に針を差して血を抜き出した。

「さて。それを飲むといい」

肉に牙を突き立てずに飲む血は初めてで戸惑ったが、先生に促され恐る恐る口をつけた。一口含めば、後は夢中で飲み干した。自覚以上に飢えていたらしい。六〇〇㉔程の量を飲み終え、ぷはっとプラスチックから口を離す。

「満たされたかね」

「美味しかった」

「それは結構」

しかし、なんだか物足りない。摂取方法の所為だろうか。通常より腹保ちが悪いような気がした。

「また空腹を感じたら言いなさい」

きつと量が少なかったからだろう。そう思つて、少年は先生の袖を引いた。

ズ——、と。『何か』を奪い取つた感覚がして。

「——、と……」

先生は眩暈を起こして机に手をついた。

「む。抜き過ぎたか？ おかしいな……」

「……あ」

満たされた。血だけでは足りなかった『何か』が入ってきた。

「君、この手はなんだ」

「……先生、倒れそうやったから」

「む？ 無自覚の予兆があったか」

吸い取つた『何か』の事は伝えなかった。

一度血を抜いたら二ヶ月程は控える。という事で、血を与える役は研究生たちも含め持ち回りとなった。そうして少年が気付いた事は、やはり血だけでは足りないという事と、先生の血が一番美味しいという事だった。

規則正しい生活。バランスのよい食事。適度な運動。ザ・健康体。『何か』の方で得られる充足感は研究生が勝るが、血の味自体は先生の圧勝だった。

「これはどうだろうか」

差し出された白濁した液体を受け取り、少年は胡散臭げにそれを覗き込む。

「…試してみますが…」

鉄臭いこの液体は、疑似血液であるらしい。先生の専門は生体錬金術。研究内容は人体組織の錬成だ。

「何が引っ掛かっている」

「赤くないんですね」

「なるほど。見た目と食欲の問題か」

少年が引っ掛かっているのは疑似血液からではいよいよ『何か』の摂取が難しくなりそうだが、という事だったが、色の事も気になったので口にしてみた。食欲はそもそも血自体には感じな

い。あくまで入れ物に抱く欲求だ。

「なに。成分は変わらない。乳だって白っぽいだろう」

早く飲んでみて欲しそうな様子を汲んで、少年はその液体を恐る恐る口へ運んだ。

「う え」

吐き出しそうになった口を拭って、彼は続きを飲むのを断念した。

「何故だ」

「すっごく不味いです」

「そうか。ではこちらはどうか」

次に出されたのは色もよく似た液体だった。先程よりも抵抗なく口をつけられる。

「……美味しくは、ないですけど」

「本物と何が違う？」

「うーん……」

既に疑似血液として医療に使われているものだ。問題なく飲めると思っていた先生は、少年の感想に研究心を刺激された。

そうして繰り返し人工血液を飲まされるようになった結果、『何か』が不足し要求量は増加していった。味を整え栄養を増やしてみても要求量は日に日に増した。

「成長期か？」

「そうですね…」

そんな折、彼はやって来た。

「ウイユ先生？ 危険物を隠し持っていると聞いたけど」

途端先生は舌打ちし、小さく「魔女め」と吐き捨てた。

「いやいや危険なものなど何も。コレの事であれば、そもそも引き取り時に報告は入れております」

少年は、突然入ってきて自分を危険物と呼んだ人物に目を向ける。

「あらコレ？ へー、流石の造形ね」

「…こんにちは」

無遠慮な視線を受け、戸惑いながらも挨拶をする少年に、魔女は大きく目を開いた。

「ごめんなさいね、失礼したわ。私はこの塔の最高責任者よ。お名前は？」

「なまえ？」

「なるほど。名前か」

何気ない問いに返ってきた疑問符に魔女は溜め息混じりに先生を睨んだ。

「名前くらい聞いておきなさいな。今までどうしてたのよ、まったく」

コレや君などで事足りていた。

「では名を問おう」

「えーっと……好きに呼んでください」

先生は「む」と口を噤み、暫く唸った。そう長くはない逡巡の末。

「では……クワルタリオル。カルタと呼ぼう」

「カルタ」

それが自分の呼び名になる。カルタはその名を口の中で幾度か呟いた。

「あらステキな名前ね。宜しくね、カルタくん」

魔女は微笑んで手を差し出す。握手と気付き応じると、

「……あ」

空腹を一気に満たす何かが流れ込んできた。

「あら。ふふ」

まさかそれに気付いたのだろうか。魔女は少年の耳元に口を寄せ、囁いた。

「魔力が足りなくなったらこっそり私の元へいらっしゃい」

「え」

魔女は悪戯にウィンクをして身を離れた。

「じゃあねウィユ先生。この子、ちゃんと学ばせてあげなさいな？ 折角塔に居るのだから」

勿体ないわ」

ヒラヒラと手を振って魔女は退室していった。

「結局何をしに來たのだ、あの魔女は」

「何処へ行けば会えますか？」

「魔女にか？ 止めておけ、あまり関わるな」

きつとそれは出来ない。塔に居る為には、きつと彼の協力が必要だ。得難い魔力のみならず、名前と教育を得るきつかけをくれた人。先生は嫌っているようだが、カルタに彼を嫌う要素は無かった。

そして十数年後。カルタは近況報告を兼ね魔女の元を訪れていた。

「なるほど。他にくれる相手が出来たのね」

「はい。もうお世話になることもないかと」

「あらあら用済みね。寂しいこと」

気分を害した様子もなく魔女は笑う。

ウィユが関わっているのだから、カルタがグドルの原典に出会うのも無理の無い話だ。自分と我が子以外の魔力持ちなどそれくらいしか心当たりがない魔女は、いずれ会いに行ってみようと頭の片隅に留め置いた。

「そう言えば。先日、クワルタリオルを初めて知りました」

「そうなの？」

薄紫の霧の立ち込める幻想的な湖の名だ。ウイユの故郷リディウムの外れにある。静天の夜には湖の精獣がダンスを踊るといふ噂だ。

「ウイユ先生が考えたにしてはステキ過ぎて笑ってしまったけれど、貴方の名前としてはとても似合っていると思うわ」

「ありがとうございます。意外でしたけど……なんだか、嬉しかったです」

その名前は大事な恋人にもまだ伝えていない。いつか本物をふたりで見に行つて、そこで伝えたいと思う。自分が貴方と共に生きられるのは、この湖を見て育つた彼のお陰なのだと。

【先延ばしする話】

樹歴 八六一年***

「先生？」

「……ん、なんだおまえか」

暗くなった室内でずっと机に向かっていた先生は呼び掛けに応じて漸く視線をこちらへ向けた。

「夕飯出来ましたよ」

「ああ。今行く」

先生は変わらない。自信に溢れていてちよつと我儘で、元気で、ちよつと生活力が低め。だから結う人の居なくなつた髪は簡単に一纏めにされているし、纏うコートも汚れが目立たない黒色のものになった。それを見て私が勝手に寂しく感じるだけ。最近では随分慣れてきたものの、ふと以前を思い出してしまうこともある。

「どうした。行くぞ」

「あ、はい」

じつと見上げていたら怪訝な顔で促された。

「フィアちゃん調理も取つてた？」

「えーと、はい」

何処かで一回取つた事がある。マキちゃんと一緒に錬金術をと思つたら初級でいっぱいいっぱいになり、中級は諦めて調理へ進んだ。実技とはいえ、結構ギリギリだった。

「だいぶゆるゆるだけど一応基礎が出来てるもの。助かるわ」

食卓には魔女も参席している。お陰で食事中先生は終始無言だ。いや、そもそも食事中話さないタイプかも知れない。一緒に暮らすようになって判ったが、先生はかなり育ちが良さそうだ。対して魔女は思いの外粗い。なんでも自分でやれはするが、結構雑だ。今も自分の苦手な食材を皿の端に寄せ集めている。

「……」

「フィアちゃん食べる？ 私は大丈夫、足りない栄養素はサプリメントで摂るから」

「作って貰ったんだからきちんと食え」

バシッと魔女の頭を叩いた手に全員が驚いた。

「嘘……」

ポカンとしたまま顔を見上げる三人に、その人物は苦笑いで返した。

「食事中に悪いな。今さっき着いた」

「フィア、もう一人前あるか？」

「あ、はい、多分」

スナフ先生に促されて慌てて準備に立つ。「無かったらいいぜ」という声を背に台所へ向かう。吃驚した。

魔女を叩ける人物。魔女を説得するネタにした人物。エリス・リル・ラーレ。魔女の最愛の人。

ルエイエ先生のお父様。

会うのは初めてだ。我が子の訃報を受けやって来たのだろう。少し時間が空いているのは恐らく心の整理を着ける為。つまりもう呑み込んだのだろう。流石先生のご両親はふたりとも強い人だ。でも。

「――、――っ」

食卓から聞こえてくるこどものような大泣きの声。

「…………。あ、先生」

「…流石にな」

今戻るのは憚られると丹念に鍋を掻き回していたが、先生も氣を利かせて離席してきたらしい。大泣きの魔女を見ながら食事は続けられまい。居心地が悪すぎる。

「エリスさん来てくれて、良かったですね」

「良かったか？ まあ魔女の制御は出来るな」

それはだいたい大きい気がする。

「あんなに大好きな人が生きている世界なのに、壊そうなんて思ったんですね」

「…………。ぼくにはまだよく解らないが、母親にとって我が子っていうのはそういうものなんじゃないか」

わたしにもよく解らない。

「んで、これからどうするんだ？」

食後。食器を片付けたテーブルをもう一度皆で囲んでいる。

「環境局に拠点を置く。これは話が着いている」

塔の生き残りはたったの二人。既に環境局は迎え入れる準備が出来ていると言ってくれている。今や一番整った魔術施設は環境局だ。

「あとは『樹の根』の対策だ」

「樹の根って…何なんでしょうね」

『直に樹の根が暴れ出す』。それが聖霊の予言らしいが、何を意味しているのか予想がつかない。

「だから、樹の根よお。暴れられたら困る大きな樹なんて、この世界にはひとつじゃない」

「世界樹かよ…」

世界樹。この星と同じ名を持つ巨大な樹。

「それは…ターミナルの事…ですか？」

「ターミナル？」

『これは未来と過去に枝根を延ばす世界樹の端末』。聖霊はターミナルをそんな風に呼んでいた気がする。

「よく知ってるわねフィアちゃん。あちらではターミナルの解析は終わっていたのかしら」

「あ、いえ。まだ途中で」

「そう。その可能性は捨てきれないけれど、恐らく本当に『根』が出てくるわ」

「何故そう考える？」

スナフ先生が問う。因みにあちらの話はスナフ先生にも一応してある。あちらと違って、こちら側では何ら制限は無いようだ。

『最初はケセド、次はコクマ』。ターミナル関係ないのよね。その順番で喪われるのは守護獣よ」

守護獣、というと：

「国家守護獣ですか？」

「そう。皆には馴染みがないでしょうけど、私はコクマの守護獣とは面識があるもの。アレはもうすぐ役に立たなくなるわ」

馴染みない処か実在を信じてはいなかった。いや、別に疑っていた訳でもないが、言うなればそれが存在するかどうかを『考えたことがなかった』。国サイドにつく魔女が会ったことがあるというなら居るのだろう。そう言えば。私の功績を、魔女と守護獣が認めてくれていたんだっけ。

「ケテルとホドは守護獣の現存が明言されているわ。まあケテルの方は誰も見たことないみた

いだからブラフの可能性だってあるけれど」

それを聞いてスナフ先生が呟く。

『生を全うしたいならケテルかホドへ行け』、か」

聖霊の言葉を反芻しているようだ。皆の様子を眺めて、エリスさんは机に頬杖をついた。

「ごめんオレ前提知識足りてねえわ。後で誰か教えて」

「そうね、ごめんなさい。後で話すわ」

今来たばかりでこんな話を聞かされてもそりゃあワケが解らないだろう。

「つまり守護獣の問題。皆マルクトの守護獣は知ってる？」

魔女は仕切り直して皆にそう振った。

「あそこはそもそも国がないですよ。居ないのでは？」

「嘗て居たとしても、今は。記録も残ってないだろう」

「つまり、世界樹こそマルクトの守護獣だ、と？」

エリスさんの発言に目を剥く。なるほど。この話運びだとそうなるのか。魔女は手を合わせてその返答を喜んだ。

「そういうことだと思うのよね。今まで十の守護獣は欠けたことが無かった。それが欠ける時、欠けた場所から終わっていく」

根は終わらせるのではなく、穴を補おうとして出てくるのかも知れない。

「根が暴れ出すっていうのが、物理的に暴れ回るのが比喩なのか解らないけれど」

「じゃあ取り敢えず、守護獣の消滅を防ぐのが世界を守る事になる？ ってことですよね？」

「そうなんだけど」

それが難しい、と魔女は頬に手を当てる。

「恐らく、ケセドの守護獣は幾ばくか望みがあるんだろう。そんな言い振りだった」

「あらそう？ でも残念ながら、コクマの竜は無理ね」

「言い切るな。寿命か？」

「そう言ってもいいかも知れない。物忘れの病、ね」

聖霊にも治せなかったという持病が近年悪化しているのだと言う。治せるとしたら、力の強い眠鬼かまたは竜と縁を結んだ眠鬼らしい。最も力の強い眠鬼は…塔の崩落で亡くなってしまった。

「守護獣に関しては少し調べたのよ。他国のものもね。占術局がなくなったの凄く痛手だったわ」

大規模な情報収集施設だった占術局は塔に内包されていた。

「何処もかしこも死にかけよ。フィアちゃん、折角救ったあつちの世界もきつとすぐにこうよ」肩を竦めて言う。あちらにはまだケミオ先生が生きている。竜は救えるかも知れない。それに、ルエイエ先生も。他にも多くの魔術師が生きている。きつと対策は変わってくる。打てる手は

たくさんある筈だ。

「あっちの事は心配してません」

真っ直ぐに返すと、魔女はふふと笑った。

「それもそうね。ごめんなさい」

ふう、と息を吐いて魔女は手を打った。

「一度休憩しましょう。デザートを用意してくるわ」

「じゃあお茶も淹れ直しますね。確か何か良さそうな茶葉が…」

「待て！ アレを淹れる気ならばぐが淹れる」

「え…じゃあお願いします…」

立ち上がり掛けた私を制してスナフ先生が立ち上がる。一度私が淹れたお茶を出してから、先生はお茶の準備だけは絶対に自分でするようになった。お茶なんか湯を注げば完成だろうに…。ストンと座り直し、リビングには私とエリスさんだけが残された。

「…あの。今更ですけど…はじめまして。ルエイエ先生にお世話になっていました、フィアです」

「あーうん、覚えてないんだっけか。初めましてじゃあねーんだけど…いや初めましてか？ まあいいや宜しくな。ってか、今はアイツが世話になってるみたいで。大変だろ」

「とんでもない！ 此方から協力を依頼したんですよ。思い直してくれて、本当に助かりまし

た」

魔女は、国に事情を説明して現在は特殊作戦中という事になっているらしい。自由に動けるし国から支援も受けられる。

「思い直して……って事は、一度断ってんのか？」

「あ」

知らないなら伝えたくない。最初は世界滅ぼそうとしてました、なんて。

一言発したまま口を噤んだ私に色々察したらしく、エリスさんは目を逸らした。

「うん、まあ、思い直したなら良かったよな」

「は、はい」

沈黙が落ちる。そのままなんとなくエリスさんを観察した。教科書で見た顔だ。幾らか老けて無精髭も生えているが、印象自体はそう変わらない。ただ『学長の父』『魔女が溺愛する伴侶』という風評からすると、なんというか、……実に普通のオジサンだ。威厳があるでもなく、身形を整えたイケメンでもなく、なんかだらつとしたその辺のオジサンだ。

「……………悪かったな」

「えっ？」

苦虫を噛み潰したような表情で睨むように私を見返してきた。

「その視線には慣れてる。イメージと違うとか、釣り合わないってんだろ」

無遠慮に観察し過ぎたようだ。

「そこまでは考えてないですけど、まあ、普通の人だって。…すいません」

でも魔女に愛されルエイエ先生には慕われていた。その人格をよく知りたいたいと思ってしまう。

「正直だな！まあ、言っただろ。慣れてる。それよりだ」

茶化してくれてから、少し真面目なトーンで切り出した。

「訃報を聞いてな、本当は、アイツが変な気起こすんじゃないかって考えてた。でもアンタが止めてくれたって事だよな。…感謝するぜ」

「…それは…あの。エリスさんの力なんですよ」

説得の為に名前を使わせて貰った事を話す。

「へえ。アンタ随分気に入られてるぜ。気を付けな」

「??」

「そいつは結構なタラシだからな」

首を傾げていると人聞きの悪い事を言いながらスナフ先生が戻ってきた。

「スナっちもなついてるもんなあ」

「スナっち!？」

「そのあだ名は撲滅した！二度と使うな」

エリスさんは楽しそうに揺れている。

「可愛いですなスナッチ……いででで！」

「に・ど・と・つ・か・う・な」

ほつぺたを伸ばされてしまった。……可愛いのに。

魔女が用意してくれたイチゴとクリームを挟んだソフトクッキーを楽しんだ後、話を再開した。エリスさんへの状況説明もその間に済ませておいた。流石は教科書に載る人物。ふんふんふんと飲み込んでいき、私はひとり目を丸くした。

「真っ先に手を打つべきはケセドの子ね」

衰弱度というより、打てる手がある事が大きい。

「死にかけてる理由はご主人が居ないから。知ってる？あの国^く域魔術^にが使い辛いのよ」
神秘から離れつつある国の中で、守護獣は契約相手を長い間見つけられずにいるという。

「おまえのその守護獣に関する知識はどっからきてんだ？」

もつともな感想に私も頷く。調べようとしたこともないからアレだが、そんな記録塔の図書館でも見たことがない。

「だから、調べたのよ。占い」

「占術局がなくなつたの痛手だったって……」
そこまで口にした処で

「うわ。ホントおまえ…」

エリスさんとスナフ先生のドン引きな様子を見て察する。

「設備なしで大規模な占術展開したんですか…」

「大規模って言っても、焦点は絞ったし…まあ出来る程度の事よ、調べられたのは」
皆が魔力^{メモリ}を貸してくれたらもう少し調べられるんだけど、と魔女は微笑んだ。

「はい、私で良ければ！」

「覚悟しとけよ、こいつかなり遠慮なく持つてくぞ」

ウンザリ言うが決して拒否はしていない。魔力^{メモリ}が貸し借り出来るものとは知らなかったが、このメンバーなら随分な容量が得られるだろう。

「私要らないかも知れませんが」

「やあねえフィアちゃん。貴方が一番容量大きそうだわ」

「まっさらだしな。持つてる容量の半分以上が未使用領域だ」

「え」

いや仮に私の魔力^{メモリ}が多いと言うなら本当に未使用だ。使い方すら解ってない。

「なんだ？ルエイエは魔力^{メモリ}の使い方も教えてくれなかったのか」

「弟子可愛さで見誤ってるのよねえ色々と」

「え」

ルエイエ先生にまでとばっちりが行っている。止めて欲しい。

「使つてない部分あげたいくらいです…」

「流石に無理だわ」

しょんぼりと肩を落とす。

「それで話を戻すけど」

気付けばだいたい脱線していた。

「ご主人候補。月のこども。これは該当者が何名か居るわ。引き合わせてあげれば完了。簡単ね？」

それも占いの結果だろうか。

「なんて言ったかしら…そう、カルタくん。彼が生きていれば彼でも良かった筈よ」

月色の瞳がその証だという。

「そうだったんですか」

二回も付き合つたのに全然知らなかった。思えば先輩は自分の話を殆どしない。訊いたら話してくれるけど、訊きようなない事もある。

「誰だ？」

「ウイユ先生が飼つてた子よ」

「ああ吸血種か。…どうした？」

エリスさんが私を見る。ぶくーつと頬が膨れていた。

「私のパートナーですよ」

「は？ おまえクドルと付き合ってたんじゃないのか！」

驚くスナフ先生に驚く。

「それはないって言ったじゃないですか！」

「あらそうだったの。気軽に話題に出してごめんなさいね。でも、そう。ルエイエは失恋だったのね」

「え!？」

今度は私とエリスさんが揃って魔女を見る。

「あつ。アレは私だけど私じゃなくて！」

そう弁解するとエリスさんも安心したように息を吐いた。

「あー、アレな。あんな時のな」

「ああ、そう言えばそんなこともあったな。別の名前で記憶してるが…アレはおまえだったのか」

あ。今気付いたがこのメンバーは完全にルエイエ先生の保護者会だ。

「もうまた脱線しました！もう寝ましょう、明日にしましょう！」

「それもそうね。夜更かしは大敵だわ」

「部屋空いてるか？」

「私の」「嫌だよ」

「安心してくれ。空きはある」

魔女とエリスさんの攻防に呆れ返りながら先生は立ち上がる。私はうつかり、これを放っておいたらルエイエ先生の弟でも出来るだろうかと下世話な事を考えてしまった。

これがきつと、この先の新しい日常になる。聖霊が「先がない」と断じた世界でも、数十年、数百年と先に延ばせる。私たちは世界の知恵を司る塔の生き残り。例えば数秒だろうと可能な限りに終わりを遠ざける努力をしよう。きつとその一分一秒は無駄なものではない筈だ。

【前倒しする話】

樹歴 八六一年****



「じゃあ行きましよう」

魔女と世界を滅ぼすと決めて向かった先はマルクトだった。ターミナルを出て大樹へ向かうとその根元には剣を提げた鎧の人物が立っていた。サラサラの黒髪を靡かせて目を瞑って佇んでいる。随分と小柄だ。

「防衛システムね。困ったものだわ」

世界樹が呼び出した防衛の為の使い魔だと魔女は説明してくれた。

「なら、アレと戦うのは下策ですね」

倒してもひっきりなしに湧いてくるのだろう。

「そうねえ。世界樹へのアクセスも拒まれちゃったし」

「使い魔全部倒すのと静寂の檻張って物理で樹切り倒すの、どっちが現実的ですかね？」

「どっちも気が遠くなる話ねえ」

それに世界樹を切り倒そうとすれば恐らく人間の邪魔が入る。

「どうするんです？」

此処に連れてきたからには手があるのだろう。

「それがね、現状この樹に直接攻撃する手段はないのよ」

え。

「あの使い魔もすごく強いし」

「ルルイエさんでも？」

「だって全盛期の有翼種よお？劣化版の私たちじゃ徒党を組んでも手に余るわあ」

逃げるだけで精一杯、と肩を竦める魔女は試したことがあるのだろう。目を閉じ佇んでいる人物に目を向ける。あれも再現体という事らしい。

「…ひょっとして、聖霊なんですか？」

「そうよ。樹の使い魔は全々部そう」

じゃあ、塔で会った聖霊の写しも樹の使い魔だったのだろうか。何度も助けて貰っておいで敵対するとなると少し居心地が悪い。

「いいじゃない貴方は。聖霊の導きで世界をひとつ救ったんだから。こっちは諦めろって言ったの、聖霊サマでしょ」

それもそうか。

「でもね」

魔女はつまらなさそうに目を游がせる。

「色々試してみたけれど、樹に直接攻撃しない限り、そんなに邪魔はしてこないみたい。やっぱり、ここはもう見切りをつけた世界ってことかしらね」

「…そう…なんですね」

「此処に来たのは一度見ておいて貰おうと思っただけよ」

一度目を閉じ、切り替える。

「これからの活動は各地の守護獣殺しね。さしあたり、ケセドの翼蛇にトドメを刺しに行きましょう」

魔女はピクニックに行きましょう、くらいのノリで言う。そもそも何故次の手がそれなのか解らないが、魔女が言うなら従おう。しかし国家守護を担うほどの玄獣なのだからきつと強い筈だ。

「どれも死にかけよ。そんなに難しくはないわ」

ニコリ笑って、人差し指にキスをする。

「樹に挑むよりは、ね？」

やっぱりそれなりに難題らしい。

毒を撒いたり呪詛を盛ったり。時には直接戦ったり。しつかり弱らせた筈なのに直接相対すると何れもやはり強かった。死にかけの翼蛇は魔術的な攻撃が全然効かないし、火炎獅子は何だか国がバタバタしていた最中のようで比較的やり易かったけど、ガッツとパワーがあり過ぎて本当に疲れた。正気を失った大海獣は攻撃の規模がでかすぎて海岸線ごと消されかけた。全然姿を見せない絢爛鳥を引きずり出すために街をひとつ犠牲にしたし、宝石に引き隠った虹色蝶の為に怪盗紛いの事もした。ひとつ消す度に、根が街を、国を、覆っていく。即座にはない

けれど、確かに守護獣の消えた国を中心にその災害は起こっていった。

残すは紫電竜、皆の護り手、地の大兎、そして紫煙。

「ゲブラーは本当に世界の皆ね。残念ながら此処はどうしようもないわ」

守護獣たちの居場所を割り出すために、魔女は本来占術局が大々的な設備を用いて行うレベルの占術をやつてのけた。私も魔力を貸し出したが、それでもかなりの離れ業だと思う。その結果、ゲブラーの守護獣には手が出せない事が判明した。

「イエソドはまず入国が困難だし、放つておいても良いかしらね。一番最後にしましう」

どちらに転ぶか解らない翼蛇はトドメを刺す必要があつたが、確実に滅びを待つ紫煙と竜は無理をする必要はない。

深い深い山の奥。コクマの山は岩なので、樹木の生い茂る森は物珍しい。木に寄り掛かつて転た寝をしていた少年はこちらに気付いて目を開いた。

「ん？…あー、おまえらが。いよいよオレの番か？」

「そうよ、賢い兎さん」

呪術士のような格好のこの少年がホドの守護獣であるらしい。疲れたような表情をして、強く抗う気配を見せない。

「諦めてる……んですか？」

「いやー、よくやるなと思って。守護玄獣を五体も。健闘を讃えてる」

明後日の方向へおどなりな拍手を贈る兎を、魔女は嗤った。

「なるほど。貴方、自分が安全な場所にいると思ってる？」

「どうか。ただ、他の奴らより魔術には覚えがあるんでね。とは言えあんたらは五体もの守護獣を屠ってきた猛者だ。怯えてるさ」

逃げ隠れは巧いらしい。こうして話している彼はただの投影^{ヴァイジョン}だ。

「掴んだ尻尾は固だったってワケね。態々出てきて教えてくれたのはどうしてかしら？」

「いやなに。もう半分死んだ世界だ。オレが残ってても然して意味ないしな。ただ理由は聞いとこうと思ってるさ」

「そっか」

理由を話すと、兎は一言そう溢した。この兎は今までの守護獣たちに比べ、まともに会話が成り立った。それだけで私はかなりやり辛さを感じてしまう。

「守護獣を討って回るあんたらには、星の加護があるだろうよ」

空ではなく、足下に目を落として言う。魔女にも意味は解らないのか、怪訝に眉を寄せていた。「じゃあな。オレは邪魔しない。でも討たれる気もない。終わりの日まで一眠りするさ」

そうしてフワッと消えてしまった。

「やるじゃない、あの兎。魔術師としては流石に年の功なのかしらね」

魔女は肩を竦めてみせる。あの兎は玄獣でありながら魔術師だった。齡千を超える大魔術師は、魔女の上をいったのだ。

残存守護獣は九分の四。でもその内一体は討てないので、実質残りは三体だ。

「こうなると、自滅を待ってる場合じゃないかしら」

「イエソドと…コクマも狙いますか？」

「そうね。兎も後できっちり仕留めるわ」

初めての敗北はやはり悔しかったらしい。

イエソドには力づくで侵入し、センタービルごと滅ぼした。紫煙は殆ど無抵抗だったが、何をしても死ななくて大変だった。最終的にはなんとか仕留めたが、どうやら心臓を壊さない限り死なない仕組みだったらしい。結構恐かった。

そして今は。

「おや。待てなくなつたのかい？ 久し振り、というほど経ってもいないが…調子はどうだい」
「まあまあよ」

コクマの王城。竜に会う前に取り囲まれた。とは言え宰相とその私兵たち…いや、治安維持部

隊だ。幾ら数を揃えても私と魔女には敵わない。ただ――

「嘗ての師が国際指名手配犯とは残念だよ」

「貴方なら乗ってくれるかも、と期待したのよ？ でもそうよね。結局、貴方が大事なのはあの坊やだものね」

「我が王なんでね」

魔女と宰相は互いに肩を疎めて言い合う。

「そんなワケだから、止めさせて貰うよ」

「説得とかしてくれないの？」

クスクスと嗤う魔女とは対照的に宰相は終始無表情だ。

「無駄だろう。貴方の覚悟は受け取ってるよ。リル・ラーレを殺しただろう」

「え」

時が止まったように感じた。

「ええ。他の誰かに殺されてしまうのは耐えられなかったから」

魔女と関わりのあった者にはその弱点もバレている。だからそれを消した。それだけの話。まともに会話が出来ていても。変わりなく接してくれていても。とつくに魔女は狂っていた。

「それじゃあ、どうやって私たちを止めるつもりなのかしら」

「ここで止められなかったらこの国も樹の根に吞まれるんだろう？ 惜しまず最大戦力を投入

させて貰うよ」

宰相の側に立っていた兵士が屈伸をしてフードを外した。

「あらまあ。確かに城が用意できる最大戦力ね。流石に驚いたわ」

その青年は私の知らない顔だが、続いて出てきたのは知った人物。立ち姿からそうじゃないかと思っはいたが…。

「先生。環境局に行ってなかったんですね」

「おまえらがバカ始めたからな」

黒檀のマントを脱ぎ捨てたスナフ先生は初めて見るような動き易そうな格好をしていた。

「これはだいぶ苦勞しそうね。フィアちゃん大丈夫かしら」

どうだろう。結局先生には一度も勝てたことがない。私の実力を当時のもので計算してくれてるといいんだけど。

「あの青年は？」

「やだ、知らない？ あれうちの王様よ」

「王様…!？」

惜しみなさすぎる！

驚いて目を向けると王様はヒラヒラと手を振ってくれた。魔女はこっそりと「今のフィアちゃんと競るくらい、かしらね」と囁いた。それならば可能性に魔女にはスナフ先生の相手を頼

みたい。

「一応雑魚にも気を付けてね？」

そう言うと、魔女は踊るように術式を展開し始めた。それは開戦の合図となった。

「うわっ、先生！なんでこっち狙ってくるんですか！」

「一応師の一人として責任がある！ルエイエの分もな！」

それを言われると弱い。だがここまで来て負けるわけにはいかない。接近だけは許さないように捌いていく。かなり広くはあるがここは通路である。正面に強敵ふたり、背面に数多の雑兵という配置だ。背面から先に片付けたいが、正面に手は抜けない。ピシッと音を立てながら冷気が駆け抜けたかと思うと、背後は分厚い氷の壁で塞がれていた。助かる、と思ったのも束の間。スナフ先生は炎術士だ。熱魔術のプロ相手に氷の壁とは――。

「あれ？先生、壁溶かさないんですか」

私には背水の陣になってしまっているの、近寄らせないことに必死だ。

「あんな見え透いた手に引っ掛かるかバカめ」

「え？あー！なるほど！」

罠なのか！相手が手を出しても出さなくても此方が利を得る仕組みらしい。流石魔女。こちらにも、魔女に教えて貰った戦い方が功を奏している。格上相手には相手の力を利用するような術式展開を。受け流し、絡めとり、弾き返す！どうだ！今までで最高に保っている。スナフ

先生は舌打ちして一度態勢を整えた。

「おまえ：この短期間でどうしたらそうなる」

「三年間を十回以上繰り返し返した後魔女に教えを受けたら、ですかね！」

怪訝な表情だが、聞き返されはしなかった。

プラス、今の私には実戦経験もある。守護獣たちを討つのはどれも簡単ではなかった。最早全ての事に成長の必要性を感じていない魔女は私の事を自主防衛出来る外付け魔力装置メモリくらいにしか思っていないかも知れないが、行動を共にして学びとれるものはたくさんあった。魔女も狂っているが、私だって正気じゃない。まるで仮想世界で遊ぶように、自己の成長を試している。今はまさに最終試験の心持ちだ。攻性術の師を超えられるか否か。いや、中間試験か。これで終わりというわけではない。魔女の上をいった千年魔術師も残っている。ここで止められてしまう程度ならそれこそ先がない。雑兵と評した部隊員たちも私にとっては決して雑魚ではない。単純に火力は劣るとしても、戦力としては先生と並ぶ。ただ魔女は規格外だ。それらを纏めて相手にしていても

「流石に陛下は厄介ねえ。集中したいわ？」

纏めて氷漬けに出来てしまう。魔女にとっては雑魚でしかない。因みに氷漬けというのは比喻だ。これは熱では溶けはしない。言うなれば時間の停止。放っておけば知らない内に酸欠で死ぬ。この魔術は静寂の檻では解けない。此方は静寂の檻を警戒している。何せ魔女も私も体術

では絶対にスナフ先生には敵わない。故に、静寂の檻は無駄だと印象付けたい。その術を使えるとしたら王様の方だが、魔女も警戒して大術を組む隙を与えていない。王様はこんな時だというのに楽しそうに魔力を振るっている。王様の力の使い方は独特だ。魔力を術式で縛りすぎている。半分魔術で半分魔力のままのような。お陰で、粗いが融通が利く。反魔術による解除もし難い。だが、魔力持ちなのなら魔女には奥の手がある。こちらは余所見している余裕はない。先生が認識を改めてしまった。

「っ、」

瞬間移動かと疑う速度で突っ込まれ、接近を許してしまった。非常時用に隠しておいた対近接防壁の術式が自動展開されたため一撃は防いだが、もう後がない。それには驚いてくれたと信じたいが、先生は動揺する様子もなく素早く次の攻撃に移る。対応出来ず、簡単な障壁で致命傷を避けつつも敗えて盛大に吹き飛ばされた。距離を稼ぎたい。

「ルルイエさんっ、無理！交代！」

「まあそうよねえ」

魔女が先生に立ち塞がる。一時的に二対一になってしまうので、私も急いで態勢を整える。

「魔女。おまえが……いや、いい」

「難儀ねえ。全部私の所為にしておけばいいのに」

王様が大術を組む隙を与えないよう、私も遠距離から攻撃を入れる。

「おっ。君の力はぼくの似てるね」

「ええ。戦い方も真似できますよ、っと!!」

大きく叩き付ける。魔力量による力業ならこっちだって自信がある。王様も同じ様に応戦し、ぶつかった魔力は相殺されて派手な衝撃を生んだ。通路の一部がガラガラと崩れ落ちる。

「はは!」

「やだあ、ちょっと通路壊さないでよ?」

魔女は先生と撃ち合いながらも風圧で乱れた髪を魔力で結び上げる。

楽しそうな王様と数度打ち合い、先生の射程を気にしつつも距離を詰める。そして。

「え?」

幾つもの瓦礫片が、つららが、王様を貫いた。

「勝った!」

「あら凄いじゃない。何したの今?」

「ルルイエさんが残しといた隠し玉、使わせて貰いました!」

「なんのこと?」

すつとぼけてるのか、それとももしかしたらこの魔女はまだ編み出していなかったのか。あちらの魔女に見せて貰った、魔力持ちから魔力を奪う術式。王様が驚いた隙に、奪った魔力を上乗せした魔術で瓦礫片と魔女の氷壁から作り出したつららを放った。魔力戦に集中していたた

め物理への対策を怠った事に加え、攻撃方法の瞬間的な三段階変化に王様は対応出来なかった。これで王様はもう攻撃に参加出来ない、と魔女の援助に回ろうとした時、魔女から走った冷気が王様の首を落と――

「あら。まだ居たの」

「もちろん。でもまあ、我が王の死は、見たくないからね」

恐らく障壁も張ったのだろうが、魔女の氷刃はそれごと宰相を切り裂いた。致命傷だ。

「貴方が誰かを、しかも望みのない者を庇うなんて驚いたわ」

「……ルルイエ師」

「解ってるわよ。……おやすみなさい」

王さまの手がよろよろと宰相へ伸びて、落ちた。

「先生、まだやりますか？」

「……言ったろう。責任がある」

先生は改めて構え直した。

「!! フィアちゃん!」

魔女の叫び声。目を焼くような光。耳をつんざく轟音。

「く、うッ!」

魔女が眉を顰める程のパワー。それは、通路の奥から放たれた『落雷』だった。先生ではない。

コツコツと足音を響かせゆつくりと歩いてきた人影は、ふたつの死体の前で足を止めた。

「誰です？」

「漸くお出ましね。本題：紫電竜よ」

俯いたまま、紫電竜は口を開く。

「希代の魔女よ、放っておいても死する世界の終わりを早めることに何の意味がある。別の世界を救った者よ、何故その記憶を生き甲斐に大人しく死を待たない。絶望に吞まれた愚かな子らよ、他を巻き込まず己の世界を絶てば良かったのだ」

顔を上げたその瞳には怒りが込もっていた。

「思ったよりしつかりしてるじゃない。こんな失敗した世界一秒だって早く終わらせたいのよ。気になる事もあるしね？」

気になる事。その情報は共有している。老月を信奉する邦の、大地の化身が語った言葉。その真意を確かめたい。

「世界を壊してまで知識欲を満たして、その先に何がある」

「それを知りに行くのよ」

「そうか」

竜から金の光が舞う。

「良からう。ラッイーも止めはしないようだ。守護獣ディエルゴの命はくれてやる。記憶を全

て差し出して、私はエーイーリーに戻るだろう。おまえたちがこれから向かう世界より来た、ただの一匹の悪しき竜だ」

鎖が千切れる音を聞いた気がした。

通路を、城を壊しながら、みるみると姿が変わっていく。黒い甲殻は鋼のようで、眼光は煌月のように強く光を放っている。機械じみた巨大な竜は強力な雷を放ちながら暴れ始めた。

「あらあら。もう理性は無いようね。離れましょうファイアちゃん。此処での用はもう済んだわ」
「先生…」

「フン。結局ぼくではおまえたちを止められなかった。挙げ句竜にやられるとは笑い種だ」
先生は最初の落雷を受けてしまったらしい。右側が焦げてしまっているが、即死しなかっただけでなく驚きだ。

「先生、見届けてみませんか？世界の終わり」

「真っ平御免だ。そんなもの、見ずに済んで良かったくらいだ」

そう嗤って、崩れる城に飲まれていった。

「っ」

魔女に促され、私は急いで城から離脱した。

「はー、疲れた。あの子が諦めてなかったら、もっと大変だったんでしょね」

魔女によると、宰相はこの世界の未来の無さを理解していたらしい。こちらを止める策を用意していなかったのがその証。そして最期まで魔女を師と呼んでいた。それでも王様が大切に彼の側を離れなかった。

「コクマの竜はあれで良かったんですか？」

今も気が狂ったように暴れ回っているようで、倒れてはいない。しかし、魔女は用は済んだと言っていた。

「大丈夫よ。契約ごと記憶を虫に喰わせちゃったの。『守護獣』は居なくなったわ」

「じゃあ、兎も守護獣辞めて貰えれば」

「無理でしょうねえ。あの竜は特殊なのよ」

「…そうなんですか」

とにかくにも残り一体、ではあるが。それがとてつもなく難しい。兎は尻尾を掴ませない。

「星の加護…感じられませんね」

「…フィアちゃんはこのまま世界が樹の根に吞まれたらどうなると思う？」

「このまま樹の根に吞まれる事はないと思います」

守護獣が失われた地域に根が現れる理由については考えていた。あれは世界樹の根。恐らく、世界樹はマルクトの守護獣だ。失われた守護獣の分を補填する為に活性化して出てきているの

ではないか。であれば、そろそろ撤退を始めるだろう。樹だけで七体分は賄えまい。

「私も似たような風に考えてたわ。兎の話聞くまでは。フィアちゃん、塔の蔵書はどのくらい読んだことあるかしら」

「え…あんまり…」

突然の話題変換に面食らう。正直、教科書の類いしか読んだことはない。

「塔に限らないのだけど、どんなに古い書物でも、八百年程度なの。つまりこの世界に八百年以上前の記録は存在しないのよ」

「そんなわけ…だって、兎だって千年以上、竜は二千年以上生きてるって」

「そうね。そういえばあの樹の齢はどのくらいだと思う？」

大層な巨木だ。

「えー…と…三千くらい？」

「ふふ。やだわフィアちゃん。今は樹歴八六一年よ」

「あっ!? 樹歴…あっ」

魔女は推測する。

八百年前。正確には八六一年前。有翼種たちは大陸を十に割り、世界樹の下で其々に国を宣誓した。これは記録された事実である。そしてその際に、世界は上塗りされた。今のこの世は世界樹の描いたテクスチャの上に存在する。守護獣はその維持装置。テクスチャの下は既に根が

張り巡らされていて、守護獣を失い塗装が剥げた場所ではその下地が露出する。全ての塗装を剥ぎ樹の根を取り払ったら、その下には何があるのか。

「本来のこの星の姿…？」

「ふふ！楽しみね！」

私たちはきつと辿り着くだろう。煌月が爆ぜ、樹の根が焼き尽くされた時、星は再び生まれ変わる。

世界の果てまで後一步。

ワクワクの詰まった、ピクニックへ行くような軽い調子でふたりは踏み出す。

「じゃあ、行きましょう」

【倫理の話】



「ちょっと通りませんね」

「なんと」

研究室の奥で、呆れ顔のノイチェとウイユが向かい合って座っている。

「同意を得ればいいのだろう」

「これに同意するって、相当生活に困っての人身売買ってレベルですよ」

淡々とした言い合いも、研究員たちには慣れたものだった。「またやってる」以外の感慨もない彼らは黙々と己が研究に精を出している。

「とにかく。これは不可です。研究を続けるようなら罰しますのでそのつもりで」

「…むう」

ノイチェは研究企画書に大きく不許可の印を押して立ち上がった。

「あ、ノイチェさんだ。こんにちは」

「フィアさん！こんにちは」

研究室を出て少し歩いた所で、ノイチェはフィアと遭遇した。フィアの隣には生体錬金術研究室の学生がいる。

「あー、君は確か」

カルタはノイチェを見て大体を察した。

「カルタです。また先生がご迷惑をお掛けしているようですね」

「仕事だから、君が気に病むことでもないが……そうだな。手綱はしっかり握っていてくれ」

「言っても聞かないんですよ、あの人」

お互いに苦労は絶えないようだ。

「あの人は、ちゃんと倫理の授業を受けてきたのか？」

溜め息混じりに吐き出したノイチェに、フィアは小首を傾げた。

「倫理って、昔からあったんですか？」

「あったとも。研究内容が縛られるようになったのは最近だが、授業自体は前からあった」

魔術は色々な事が出来る。大規模な、取り返しのつかないような事も為せてしまう。故に倫理は必須科目だ。基礎科目として組み込まれている。

「フィアさんはちゃんと受けてたか？」

「えーと、はい。ちょっと難しかったんですけど」

倫理の授業は、ほぼほぼ法律だった。罪に当たる内容と、それに対する罰則についてが主だ。

「とは言え法律の授業ではないから、悪いことしちゃダメ！ということだけ理解できれば充分。そもそも君は倫理観はありそうだ」

ノイチェは次にカルタを見た。

「俺も受けましたよ」

必須なのだから当然だ。

「君もまあ、大丈夫そうだ。解らなくても、判るだろう」

フィアは目を開いた。

「他人をサイコパスみたいに言いますね」

「凄いのイチェさん、なんで解るんですか？」

「研究室で何度か会ってるからね」

それに、ウイユからの定期報告書にも目を通してある。そこには研究対象としてカルタの記載もある。

「でも塔で教えてる倫理は、解らなくても判るようになるためのものだから。魔術師ってやつは殆どが倫理観欠けてるからね」

「そ：そうなんですネ：」

そういうばカルタもそんな認識だったなと思ひ出し、フィアはちらと隣を見上げた。カルタは頷いている。

「だから、そんな魔術師たちに倫理を説いて回るのは大変なんだ。ウイユ先生が特別厄介ってワケでもないのさ」

フィアとカルタは揃って「お疲れ様です」と頭を下げる。

「フィアさんに会えて少し癒されたから頑張るよ。じゃあね！次はお土産持ってくるから」

「いえあのそれは……ッ!!」

結構です、の一声は駆け出したノイチエには届かなかった。

【玄獣学講師の話】

樹歴 八七三年*



「今此処に来てただろう!! 守護獣レベルの大玄獣が!」

バンッ!! とノックもなしに扉が開かれ、部屋の主はその大きな体を竦ませた。

「…どなたです? ああいや、確か——」

「質問に答えて欲しいなあ!」

「ええはい、来てましたよクーシェ先生」

飛び込んできたのは玄獣学講師のクーシェ・ローアだった。

「やっぱり! もう居ない: 飛行系かつ?」

忙しなく首を巡らせ室内を見回すが、ふたりは去った後だ。心の中で「瞬間移動系ですよ」と返しつつ、フェディットはこっそりと息を吐いた。

「くう、会いたかった: つ」

全身から悔しさが滲み出ている。

「ん? 君は: なんてことだ。神秘のピの字も無い面白味の無い男だと思っていたけど、大玄獣に伝手があるとは」

方言的な言い回しに、彼が北部の出身ではないと知る。

「今来てた玄獣の事、是非教えて欲しいなあ」

興奮が覚めたのか、勢いが削がれその口調は随分と柔らかいものに変わっていた。口許にシワを刻んで穏和な笑みを向けられても、重ねられた無礼は見逃せない。

「ええまた機会があれば。お引き取り頂けますか。もう夜も遅いので」

クーシェを部屋から摘まみ出して、今度こそ鍵をかける。掛けておいたと思ったが、忘れていたのだろう。しかしだからと言って無許可で入ってきて欲しくはないものだ。

クーシェ・ローアは玄獣学講師である。が、その詳細は誰も知らない。出身不詳、年齢不詳。講師歴は長いようだが、親しい講師も直弟子もない。普段は穏和でゆったりとした口調だが、玄獣が関わりと少し荒れる。そんな人間だ。

「クーシェちゃんなあ。ずーっと居るらしいぜ」

医務室で雑談がてら前の話をする、パーブルはそう言った。

「ずっと？」

「そ。噂話だけだな。ダリちゃんが生徒の時から、ずーっとあの顔だつてよ」

本当なら、人間ではない。

「玄獣が玄獣について調べてるのかな？」

「さーね。若返りの魔術だとか、不老の秘薬だとか、色んな噂があるらしいぜ」

フェディットはハツとした。以前なら先ずはそっちで考えた筈だ。当てられている。そう自覚し、苦い顔をした。

「かなり研究熱心だからなあ。多分相当付きまとわれるぜ、覚悟しときな」
冗談めかして笑われた直後、ノックとともに医務室の扉が開かれた。

「ああ居た居た。フェディットくん！玄獣の話聞かせてくれる？」

「ほらな」

「……」

付きまとわれるよりは、早く終わらそう。

そう思って話をしたのは、完全に誤りだった。

後々、フェディットは強くそう理解した。

「先生、玄獣学の先生なのにフィールドワーク行かないって本当？」

「おかしいよねえ。先生も行きたいんだけどねえ」

生徒に問われ、クーシェは眉を下げた。

「なんで？」

「先生塔から出られないんだあ」

「出られない??」

それほど忙しい、という意味ではなさそうだ。今ものんびりとお茶を啜りながら生徒との歓談に付き合っている。

「そうそう。昔少しヤンチャをしてねえ、お外に出して貰えなくなっちゃったの」

生徒は「へえ」と素直に感心する。人に歴史あり。今では落ち着いて穏やかな、のんびりしたこの講師も、若い時分には無茶をしたのだ。しかも、未だに続く罰を受けるほどの事を。

「反省してますって伝えたら？今の学長なら、もう許してくれるんじゃない？」

「定期的に打診はしてるんだよお。でもダメなんだってえ」

「えー！先生何したの気になるー！」

クーシェは「恥ずかしいからナイショ」と人差し指を唇に当てて笑うだけだった。

「でも研究困るでしょ？」

「うん。だから生徒たちに代わりに動いて貰ってるんだよねえ」

生徒たちを手足として使えるという利点の為だけに講師になったようなものだ。

「君も、たくさんフィールドワークに出て、たくさん現場の情報を教えてね？ 楽しみにしてるから」

「まっかせて！」

将来レンジャーを目指すその生徒は、胸を張って答えた。クーシェは目を細めて頷き。

「先ずは…その杖について教えてくれる？ それ玄獣の意志で与えられた素材が使われているよねえ！ 君随分と親しいのかい？ どんな玄獣？ 生息地は…海？ 少なくとも水系だよね？ 呼び出せたりする？ 関係性についてを特に詳しく——」

「ちょ、先生、一個ずつ！ 一個ずつ!!」

ルカがクーシェから解放されたのは、日が沈みきった頃だった。

【バイトの話】

樹歴 八六六年*



常に金欠気味のピノは、今日も求人掲示板を見ていた。塔では外部講習として様々なバイトが幹旋されている。学生とは言え塔の魔術師。バイト代はかなり良い。だが、その中でも更に高報酬なものとなると専門性が求められ中々手が出せない。自分の力量と報酬のバランスを見てギリギリを狙っていく。当然美味しいバイトは希望者も増える。早い者勝ちのものもあるが、多くは成績順だ。

「……うーん……」

掲示板の前で唸るピノに声を掛けたのはルカだった。

「お悩みのようね。良いバイト、あるよ」

路地裏の胡散臭い商人のように声を抑えて手招きをする。

「え、何？」

訝しむ事もせずピノはその招きに応じた。

「じゃん！」とルカが掲げて見せた紙は、玄獣の生態調査の求人広告だった。

「まさか、剥がしたの？」

「絶対やりたいもの」

掲示板から広告を剥がすのは違反行為だが、ルカは堂々と言い切った。最早清々しく、ピノは咎める気も起きずその求人に目を通す。

「えーと『八〇二年に閉鎖されたラヴト鉱山にて近年目撃情報が多数寄せられている玄獣につ

いての調査』…え、調査補助じゃなくて？」

「『正体とその生態についてのレポート』、『現場の状況報告』の提出が求められてるものみたい」

なるほど。上級学生向けの案件だ。

「流石に一人で行こうとは思えないから、パーティー募集中なの」

「へえ。成長してんなルカ」

「そうだね。ルカなら一人で突っ込みそうなのに」

いつから聞いていたのか、ケイナとソーマが側に立っていた。

「ふたりも行く？」

ルカの提案にピノは脳内で算盤を弾く。分け前は減るが、バイト代はかなり良い。六人程度までなら損はないと判断した。

「私はいいや。役に立たんし。アイテムだったら売ってやるぞ」

ケイナは錬金術士だ。現場に出るタイプではない。

「ソーマは？」

「うーん、そうだな。良かったら一緒に貰おうかな」

「よし！」

「物理アタッカー、回復補助、防御。あとは——」

「おいおい。戦いに行くんじゃないだろ」

ケイナが呆れ顔で突っ込む。ピノは目を瞬いた後、「そっか」と頷いた。

「えーと、玄獣に詳しい人、回復補助、記録員。あとは？」

「幸運係も連れて行けば」

「ラヴト鉱山？行く」

幸運係は即決だった。どうやらその閉鎖鉱山は普段は立入禁止らしく、ユークは一度入って見たかったらしい。

これでメンバーも揃ったと事務局へ申請に向かう。バイト受付の事務員はルカが差し出した求人を見て難しい顔をした。

「こんな求人、あったかなあ？」

控えを探しても出てこない。事務側のミスで控えを取り忘れたのかも知れないが、不安のある案件に許可は出せない。

「悪いけど、一度調べてから問題がなければ貼り直すから、それからまた来てくれる？」

「えー!? せめて予約! 予約済みにしてください!」

「うーん…考慮はします」

明確な許可は出せない事務局員に名前を書いた紙を押し付けて、ルカは仲間たちに引き摺られていった。

後日、ルカを呼び出したのは事務局ではなく鉱石学講師だった。

「このバイトの件だが」

「あっ！それ！なんで先生が!？」

求人広告の紙片をルカに見えるように机に置き、ファズは頭痛を抑えるような仕草で続けた。

「調べた処、学生向けの案件ではなくてね。ただ、塔は過保護じゃない。君がどうしてもやりたいというのなら意思を尊重しよう」

「やりたいです!」

警告に対してあまりにノータイムな返答に複雑な表情を返す。

「解った。なら、講師と上級学生を一人づつ以上連れていきなさい。それが条件だ」

「って」

「へー。先生たちにもバイトの依頼ってあるんだ？」

ルカから伝え聞いたピノは暢気にそう返した。

「だからケイナ、来ない？」

「行くわけないだろ。そりゃそんだけ危険って事だ。だいたい、最初に言った通り私は役に立たん」

「「えー」」

ルカが今求めているのは肩書、立場だ。上級学生に当て嵌まるだけでパーティーに入れる価値はある。

「こういう時は先輩だろ。あつちに頼め。んで、引率は誰に頼むんだ？」

「まだ決めてない。玄獣学の先生は付き合ってくれる気がしないし、ファズ先生は行きたいけど行けないと言ってたし。アルバ先生かオルクレア先生辺りが頼みやすいかなあ？」

「玄獣サラサラ関係ないな！ んじゃオルクレア先生の方がオススメだ」

そう言っただけでケイナはヒラヒラと手を振った。ルカとピノは顔を見合わせ、大人しく引き下がることにした。

皆の頼れる先輩ことユグシルはいつものように押し切られ、ルカとピノに連れられ地質学研究室の扉を潜った。

「オルクレア先生いますかー！」

「あら？ 何の用かしら」

ルカの大声に応え胸を張って出てきた若年の講師に、ユグシルが事情を説明する。用件を理解

したオルクレアは、わなわなと全身を震わせた。

「~~~~っ！」

たつぷり溜め込んでから、腰に手を当て胸を張り、力強く吐き出した。

「いいわ！生徒の頼みだもの！先生付き合っただけで！」

「やったー！お願いします！」

「ありがとう先生！助かるわ!!」

ぴよぴよこと跳ねて喜び合う三人に不安を感じ、ユグシルは自分がすっかりしなくてはならないと強く感じた。

「あの…、出来たらやっぱり、エトラかケイナ連れてかない？」
捌ける自信が全くない。

「思ったより遠かったね」

「…なんだから、少し不気味な所ね」

ラヴト鉱山。採り尽くされた廃鉱山。近郊に建てられた様々な施設ごと今は眠りに就いている。地竜の孫娘は、廃都の寂しさだけではない、何処か不穏な…異質さを感じ取った。

「あっユーク！単独行動はダメだよ！」

「ピノ、不用意に設備に触らないようにね」

山を見上げるオルクレアの後ろでは、ソーマとユグシルが慌ただしくメンバーを諭していた。

「良かった…ソーマがいてくれて…」

改めて、よくもまあこのメンバーで許可が下りたものだと思を吐く。もしソーマが居なかったら、流石のユグシルも断っていたかも知れない。

「確認するわね！今回の活動目標は『鉱山跡に住み着いた玄獣の調査』、現地では『名前』と『凡その数』が判ればOK！ね？」

オルクレアが人差し指を立て生徒たちを振り返る。ユーク以外の各々が背きを返した。

「じゃあ行きましょう。皆、先生から離れないでね！」

坑道は暫く一本道で、全員何事もなく歩を進めていく。暗い坑道をカンテラや杖で照らす。朽ちた枕木、置かれたままの機材。物珍しさからキョロキョロと忙しなく視線を遊ばせる者、何か目的を持った視線移動を行う者、何か起きても対応出来るようにと全体を視界に納めて進む者。

完全に光が届かなくなった所で、異変に気が付いた。

「え」

「は？」

壁をも天井をも、辺り一面を虹色の結晶体が被っている。

「水晶？」

ピノの言葉に、ソーマは首を傾げた。

「違う…これはたぶん、鉱石の類いじゃないんじゃないかな」

オルクレアはソーマの推察に満足げに肯きを返している。結晶に手を触れたルカは目を見開いた。

「力…、これ玄獣の力の結晶じゃない!？」

「…採れない？」

ユークが採掘を試みるが上手くいかない。結晶は壁面に頑強に張り付き、乱暴に器具を打ち付けても傷さえ付かない。

「キレイ…だけど、ここからはテリトリーだってことだよね」

ゴクリと喉を鳴らすソーマにユグシルも同意する。

「本当に巢食ってたんだね。仮住まいではなさそうだ」

「ルカ、何の玄獣か判る？」

漠然と大物の予感がする。これが力の結晶だというのなら、大層溜め込んでいる。こんな力の溜め方をする玄獣は資料にあっただろうか。

「ごめん、ちょっと判んない」

ツルリとした結晶の表面を撫でる。

鉱石のように、硬質で冷たかった。

奥へと進む程、結晶の壁は厚みを増していく。その分道も狭くなっていく。所々結晶で道が塞がれている事もあった。

「ズンズン進んでるけど、大丈夫？」

「今の処この結晶以外に痕跡がないのよね」

生命活動の痕跡が見当たらない。動物よりも精霊に近いタイプの玄獣なのかも知れない。

「だいじょーぶよ！先生がついてるんだから！」

オルクレアは胸を反らして生徒たちを鼓舞する。正直ユグシルは不安しか感じないが、だからと言って何にどう警戒したらいいのかも判然としない。

「あれ？何か……」

「どうかした？」

歩を止め目を擦るソーマに、先行していたルカとオルクレアが振り返る。

「今、何かが……」

「あ……道だ……あれ？あっちにも？」

「え、ちよつとユグシルさん？」

ふらふらとユグシルが歩き出す。明らかに様子がおかしい。

「今まで一本道だったのに。どう進みます？」

「えっ 何言ってるの??」

見逃した分かれ道があっただろうかとルカは辺りを見回すが、通れそうな道はない。今まで通り、結晶が壁となって分岐は塞がれている。

「あ、やっぱり何か居る…」

「えっ 何処に??」

ソーマはソーマで、焦点の定まらない瞳で何かを追っている。

「ど、どうしちゃったの？」

ピノはオロオロとユグシルとソーマを見比べる。

「うーん…幻覚、かしら」

「幻覚!？」

会話も通じなくなってきたいるふたりの裾を握りながらピノとルカはオルクレアを見た。

「よいしょっと」

オルクレアはその手に持つ大きな杖をブンツと力強く振り抜いた。灯りとして使っているためその軌跡はさながら流星の如くに弧を描いた。

「ひえっ!」「危なっ!」「ガッ」「いッ…」「」

「目は覚めたかしら!」

一振でまとめて打ち据えられた三人はポカンと尻餅をついていた。

「???」

「は、はい…」

「ありがとうございます…?」

「宜しい!このくらいの幻術なら気を付けていたら大丈夫よ。意識したら防げるわ!」

一撃を避けたルカとピノも思わず暴れる心臓を押さえ付けた。友である玄獣の加護があるルカと状態異常耐性が高いピノには効かなかったようだが、ユークはしれっと掛かっていたようだ。打たれた場所を擦りながら未だキョトンとしている。

「ユーク、大丈夫?」

「…幻覚、だけじゃないかも」

「え?」

先に進みかけたルカが、カクンと膝を着き叫んだ。

「先生!力が入りません!」

「え!?!」

「他の皆は進まないで!」

制止をかけ、オルクレアがルカを引き摺り戻ってくる。

「ユグシルくん、暫く空気の流れの操作をお願い。あっちのがこっちに来ないように。あと、

進んで来た方向からなるべく新鮮な空気を取り寄せて」

「え、あ、はい！」

暫くすると、ルカはヨロヨロと立ち上がった。

「あービックリした！戻ってきました」

「毒ガス：みたいなものね。弱いものだけど、進むのはちょっと無理かしら」

オルクレアの見立てでは、自然発生したものではない。恐らく住み着いた玄獣の仕業だ。オルクレアとピノにはあまり効かないようだが、ルカに効いたのなら他のメンバーには厳しいかも知れない。

「でも、他に道は——」

「…探してみようか」

ユグシルが魔術を切り替える。音波走査。音響定位だ。目に頼らない経路探索の結果、ユグシルは首を傾げた。

「これ…って」

「何よ、どうしたの？」

ユグシルは逡巡する。ひょっとしたら、自分の魔術が何処かおかしかったのかも知れない。

「も、もう一度…」

再度超音波を走らせるが、結果は同じ。

「この結晶、反響しないんでしょうか？」

「そんなことないと思うけど…」

吸収されるわけではない。素通りしてしまうのだ。

「じゃあ、『ない』のよ」

「えっ？」

言い切るオルクレアに頷いて、ユークが結晶で塞がれた道へ向かう。一步、結晶の壁に足を掛けるように踏み出すと、

「…通れた」

最初から幻覚に掛かっていたのだ。在らぬ道が見えたり何かの影が見えたのは、副次的なものだったのだろう。

「いや、だって、アタシ触ったけど!？」

硬質な手触りを覚えている。

「幻覚^{うそ}と実在^{ほんとう}を織り混ぜてるのね」

「あと、たぶん…結晶に触れると、毒が効きやすくなる」

ポツリと溢したユークに視線が集まる。毒の存在に早く気付いていたのはユークだ。ユークも結晶の採取を試み、触れていた。

「と、言うことは…」

道が塞がっていないかどうかを逐一触れて確かめる訳にはいかない。つまり。

「この先に進むのなら、ユグシルくんが肝になるわね！」

思わぬ大役にユグシルが喉を鳴らす。このパーティーの中で、他に音の魔術に長けた者は居ない。

結晶の壁の向こう側でユークが「早く進もう」と揺れている。

覚悟を決めて、ユグシルは頼れるサポーターの肩を叩いた。

「……ピノ。サポートをお願い」

「はい！」

分岐の度に幻覚を確認し、毒ガスを探知する。幻覚に沿って進むと必ず毒ガスの濃い場所へ誘導されてしまう。

「目撃情報が多発……って割には、出てこないね」

「入り口付近に居るのかもね」

「今更!？」

大分深みまで来ている。ここまで出逢わないと、外に居る可能性も捨てきれなくなってくる。

「あ……行き止まり……？」

「……崩落の跡だ……」

作業中の事故だったのだろう。よく見れば作業員の痕跡も見てとれる。

「……う……」

そこへ、甲高い叫声が響き渡る。

「え、何!？」

金属音にも似ているが、恐らく鳥の声。反響し過ぎて出所を特定出来ず、皆キョロキョロと辺りを見渡した。

「あっ！あそこ!!」

ルカが指差すと同時に、オルクレアは生徒たちの全面に広域の防御壁を展開した。

「皆下がって！崩れるわ!!」

大きな音の影響か、はたまた声の主が何かをしたのか。機材や遺体を巻き込んだまま山となっていた土石が更に崩れて押し寄せる。

「回避！」

オルクレアの号令に従い生徒たちは来た道を引き返す。十分な距離を取ったのを確認してオルクレアは防壁を解いた。

「ふふん！大地はわたしを傷付けないわ！」

胸を張り、杖を振るう。崩かかって来ていた土石は引き返し、または脇に逸れ、脆くなっていた岩盤を支え直す。土石の山の頂上に居た何かは、スッと消えていった。

生徒たちが戻ってくる。

「今のが巢食っている玄獣？」

「ルカ、姿見えた？」

「うん！あれは……レイビアだった！」

聞き馴染みのない名前にルカ以外は首を捻る。

「ええと、どういう玄獣？」

骨のような外殻と宝石のような核、花弁のような羽翅を持つ、小型の竜のような玄獣だ。蹴爪には毒があり、幻術を用いるとされる。

「でも、大人しくて人との遭遇を避ける、慎重な子だって聞いてるけど……」

あの崩落は意図して引き起こされたように思う。ルカの聞いた限り、声にも敵意があった。

「ご機嫌ナナメだったのかな？」

「他にも居るかも知れない」

ユークの呟きに視線が集まる。

「精霊の動きが、変」

色彩と結束の精霊が明らかに何かの命令に従って動いている。しかし、統一されてはいなさそう。少なくとも二種類。命令を下しているものが二体はいる。

「追ってみる？」

生徒たちの視線がオルクレアに集まる。

「判断はあなたたちに任せるわ！山では先生無敵なんだから！」
生徒たちはお互いを見合い、頷いた。

「……じゃあ、お言葉に甘えよう。あっちに消えたよね」

ソーマが確認すると、ユークが少しずれた場所を指差した。

「……あっちの方に、精霊が溜まってる」

「一応音で見てみよう」

ピノの補助を受けながらユグシルが術式を走らせる。

「よーし！今度こそしっかり姿を確認させて貰うわよー！」

六人は崩落していた通路の奥へと歩を進めた。

「……なるほど」

玄獣学講師はレポートを読み終え机に置いた。

「なるほどなるほど。ははあ」

しきりに納得を繰り返し、なかなか目を上げない。だが、玄獣学を受けてきたルカには彼が沸々とボルテージを上昇させているのが理解できていた。耳を抑える準備は万端だ。

「卵!! 卵とは!! 普段大人しい生物が凶暴になる原因としては妥当だねえ! 営巣を実際に見られたのは素晴らしい! 精霊に近いタイプの玄獣も他個体との結合で子を為すというのも興味深い! この依頼主は何処だったか。暫くは手を出さないよう言っておかないと。巣立まで定期観測が要るよねえ! いくらでも協力するよお。玄獣を精霊使役の観点から観測したというのも面白いね! あつ、レポートとしてだけ……ここは記述ミス。もう一回図書館で調べ直しておいでえ」

「ありがとうございまーす」

添削の礼を言ってその場を辞した。

「すっ……」

「先生、玄獣好きなのよね」

ともかく、指定された箇所を修正して事務局に提出すれば完了だ。

「先生は報酬要らないって言ってくれたから、五人で山分けね」

「危なかったけど楽しかったし、いいバイトだったなー!」

「たぶん今後クーシェ先生から定期的に依頼入ると思うし、初代班として売り込もう」と自分の事も是非にと追い継ぎるピノに笑顔で返して、ルカは図書館へと向かったのだった。

【冬休みの夏の話】

樹歴 八六五年*



塔の夏休みは短い、里帰りも出来ない。そう嘆いたビナーズが空中水泳を敢行し厳しく叱られた年の冬。ケイナは思い付いた。

「冬休み、ユークン家行こうぜ」

「……………うち？」

突然家に行きたいと言われたユークは、流石に少しだけ驚いたのだろう、コテンと首を倒してケイナを見た。

「ビナーズはネツアクの方が好みだろうが、流石に短期じゃ学生にはムリだからな。ユークン家、確か山人中だろ」

「……………」

「あー、そっか！南なら今夏なんだ！」

思い至ったルカがテーブルに手をつけて立ち上がる。

「なるほどー！確かにそれなら長い冬休みの間に夏を満喫出来ますねー」

良案だ、とネレーナも手を叩く。本当は故郷の海で遊びたいのだが、偶には山も良い。どうか遊びの予定は何でも楽しそうだ。

「うち、遠いけど」

ユークの実家はターミナル所在地から離れた山奥にある。観光スポットでもない集落で、交通の便も些か悪いド田舎だ。皆で遊びに行くような場所ではないだろうとも思う。

「あー、まあ、近くに宿でもあれば私たちはそっちに泊まる。ユーク中々帰れてないつつつたる。良い機会じゃないか」

なるほど。雑だが面倒見の悪くない学友は、ユークが月見の時に洩らした話を覚えていたらしい。

だが残念ながらユークの実家のある集落には宿泊施設などない。恐らく大人数になるであろう学友たちを泊めるスペースの確保は難しそうだ。

そんなわけで、ユークの故郷から最寄で宿泊施設のある村に遊びに行く事になった。

「やりたい研究もあつたんだけど、折角だしなあ、って。思つたんだけど」

「それは私もだが、フィールドワークと考えれば悪くないぞ」

慣れない山道を登りながら小さくぼやいたソーマにケイナが声をかける。肯きを返し、ソーマは前を行く背に目をやった。

「あの三人は元氣だなあ」

「体力凄いよな」

ターミナルのあるテラメルコから馬車を乗り継ぎ、麓の町から徒歩で宿泊予定の村へ向かう。

その道中は登山だった。

はあ、と呼吸を整え、ソーマは先陣を追う。そこそこ整備された道ではあるが、運動不足気味

の身体にはきつい。ポタリポタリと汗が滴り落ちる。山に入ってからずっと降り注ぐように聞こえているノイズが煩わしい。

「これ、何の音？」

「『これ』って……ああ。ワーナーには居ないもんな」

ケイナは顔を上げて頭上を見渡した。ソーマの少し後ろを歩いていたユークがソーマの質問に答える。

「セミ。虫」

「えっ、これ虫の音こえなの!？」

驚いて少し音量の上だった声は前を行く学友たちにも届いたらしく、三人は歩を止め振り返った。

「そっか、ワーナーには居ないんだ。そういや聞かないもんね。気付かなかった」

「ビルグラントには居るんだ？」

ルカの発言にピノが尋ねると、ネレーナが答えた。

「居ますよ。こんなジャージャーした鳴き声じゃないですけど」

どうやらセミを知らないのはソーマだけらしい。

「モノにも依るが、結構可愛いカオしてるぞ」

「セミ捕りますか？」

ふんすとネレーナが拳を握り、ピノはワクワクと目を輝かせた。

「競わないぞ。でも一匹くらい捕ってソーマに見せてやれ」

「こんだけ居るんだからすぐでしょ」

セミを捕まえに動き出した三人を眺め、ケイナはその場に腰を下ろした。

「やったな。小休憩だ」

名目上自分の為にセミを探す三人には悪いと思いつつも、インドア派のソーマは素直に休憩に応じた。水筒に口を付け、タオルで汗を拭う。ワーナーでは味わった事のない湿度の高い熱気に身体がついていかない。

「ところで教えて貰ったこの虫除けの魔術、セミには効かないの？」

皆からの強い勧めで、今も体に纏っている。

「それは微弱な防御術式だから……『攻撃を防ぐもの』だから」

隣に腰を下ろしたユークがそう返す。主な対象はソーマに馴染みのないもうひとつの虫。『蚊』だ。勿論ハチやアブ、ヒルなどからも身を護る。

「塔って、本当虫居なくていいよな」

改めてしみじみとケイナは呟いた。

セミ捕り合戦はルカの勝利で幕を閉じ、ソーマは礼を言っ即セミを逃がした。口に出さなかつ

た感想は「可愛くはない」だった。

高原に入れば暑さも和らいだ。夕刻前には目的の村に着き、宿に入れた。地元民が避暑地として利用しているらしく、それなりに賑わっている。若い外国人団体は僅かに注目を集めたものの、声を掛けてくる者はなかった。三人ずつで二部屋取ったが、ユークは明日から暫く里帰りの予定だ。

「外国人に対応した観光用の宿でもないし、地元民^{ユーク}が居なくなるのはちょっと不安だね」

「大丈夫じゃない？ ケイナとピノ居るし」

何か知らない内に粗相をするかもしれないというソーマの不安にルカはあつさりと返した。ケイナもピノもなんとなくホド域文化に詳しそうな事を察していた。

「それより、部屋割り勝手に決められちゃった。当然のように割り振られたけど、何基準？？」
ルカ、ネレーナ、ケイナで一部屋、ソーマ、ピノ、ユークで一部屋だ。ケイナとピノ、ユークには明白である。

「性別」

「性別!？」

「誠に遺憾」

ピノは軽く唇を尖らせた。

「部屋にシャワーとかなかったからな。大浴場しかないとなれば、ピノ、止められるかもな」

「大浴場も性別なの？　なんで？」

「南は同性になら裸体を見せても平気な奴が多いらしい」

変なのー！と一頻り騒ぐと、そろそろお腹が空いてきたと誰からともなく気が付いた。

「…風呂は悩ましいが、料理は楽しみにしてる」

「美味しかった…」

山菜の天ぷらや川魚の塩焼き、茶碗蒸し。ソーマには馴染みのない料理ばかりだったが、どれも美味しかった。美味しかったが、食べ盛りの学生たちには幾分かヘルシー過ぎたようだ。売店が閉まる前にとお菓子や軽食を買い込んでいた。

「ユーク、家までどんくらい？」

「馬車で半日」

「遠！」

南方では竜車は一般的ではない。特にホド域では玄獣の類いは上位のものとして敬われているので使役などされない事が多い。このあたりでは、背の低いがつしりとした『馬』と呼ばれる動物の牽く車が山間を定期的に巡っている。馬は繊細で勘が良いため玄獣などの驚異を察知し

てくれる。その分、迂回や停滞が起こり得る為発着は定時通りとはいかない。

「ケイナ？」

「うん？」

微かに疲れが見て取れる表情に、ソーマが声を掛けた。

「あーいや、大丈夫だ。気にするな」

心配されていると判り、気を取り戻しヒラヒラと手を振った。ユークがポツリと呟く。

「年長者だから…？」

「言うな」

北では若く見られるケイナも、此処では粗方の歳はバレてしまう。宿の人間に「学生さんたちの引率役」と認識されたのか、注意喚起や連絡事項が全てケイナに回ってくるのだ。やり取りに疲れた…というよりは、唯一の大人として扱われる事に僅かばかりダメージを受けている。

「誰も問題起こすなよ。私が怒られる」

「？ なんで？」

「なーんーでも」

エトラを誘えばよかったと独りごちるケイナにピノだけは気の毒そうな苦笑いを返していた。

「よく解んないけど、怒られるような事はしないわよ。それよりユーク、戻ってきたら探索付き合っって欲しいから宜しくね？」

「あ、僕もちよつと探したいもの有つて……ユークに着いてきて欲しい、かな」

幸運役はコクリと頷きを返した。遊びに来たとはいえ、塔の学生。遊びの内容も自分の興味を充たすもの……研究の一端となる。

翌朝ユークが出立した後、各々周辺の地図を手に出掛けて行つた。ケイナは川辺の生態観察、ネレーナは村内で伝統音楽の聞き込み、ピノとルカは玄獣探し、ソーマはそれに付き合ひながら地質調査。夕刻には宿に戻りそれぞれに成果を話し合つた。

「川の方にあんま見ない感じの石があつたぞ」

「じゃあ明日はそち行つてみようかなあ」

「気配や痕跡は多いんだけど、今日は出会えなかつた」

「森の中トンボ多かつた！」

「村の人たちはいいひとたちでしたよ」と

そんな調子で二三日経つと、ネレーナは村の人気者になっていた。

「宴会に誘われたんですけど、皆も行きませんか？皆で来て良いよと言って貰えてるので」

「それなら行くけど……ネレーナすご……」

ケイナとソーマには真似できない所業だ。

「皆塔の学生さんなんだってねえ！何やってるんだい？」

「塔ってのは頭の良い人が行くところだろ？おまえが聞いたって解るもんかい」

「違う！でもネレーナちゃんの演奏が凄いのは解るよ！」

「あんたら皆出来んのかい？」

ネレーナは木製の横笛を乞われるままに演奏しており、ルカとピノが主に村民の相手をしている。ケイナとソーマは怯えに近い様子でルカとピノを盾にしている。

「マズったなソーマ。タダ飯に釣られるんじゃないかった」

「僕は言ったよ、遠慮しとこうって」

「だが、ソーマ。宴会を白けさせる真似は控えろよ。呼んで貰ったんだからな」

「…解ってるよ」

解ってはいるが、機嫌の悪そうな表情が誤魔化せない。適当なところでふたりに抜けるか、とケイナが首を巡らすと、村民の一人と目が合ってしまった。愛想笑いで軽く会釈をすると、寄ってきてしまった。大失敗だ。

「あんたはこの辺の出身かい？」

「あゝ、いや、出身はリディウムです」

「そうかい。いやてつきり」

なるほど、とケイナは心中頷いた。考えてみれば、ケイナが年相応に見える彼らには他のメン

ツは実年齢よりも上に見えている筈だ。年齢差はバレていないだろう。宿の人間がケイナにばかり話しかけてくるのは、外国人が恐いからだ。

「塔っていうと、学生さんたちも呪術士なんだろう？ 昔はこの村にも居たんだが、今はもう居なくてね」

適当に相槌を打つケイナを横目に、ソーマは呪術士という表現に首を傾げた。ケイナは訂正する様子もなく流しているので、ひよっとすると魔術師という意味合いなのかも知れない。ホドで主体となる魔術は呪術だと術史で習った覚えもある。

「だから呪術的な困り事が今幾つかあるんだ。ちよっと腕前を見せてくれないかい」

「んー、あー、成功報酬は頂きますけど、それでよければ」

ちよっかりしてんねえ、と笑いながら、村民は幾つかの案件を紹介した。獣避けの結界修繕、失せ物探し、術具の修繕など、聞く限りでは力になれそうなものが多い。ケイナは「では明日伺います」と時間と場所を決め、ソーマとふたり宴会場を後にした。

「ルカだいぶ楽しくなっちゃってたけど、大丈夫かな」

「残してきたのは皆ウワバミだ。心配ない」

翌夕。

「幾つか依頼を受けてきたから振り分けたい」

「わーい！ バイトだ」

誰も文句を言うこともなく、拡げられた資料を覗き込む。

「結果修繕はルカとソーマ、術具修理は今日も幾つかこなしたし継続して私が。診療所の方はピノとネレーナ。これでどうだ」

「獣避けて、玄獣も含まれるのかな？」

「この辺りではどんな結界を張ってるんだろう。読み解ける術式だといんだけど」

「診療所は…『相談』？ 詳細なしですか」

「薬の事とかだったら解らないなあ。どんな内容か聞いてないの？」

「精神疾患がなんとか。一応出来そうなものを拾ってきたつもりだから頑張ってくれ」
何にせよ、バイトに時間を掛けるつもりはない。やりたい事は山とあるのだ。

「じゃあ明日からやるとして。お風呂行ってこようっと！」

「私も！ 浴衣よくいなしの大浴場にもそろそろ慣れてきたわよ！」

時間ギリギリの人の少ない時間を狙って行くケイナとソーマはただただ「すごいな…」とビナーズを見送った。

「知らん奴ならともかく、知り合いに肌晒すのは抵抗あるな」

「知らない人の方が嫌じゃない？」

どちらにせよソーマはひとりだけ浴場が別になるので知らない人とのみ入ることになる。

「でもそれより、話しかけられるのが嫌なんだよね…」

女の子に囲まれて羨ましいだとか、ネレーナの体つきについての下世話な話題とかを振られてもソーマには対応出来ない。

「思考が性的過ぎない？ そんな人間相手に肌を晒しているかと思うと怖気がする」

「性を分けて考えてるって事はそういう事なんだろ。同性には興味ない奴が多い筈だから安心しろ」

異文化への偏見を募らせつつ、ベタつく身体に限界を感じたふたりは諦めて風呂へ向かった。

ソーマとルカは村の外れ、住宅地から離れた農園にやって来た。果樹がメインのようで、今は花を終えた枝先に袋が被せられている。

防御結界の要所までの案内を頼むと、農家は不審そうに柵を示した。

「だから、それよソレ」

「……………えっ…力業…」

要などない。効率など知らないものと言わんばかりの継ぎ接ぎだらけの術式に目を見張る。綻びが出るのも当然…寧ろよく保っていたものだ逆に感心してしまう。

「綻んだ処繕ってくれたらいいから」

「いやあの…一回全部張り直していいですか…」

メンテナンス性皆無のこの術式に手を加えようとするよりも、一から組み直した方が絶対に楽だと確信した。

一頻り廻って各所の特性を確かめた後、要所を決めて術式の構築に取り掛かった。

「これ絶対後々書ききされてメンテ性失うやつ」

「………」

後の事は知らない、とソーマは無言で構築を続けるが、作業をしながらもルカは独り言のように話続けた。

「獣避け。玄獣も対象なのかな？玄獣は人の畑狙わないか。でも普通の獣相手にしてはちよつと強いよね。特に果樹区画に付け足されてるこの式…あー、多分鳥型の玄獣避けだ。嫌がる音出してる。畑の方、こっちは猪、これは…もぐら？」

そうだね、ホントだ、と心の中だけで返すソーマは自分の口が動いてない事に気付いていない。「継ぎ足し継ぎ足しだけど、効果としては的確に足してあるね。うーん。読み解いてみると結構凄いかも」

とはいえこのカオスさはソーマには許容できない。こんがらかった糸のようなもので、解いてキレイにするには労力が掛かりすぎる。結び足すのは簡単だが、自分が携わったものがそんな

状態なのは許せない。

「さっさと終わらせちやおう」

「はい」

後はひたすら黙々と。ふたりは一日がかりで結界を新調した。

ケイナは昨日に引き続き術具の修理をして回っていた。各戸の冷蔵庫や川沿いの堤防、集会所の放送機、街灯。コクマ国域以外でこんなに術具が普及しているのは珍しい。しかもこんな山奥でと思えば、術具のケアが行き届いていないのも納得できた。

「術具は要石に精霊を取り込んで動いてるので、ご機嫌斜めになってきたら……これは静かな所に、これは水の中に一日くらい置いて、これはおひさまに当ててあげて、これはちよつと炙つてみてやってください」

直した術具の要石を指しながらそれぞれの応急処置を伝えていく。

「そんなんでいいのかい？ 昔は祈祷とかしてた気がするなあ」

ああ自然崇拜の国だもんな、などと考えながら肯定を返す。

「それも良いんでしょうけど、ちよつと人を選びますからね」

報酬を貰って次へ向かう。塔の学生にしては破格の安値だが、元々稼ぎにきたわけではない。

そもそも南方は北に比べ全体的に物価も安い。これも縁と思うことにした。

「相談があると聞いて！」

「こんにちは〜」

ピノとネレーナが診療所の扉を潜ると、簡素な作りの部屋の中に、医師と思しき人と助手らしき人だけがいた。

「あら。あー、相談。はいはいはい。確かにお願いしたね。よく来てくれました」

助手らしき方が笑顔で迎えてくれる。たくさんのおもたちを育ててきたような逞しさを感じる人だった。医者の方はひょろりとしていて少し頼りない印象だ。

「こちらにどうぞ。ほら座って座って！」

「あ、はい」

「失礼しまーす」

促されるまま奥の部屋へ進み、勧められた簡易な椅子に腰を下ろす。

「それで、相談っていうのは……」

「村の外れにね、呪術師が住んでいた家が放置されてるんだけど、誰かが住み着いてるみたいなんだ。様子を見てきて欲しいんだよ。私も見に行ってみただけど、中に入れなくてね」

入れない、という事は結界でも張ってあるのだろうか。そうすると、住み着いている誰かもまた魔術師の可能性が高くなる。ネレーナはそう思いピノに目をやった。ピノは頻りに首を捻っている。

「えーと、解りました。ちょっと見に行ってみます」

そうして診療所を出て少し離れた処で、ピノは立ち止まった。

「おっと？ どうしました？」

「んー、いや：あの診療所、なんか違和感あった」

「どういうことです？」

「うーん：よく解ないんだけどさ。なんか変、な気がする」

医療を専門的に学んでいるわけでもなし、ピノの菌切れは大変良くない。ただ、医務室に入り浸っている経験からか、何という事もない違和感を感じ取っていた。ひよっとしたら『文化の違い』で片付けられるものかも知れないし、そうではないかも知れない。

「違和感と言えば、ケイナは『精神疾患がどうの』って言ってましたよね。全然違いましたね」

「まあ又聞きみたいだったしね」

「これは……」

「見事な廃墟」

指定の場所には、ボロボロで草木に飲まれた木造家屋があつた。庭を囲う柵は朽ち、全体に絡み付いた蔦が崩壊を留めている。結界以前に、侵入口が見当たらない。

「誰か住み込んでるっていうならどっかに入れる場所がある筈ですよ、と……」

「藪蚊が凄そう……」

ぐるりと家の回りを回ってみたが、人が出入りしていそうな痕跡はない。

「これは住んだりはしてないでしょ」

「勘違いですかね」

ジャージャーと鳴り注ぐセミの音こゑの中ただ立ち尽くす。茂みを分け入って中を覗くべきか、人の形跡は無しと報告してしまうか。

「一応入ってみますか」

「う……」

唸るピノに構わずネレーナはヒョイと柵を乗り越えた。

「……………」

流石におかしい、とケイナは一人眉を顰めた。

夕刻を過ぎても誰も部屋に戻ってこない。悩みに悩んだ末フロントにも確認を取ったが、朝出ていつて以来、外国人学生客の姿を見たものはいないと言う。

それぞれに何かあったか、はたまた自分だけタイミングが合わず置いていかれたか。

「…………様子見に行ってみるかあ」

溜め息ひとつ、ケイナは立ち上がった。

ソーマとルカが向かった筈の場所では、ふたりに案内をしたという人物には出会えたが、肝心のふたりは見付からなかった。曰く、暫くその辺に座り込んで何かやっていたようだがいつの間にか居なくなり、完了報告も受けていないという。

座り込んでいたという場所を見れば作りかけの結界術式が放置されていた。ざっと眺め、ソーマらしい癖で丁寧に組まれた術式に心の中で拍手を送った。一から組み直しとは恐れ入る。良い仕事をして報酬は見合わないものなのに。食い潰される職人タイプだな、と他人の将来を憂いてしまった。

しかし見た感じ緊急的な離脱ではなさそうだ。ある程度切りの良い処まで作られており、「一旦此処で切ろう」という意思を感じる。差し迫った異常事態が起きたとは考え辛い。「続きは

明日にするか」と切り上げた。だから完了報告も入れていない。その線が有力だが：ソーマの性格上、依頼人にその旨も報告しそうなものだ。

首を傾げつつ、ケイナはもうひとつの依頼元へ向かうことにした。

ピノとネレーナが向かった筈の診療所は、明かりが灯っていなかった。営業終了の様相だ。村の診療所なんて二十四時間じゃないのか、と途方にくれる。

傍に自宅が併設されているかも知れないと望みを抱き直し周辺を覗き回るが、灯りが見える建物は見当たらない。

「……………」

ダメ元で真つ暗な診療所の戸を叩く。

幸いにも、暫く待つと恐らく玄関に続く廊下に明かりが灯った。夕闇の中明かりも点けずに居たのかと思うとそれはそれで恐いが、昼寝が長引いたり夜が早かったりの可能性はある。気の所為だったと思わせない為にもう一度ノックをする。客を待たせて焦る様子もなく、足音はゆっくりと近付いてきた。

「はい。どうしました？」

出てきたのはヒヨロリとした色白の人物で、ケイナは爪先から頭まで一目で確認されたのを感じ取った。医師で間違いなさそうだ。

軽く挨拶の言葉を挟んでからピノたちの事を尋ねると、柔らかに垂れた目が俄に開かれた。

「戻っていないんですか」

こちらにもまた、依頼の完了報告は受けていないという。着いて来ようとした医師を制止し、ケイナはふたりが向かった先——呪術師の空き家へと独り行ってみる事にした。

「…あれ？これ……」

「何？どうしたの？」

黙々と結界を作成していたソーマが顔を上げるとすぐにルカが寄ってきた。ルカは結界作成に明るくない。主力はソーマで、ソーマからの指示が無ければルカは基本暇だった。

「ちょっと見てみて貰える？ここの……」

「ん……人避け？」

「だよね」

区画ごとに様々な獣避けがあつたが、人避けの結界が張られた区画があつた。これまでの荒々しい結び目と異なり、そこだけいやに整った術式で綺麗に継ぎ足されている。恐らく施術者が違うのだろう。依頼内容が結界の修繕である以上、綻び以外はそのままの機能を再現しなければならない。だが、この人避けの術式が元々あつた正当な機能なのか、それとも何者かに追加

された村にとっては予期せぬ機能なのか判断がつかない。

「現場、見に行ってみる？」

「そう…だね」

依頼人はあまり詳しくなさそうだったし、それよりも。好奇心が勝ってしまった。

「けほっ、…かなり埃っぽいですね」

ネレーナとピノが軋む戸を開いて中へ入ると、室内もやはり人が使っているようには思えない有り様だった。

「やっぱあの人の気の所為だよ。野生動物の影でも見たんじゃない？」

「そうですね…っ」と

それならそれでフンや足跡はないかと辺りを見回していたネレーナが、ふと天井の方へ目を遣り動きを止めた。

「どした？」

「…えー、っと…あれ？セミの音止んでません？」

「……………ホントだ」

「それになんだか、涼しいような…」

家の中に入って陽射しからは逃れられたが、湿度の高いホドでは日陰に入った程度でそんなに気温は変わらない。高地とは言っても昼間はそこそこに暑い。実際、先程までは蝉時雨の中ふたりとも肌を湿らせていた。

「ユニ先生の結界の中みたい」

「ああ、そんな感じですね！」

暑さが苦手な空間術学講師は夏になると避暑結界を張っている。講義中は講堂全体に張ってくれるので学生たちにも大変好評だ。

それに気付けば、確かに魔術の気配を感じる。ではやはり、誰かが居るという事だ。

「すいませーん！」

「お邪魔してますー！どなたかー！」

声を上げてみるが返答はない。ふたりは顔を見合わせると

「失礼しまーす」

屋内の探索に向かった。

「うわすっごい廃墟！」

人避けの結界が張られていた場所へ辿り着いたふたりは、入り口のない廃墟の前で立ち尽くし

た。陽も傾き、セミの音も種類が変わっている。

「なるほど…」

これは入ろうとは思えない。見事な人避けの結界だ。術式は解説して理解していたが、効果は想像以上だった。

「ええっと…入口、解る？」

「解らない！」

そっかと肩を落として入口を探る。答えは知っている。見付けるのは難しくはない。

「あつた。此処から入ろう」

柵の内側は見えた通りに現実だ。軋む戸を開いて家の中に入る。

埃だらけの内装に反して、空調だけは居心地よく整っている。人避けの結界に冷房魔術。空間術学講師が見張りに来ていたと言われても納得してしまいそうだ。いや、彼の術式はもつと読み辛いものだったか。

見渡せば、床の埃が一部薄れている。二人分の足跡だ。

「新しいわ。誰かいるみたい。…そりゃそっか、冷房効いてるんだし」

「…あ。ど、どうしよう。不法侵入しちゃった」

ノリで何となく家にまで入ってしまった。見た目が激しく廃墟のため、つい良い気がしてしまつたのだろう。

「今更!? 家の人見付けて話を聞きましょう。正当だったら謝ればいいでしょ」

「う、うん。そうだね。ならこの足跡辿ってみよっか」

後付けで人避けを施しているのだ。居るのは悪人かも知れない。ルカが居れば滅多な事にはならないだろうと、ソーマは足跡の追跡を開始した。

とは言え、そんなに広い家ではない。すぐに行き先は判明した。

「地下、かな」

「おー」

下へ続く細い階段は他の部分と異なり手摺も床もあまり埃が付いていなかった。すぐ傍には裏口が設けられている。此処から出入りしているのだろう。

「降りる？」

「いや行くでしょ」

家の中は西陽が入り今までは灯り要らずだったが、この先は流石に暗い。地下へと続く暗い階段を下るため明かりを点けようとしたソーマは、「あれ?」と首を捻った。

「夕立とか…来てる？」

「夕立って来るならもう少し前の時間じゃない? なんにせよ、音も聞こえないから判んないな」

嵐の時に似て、精霊が命令に従わない。夕立程度で此処までとは思わないが一番に思い付くのはそれだった。

「どうする？ 降りるのやめとく？」

「そうだね。流星に暗すぎるよ。ここまで来て何だけど…」

「手摺あるし、気を付ければ行けそうだけどな」

手摺を掴んでルカが下を覗き込む。少し唸った後、数歩分階段を下った。

「あー、大丈夫そう。そんなに長くないし…えっ、明かり点いてる！」

「え？」

十数段の階段を慎重に下りると、細い通路は直角に折れていた。その先には、明かりの漏れる金属製の扉があった。

「怪しい…」

「ワクワクしてきた！」

それぞれに異なった表情を浮かべ、ふたりはその扉に手を掛けた。

「困りました…今何時くらいでしょうか」

「お腹空いてきたね」

ネレーナとピノはお互いに肩を丸めてしゃがみこんでいた。床は石造りで空気も冷たく、暑い日中の活動に適した服装のふたりには寒いくらいだ。

これといった光源もないのに昼の屋外と同じくらい明るく、時間も判らない。そう広くもない部屋の奥には紫色や褐色の液体の詰まった瓶がそれぞれ大量に置かれている。

「あれお酒かな？」

「どうでしょう。口を付ける気にはなりませんけど……」

「うゝゝん喉乾いてきた気がするゝ」

瓶の口はしっかりと閉まっており匂いも解らない。不用意に開けてみるのも危険だろうと放置しているが、目下この部屋には他に何もない。自然とそれに目が行き、段々喉の乾きを覚え始めた。

廃墟に侵入し、冷房魔術の施術者を探してこの部屋を見付けた。中を一頻り見て何もない事を確認したふたりは、入ってきた扉が開かない事にも気が付いた。ネレーナが力尽くで開けようとしてもびくともせず、それから長い時間ただ瓶の山を眺めて途方に暮れていた。

ガチャ、と聞こえたのはピノが瓶をひとつ手に取った時だった。振り返ると、見知った顔が驚いた表情で立っている。

「扉閉めないで！」

「えっ？」

カチンと静かに、絶望の音が響いた。

「うわあ!？」

慌てて駆け寄りドアノブを捻るが、やはりびくともしない。

「えーっと？」

ふたりの憔悴した様子にルカとソーマは困惑して首を傾げた。

「なるほど…」

情報共有を済ませた四人は目を瞑って唸るしか出来なかった。

「どうしよう」

ピノとネレーナは魔術が使えない事を知り、ルカとソーマは此処から出られない事を知った。
時刻は夕飯時。お腹も空いて、喉も渴いている。

「取り敢えず、ひよっとしてケイナが来てくれるかも知れないから一人は扉に貼り付いておきましょう。閉められないように」

「そうだね！」

くしゅん！とネレーナがくしゃみをした。

「出られないと風邪引いちゃいそうだね」

この部屋は冷房が効きすぎている。

「此処、冷蔵庫なのかも」

瓶の山以外何もなく、過剰に冷やされた、内側からは開かない部屋。確かにルカのその推察は説得力があった。

「でも内側にもノブがあるんだから、開ける方法はあると…思う」

ソーマは自信なさげに望みを口にした。今まで見てきたこの村の施術形態からすると、元々ただの小部屋だったこの部屋に後付けで機能を与えた線は濃厚だ。内側にドアノブがあることにそんなに意味はないかもしれない。

「そうかも！」「確かに」「なるほど」と望みを持って考え始めた学友たちに、ソーマは慌てて「いやごめん、そんな事ないかも…！」と声を上げるが、既に彼らに聞く耳はなかった。

僅かな罪悪感を抱きながら、ソーマはドアに張り付く三人を見守った。

「解らないですね…」

「お腹空いて頭回らないよ」

「目の前には糖分と思しき液体が山とあるのに…」

泣き言が増えてきた三人と、機嫌が悪くなってきたソーマは各々に座り込んでいる。

「おーい、居るか？」

聞こえた声に一斉に振り返る。ココココ、と細かく戸を叩く音と共にもう一度知った声でした。

「ピノー？ネレーナ？居ないか？」

「居る居る居る居る!!」

「閉まらないように開けて!!」

内側からドンドンと強く扉を叩く。

「んー?…居ないか…?」

「居るってば!!」

蹴破る勢いでルカが扉に一撃入れる。

「! 居る…のか? 困ったな…あけ」

ザザザッ!と強くノイズが走り、甲高い悲鳴のようなものが聞こえた。

「えっ!」

「ちょっと!」

「ノック変だったし、多分使い魔だったよね今の」

ソーマの分析にルカが気付く。

「魔術使えるって事？」

ところが、試してみても誰も巧くないかない。

「エラー吐いて消えたみたいだったし、やっぱり無理かなあ」

だがそれまでは使えていたという事だ。ルカが何も使えないのにケイナが某か使えるなんて事

はまずあり得ない。ケイナの術式は効率こそ良いが、魔力量は圧倒的にルカを下回る。

「まあでも居場所は伝わっただろうし、来てくれるでしょ」

「そうですね。良かった」

程なくして扉は開き――現れたのは、ケイナではなかった。

ひとり廃墟を見上げていたケイナは、蚊除けの結界を強くしてその場にしゃがみこんだ。使い魔を作り出し廃墟の探索を任せる。暗視モードもオンにした。人間には入れないが、小鳥程度が潜れる隙間は幾つもある。

中は静寂に充ちていた。誰か居るようには思えなかったが、一通り見て回る。簡易な錬金術用の器具や吊られたドライフラワーなどから恐らく此処には魔術師が住んでいたのだろうと予測できた。

念のため屋根裏も見てみるが、小動物の気配すらない。こんな廃屋、喜んで棲みそうなものなのに……と少し不審に思いつつも探索を続ける。

地下を見付けた。歪みも錆びもなくきつちりと閉まった扉はこの廃屋にあつて恐らく頻繁に利用されているのだろう。念のため呼び掛けるが返事はない。が、何度か呼び掛けると扉を叩きつけるような衝撃が観測された。返事は声ではなく衝撃で返ってくる。思ったより異常事態か

も知れない。

突然、蚊を叩くように使い魔が潰された。

「っ!？」

しゃがみこんでいたにも関わらず、驚きで姿勢を崩してしまった。扉の様子に集中していた事もあり、背後からの接近に気付かなかった。

「誰か居るって事かよ……」

土を払って立ち上がる。念のため宿に置いてきた使い魔の様子をチェックするが、誰一人戻ってきた様子はない。

「……………」

暗闇の中草木を掻き分けて柵を乗り越える気にはならない。ケイナはそつとその場を離れた。

「だっ、誰!？」

扉を開けて現れたのは、見たことのない人物だった。真っ直ぐに切り揃えられた肩まである黒い髪。夏にあるまじき厚手のローブ。呆れ返った半眼でルカたちを見渡した後、後ろ手に扉を閉めた。

「こっちの台詞だけど」

「それは…そうね！」

恐らく家主なのだろう。であれば侵入者は此方の方だ。

「空き家、つて聞いてたんですけど…」

「ああ、頼まれて様子見に来たの。診療所に居るおばちゃんでしょ？困ったもんだなああの
人」

「こっちの台詞」と言っではいたが、侵入者たちの素性に関してはある程度察しがついている
ようだ。しかし侵入者たちからは彼の事が何も解らない。歳は近そうだ。

「勝手に住み着いてるって言われてたよ」

「そうだよ。元々空き家でしょ？何か悪いの？」

髪を耳に掛けながら堂々と顎を上げる。

「む、村の敷地内だったら村の許可が要るんじゃないかな？そもそも村の人間じゃない、ん
ですか？」

思わず口を開いてしまったソーマは、取って付けたような丁寧語になってしまった事に自ら眉
を顰めた。

「違うよ。冗談じゃない。でも、此処はボクの家だった。…昔から」

「オーケー、ならそういう事にしよう。そいつら解放して貰っていいか？流石に腹減った」
「ケイナ!!」

開いた扉の枠に身体を寄り掛かせて、声を上げた学友たちにヒラヒラと手を振った。

「受けた依頼内容は『様子を見てこい』だったな？ 住んだのは正当な家の持ち主、つまり報告内容は『問題なし』だ」

家主はパチクリと瞬いた。

「それは助かるけど……いいの？」

「いいだろう。虚偽じゃない。私たちはこの一夏限りの客人だしな。……掘り下げたいのか？ ソーマ」

「……そういうわけじゃ、ないけど」

彼らしい端的な解決法の提示に、ソーマのみが少し気持ちの悪そうな表情を浮かべていた。

虫除けの網が被せられた冷めきった夕飯に漸くありついた食べ盛りたちは食の有り難さに涙した。

「うう…冷めてても美味しい…」

「残しておいてくれたんですねーありがたいですー！」

「頼んどいたんだよ。片付けないでくれって」

「ありがとうー！」

「宿の人も心配してくれてたね。申し訳ないな」

空腹を満たして一息吐いたら状況整理の時間だ。

「ソーマ、約束取り付けてたけど明日またあそこ行くの？」

「だって、解らない事だらけだし……聞きたい事もあるから」

帰り際、明日も来ていいかと訊いたソーマに、廃屋の主は少し嫌な表情をしつつも可と答えた。

「面倒にならないようにな」

「なんかケイナ先生みたいだね」

何気ないピノの一言にケイナは噎せ返った。

「あっ！　そうよケイナ！　どうして魔術使えたの!？」

「はあ？　ゲホ、魔術師だからですけど？」

噎せた余韻に犯されながら答えるケイナに四人分の視線が刺さる。

「……あ？　え、なに。使えなかったのか？」

四人は無言で肯いた。

「いや全然……普通に使えたけど。ていうかそうだ。おまえらなんであんな処入ってっちゃうんだよ」

何の為の使い魔だと言われれば、各々にそつと視線を外した。使い慣れてないと言えればそれまでだが、全く思い付かなかった。

翌朝。売店の一角を眺めていたピノが四人を呼びつけた。

「ねえ、これ……」

指差す先にはジュースの瓶。何の変哲もない果汁飲料で、提げられた札には各々の味と価格が表記されている。

「あー!!」

「こつれ、あそこに置いてあったヤツ……!」

ケイナはジュースに騒ぎ出した学友たちに困惑する。どう見たってありふれたジュースだ。瓶自体にもこれといった特徴は見られない。

「いや絶対そう」

「これしか見るものなかったですからね〜!」

「イヤというほど眺めたもんね……」

商品の前で騒ぐ客に釣られて売店員が寄ってきてしまった。

「ああそれ。食事に付けてるやつと同じものだよ。美味しかったろ? 偶に来る商人から卸してるんだけど、村では人気だね。割と何処の店も扱ってるよ」

「そうなんですか」

「本当にジュースなんだったら飲んどきや良かった〜」

肩を落とすピノ。ソーマは透明な褐色のものを一本買い求めた。

「ケイナ、ちよつと手伝って貰っていい？」

「ん？ おう」

「成分は果汁飲料で間違いなしだ」

ケイナ持参の簡易錬金術セットで調べた処、特に不審はなさそうだった。しかし。

「そっか。ありがとう。でも、特殊な魔術が掛けられてた」

「えっ！」

ソーマの不穏な言葉に皆の注目が集まる。

「今日もだったけど、いつも朝御飯にフルーツジュース付いてるよね」

「美味しかった！」

「えっやだ飲んじやってるわよ？」

「飲んじやいましたねえ、つと……」

ルカとネレーナの反応を見て、ピノが怯む。

「あつ、そういうこと……？」

このジュースが魔術が使えなかった原因かと推測したが、

「いや待て。それなら私も飲んでるぞ」

「うん、僕もその後魔術使ってるし、皆もでしょ？そもそも毎朝ついてたし。体内に入れるものだから、魔術師には効き難いと思う。特にピノには効かないんじゃないかな」

前提として魔術というものは『生命』に対しては効き難い。エネルギー交換や物質の反応の促進又は強制を行うものであって、生体を操るようなことは難しい。

「掛かってたのは魔術抑制の効果じゃなくて、…効きが強くなるような…被魔術効果が増強される術式だと思う。強いものじゃなくて、とても微弱なものだけだ」

出来るのは、電気信号を操作して『思い込ませる』くらいのもんだ。これを呪術という。

「なんだそれ？」

「この村で対人魔術は今のところひとつしか見てないね」

「廃屋の人避けかあ」

『偶に来る商人』というのが廃屋の主なのだろう。

「んゝゝソーマ、ついて行ってもいい？」

「え？うん、いいと思うけど…」

突然同行を申し出たピノにソーマは背きを返す。

「あの人、知らない魔術たくさん知ってるぞ」

「そこは確かに興味ある。ちょっと確認もあるし、私も後で行くわ」

「確認？」と首を傾げるソーマにケイナは悪い笑みを返した。

「そ。だから少し遅れる。先に行つてくれ」

「本当に来たんだ」

少年は廃屋の裏口に立って、呆れた顔で来訪者を出迎えた。

「…まあ入りなよ。外は暑いでしょ」

「お邪魔、します」

「今日も涼しい？ やった」

緊張気味のソーマに反してピノは嬉々として屋内に歩を進めた。

「この涼しさも、ジュースの効果？」

「へえ。調べたんだ？ そう。涼しいのは副次的作用だけど、あれ飲んでるなら寒いくらいに

感じるかもね」

「副次的…」

「そ。ボクの呪術は静寂^{ナハオトム}の精霊をたくさん招ぶから」

「…魔術が使えなかったのは…」

「使えなかったの？ ああ、正面玄関からの侵入者には呪術に掛かりやすくなる呪いが掛けてあるからかな。それも副次的作用だ」

静寂の精霊が多く集まった事で微弱な静寂の檻が出来てしまっているらしい。

「ええと、結界を張るのに、『結合』じゃなくて『固定』を使ってるってこと？」
じいっと話を聞いていたピノが自信なさ気に口を開く。ソーマと少年の話を自分なりに噛み砕いていたようだ。

「平たく言えばそう。土の精霊ディエールツォーネルはイマイチ応えてくれなくて」

解る、とピノは力強く頷いた。ピノも土属性の適性は低い。だから結界術は苦手だった。代替術式の存在に一瞬目を輝かせたが、…氷結属性の適性も低かった。

話ながら少年は件の冷蔵庫へ入ろうとしていた。

「えっ、そこで話すの!？」

「あの荒れきった部屋じゃ落ち着けないでしょ。いいから入りなよ」

開かれた扉の先は、あの冷蔵庫ではなくなっていた。

「え？」

壊れていない家具の並んだ綺麗な部屋だ。広くはないが、生活に必要なものが一通り揃っている。

「幻覚？」

「現実」

空間魔術だと理解した瞬間、ソーマは戦慄した。

塔でもユニのみが教えている科目で、使いこなせる者は殆ど居ない。ダアトにアクセスする難易度の高い術式だ。

「因みに、こっちが本物の部屋。ジュース置き場は侵入者対策だから」

「じゃあ、あの冷蔵庫はダアト：」

「違うよ。ダアトを一瞬通って違う場所に繋げてる」

声が届かなかった筈だ。扉に直接与えた強い衝撃だけが届いた。ケイナからの声が届いたのは使い魔を介していたからだろうか。

「だからあの子、眼鏡の子。凄く驚いた。平然と境界線に立ってたから」

境界線に立つのはダアトに居続けるようなものだ。通常は気持ち悪くなったり、どちらかに弾かれる事が多い。

あまり理解が及ばないまま「そうなんだ」と一区切り付け、少年に促されるままソファに腰を下ろす。

「ジュースなら出せるけど」

ソーマは曖昧な苦笑いで首を振った。

「：やめておくよ」

「そう。そっちは？」

「えっ、貰う貰う」

今更な上、微弱な状態変化魔術はピノには効かない。平然と欲するピノにソーマは呆れたような羨ましいような、複雑な心境になった。

「待ってて」

ジュースを取りに少年が退室すると、ソーマは一度大きく息を吐いた。

「緊張してる？」

「…少しね」

知らない人と話すのも疲れるし、相手は思ったよりかなり格上の魔術師だった。このまま講義を受けたいレベルだ。

「お待たせ。ブドウとリングどっちがいい？ ベリーもあるけど」

「リング！」

ピノと自分にリングジュース、ソーマに水を用意して、漸く少年は腰を下ろした。

「で。聞きたい事って？」

「あ、ええと。僕はソーマ。こっちはピノ。君は？」

「……ヨハネスって呼んで」

「ヨハネス。君は、誰に魔術を習ったの？」

「呪術の基本はおばあちゃん。後は独学」

愛想はないが、素直に答えてくれる。おばあちゃんというのがこの家の元々の持ち主らしい。

「この村の結界を張ったのは、その：『おばあちゃん』？」

慣れない方言を使うのに微かに躊躇したソーマだが、ヨハネスは気にした様子もなく答えた。

「あれは代々だから、そうとも言えるし違うとも言える」

「この家を隠す術式を足したのはヨハネス？」

「そう。あいつら煩いから」

度々垣間見える村人への敵意はともかく、それには深く納得がいった。

「今はどうやって生活を？」

「ジュース売ってる」

「…それだけ？」

「そう」

ソーマは絶句した。これ程の魔術師が魔術を生業にしていない事に。

「自分で作るの？果物は？」

「果実なんて使っていないよ。合成」

「ひえ…」

ケイナの成分分析も騙し通せた事になる。ケイナは物理寄りのアイテム生成が得意分野ではあ

るが、錬金術学においては上級生である。簡易設備であつたとはいえ気付かれなかったという事は、かなり本物に近く再現できているという事だ。

もう我慢ならないとばかりに、ピノとソーマはグイとヨハネスに詰め寄つた。

「講義してくれないかな」

「…講義??」

ヨハネスは面食らつた様子で身を反らせた。

「結界術について君の意見を聞きたい」

「ジュースに掛けた魔術の方が知りたいよ。飲食物に呪いを掛けるなんてどうやるの?」

ふたりの圧に狼狽したヨハネスは、ハッと立ち上がった。

「追加のお客さん来たみたい。案内してくる」

迎えに出たヨハネスは、ケイナの後ろに目を遣つて固まつた。幾分成長しているが、面影は変わらない。彼は視線を上げヨハネスを捉えると、小さく首を傾げた。

「…あれ? リリファム」

「なんだ知り合いか?」

ひとつ背いただけで視線を落とした彼に、ヨハネスは苛立たし気に口を開いた。

「相変わらずだねユーク。何考えてるかサッパリ解らない」

「そっちは……ちょっと変わった……？」

「たぶんね！」

折り合いは良くなさそうだと察したケイナは割って入る。

『リリファム・エンデルファールス・インバネス。エマ・デ・ヴリースの推薦を認め、本学への入学試験受験資格を与える』

突き付けられた書面と読み上げられた文言に、ヨハネスはパチパチと音がする程瞬きをした。

「……え、は……？」

「多分すぐ講師にならないかって打診されると思うけどな。一応一般学生枠だ。入試は冬休み中にあるから、すぐ向かった方がいい」

「いや、ちょ……え？」

「大丈夫。リリファムなら受かる」

「待って貰っていいかな!？」

ヨハネスの大声に、ケイナとユークは口を噤んだ。

「……先ず。ボクの事はヨハネスって呼んで。嫌いなんだ、その名前」

「あー、まあ、うちのおっさんも名前呼びを嫌うし、解った」

「なんでヨハネス？」

「おばあちゃんがくれたあだ名。偉人の名前だって」

エンデルファールスと聞いて「何か聞いた事ある響きだね」と溢した彼は、自分の名が嫌いという弟子の為にヨハネスの名を贈った。ヨハネス・ファン・デル・ワールス、というのが偉人の名前らしいが、残念ながらいくら調べても情報がなかった。

「それから、急にそう言われても、困る。どうして急に……」

「何回か使いは出してたらしいぞ。ヨハネスが隠れちゃったから届けられなかったんだろ」

「まさか隣村の地下に隠ってるとは思わなかったし」

それにはヨハネスもぐぬぬと口を噤むしかない。まさか師が塔への入試手続きを進めてくれていた事など知らなかった。

「ヨハネス。塔への入学は私も勧めるが、決めるのは自分だ。先に来てた奴らと合流させて貰っていいか？」

立ち話が長引いてしまっていた。

「えっ！ やったじゃんやったじゃん！」

「是非においでよ！ 君は来るべきだよ」

「な、なんなの君たち」

ソーマとピノはヨハネスの入学を期待した。聞きたい話、闘わせたい意見は山程ある。講師になつてくれたらそれこそだ。歓待の熱意にタジタジになる家主に構わず、ケイナは見事な空間

魔術に舌を巻いていた。ユークも興味深く辺りを見回して歩き回っている。気付いたヨハネスが声を荒げる。

「そっちはダメ！ 仮にも女の子の部屋をジロジロ見て回るなんて失礼でしょ。信じらんない」
えも言われぬ表情を浮かべたユークは一拍後大人しくソファに戻り腰を落とした。

「入試受けるなら早めに向かった方が良い」

「そうそう。身体慣らさなきゃ危ないし」

「一人で行くの不安なら私がついて行くぞ。もうだいぶ満喫したしな」

「勝手に進めないで。ちょっと考えたいから、今日はもう帰ってくれる？」

そういうことなら、と四人は顔を見合わせ立ち上がる。

「質問があれば呼んでくれ。使い魔を置いていく」

「……ありがとう」

「さて。結末はどうなったとしても、取り敢えずひとつ片付いたな」

伸びをするケイナをユークが見つめる。

「……旅費？」

「……まあそうだ」

外国への長期旅行。学生の身で旅費を捻出するのは難しい。よって、外国に用があるが中々自

ら出向けない者の代理を行う事で融資を得る事にした。つまりバイトだ。

「運良かったね」

「ユーク連れて来てるからな」

幸運係は伊達ではない。

さて。幸運係が帰ってきた。となれば、引っ張りだこである。

「じゃーんけーんぼい!!」

「っしや!!」

力強くガッツポーズを決めたのはルカだった。ソーマは「解っていた」とばかりに一息吐き、先を譲る。

「いや待てよ？ ソーマは多分鉱石類、ルカは玄獣の搜索だろ？ 三人で行けば？」

「あ！ 確かにー」

揚々と出掛けて行った四人を見送り、笛の手入れをしているネレーナに声を掛けた。

「診療所への報告はヨハネスの決断を聞いてからにしようと思うんだが」

ヨハネスの事はルカとネレーナにも話してある。因みに、ソーマは仕事を終え、結界修繕の完

了報告はルカが行っている。人避けの結果はそのまま付けておく事にしたらしい。写しとる作業も勉強になったとソーマは喜んでいた。

「心配してるんじゃないですか？」

「ああ一応帰ってきた事は言っている。流石にな」

あるかどうかは知らないが、治安組織に連絡されても困る。

「それならいいですけど」と

手入れを終えた笛をしまいこむ。

「ソーマは多分鉱石学研究室から融資を受けてるよな。ルカは玄獣学研究室か？」

「ああ、クーシェ先生から直みたいですよ」

ネレーナもケイナも玄獣学は受けていないが、その名前は知っている。ルカからよく聞くというのがあるが、彼自身が塔の不思議のひとつに数えられているからだ。

「ネレーナは？」

「私結構稼いでるので」

「すげー。流石ネレーナ」

胸を張るネレーナに素直に感嘆する。因みにユークも自腹だ。ピノは皆の手伝いをするという名目でついてきているので、ピノの旅費は皆で割勘である。

「ここでも結構稼いでますよ」

「芸があるといいな」

元々弦楽器より管楽器が得意なネレーナは手に入れた笛で毎晩荒稼ぎしているらしい。容姿も相まって酒場では大人気だ。

「さて。私もフィールドワークに出ようかな。暇があるなら手伝ってくれてもいいぞ」

「そうですね。そうしようかな」と
ふたりはのんびりと立ち上がった。

「おっ？」

沢でカニを追っていたケイナは、顔を上げて目を凝らした。

「あつれえ！ケイナじゃん」

森から現れたのはルカたちだった。

「川の気配を感じたルカが急に遊ぼうって言い出して……」

「はー。じゃあもうここで観察はムリだな。遊ぶか」

「川遊びだー！」

一瞬で切り替えたケイナはピノと共にルカを追って川へ飛び込んでいった。見送るソーマの肩をユークが優しく叩く。

「…はあ」

見ればネレーナも合流している。ソーマはユークとふたり、岩に腰掛けて川に足を浸けた。溜まった熱が流されていく心地良さを感じる。その内に笛の音が聞こえた。ネレーナが川中の大きな岩の上に陣取って高らかに演奏しているのが見える。村人に習った曲だそうで、馴染みはないが何処か懐かしさを感じさせるリズムだった。

——ぼしゃん、ぼしゃ、ぼしゃ。

気付けばユークも笛の音に合わせて水面を蹴っている。

「知ってる曲？」

ソーマの問いに肯きを返す。

「水辺で笛を吹くと、魔物を呼ぶ…って話がある」

「ちょ」

突然の怪談にソーマは思わず腰を浮かせた。ユークのバタ足が作り出していた水溜まりに手を滑らせ、

「うわっ」

「あ」

ぼちゃんと水中へ落下した。

「…深くて、良かった」

「言っていないで助けてやれよ」

落水の音を聞いて駆け付けたケイナは呆れ顔を直ぐに焦りの色で塗り替えた。

「ソーマ？」

落ちても怪我はしない程度には深いが、透明度も高く、水中のソーマは視認できる。が、背の上にしたままのソーマは中々上がってこない。

ルカとネレーナを呼ぼうとした矢先、漸く水面から頭が出てきた。

「見付けた！レア鉱石！流石ユークだ！ありがとう!!」

「あ……？お……？」

「良かった」

飲み込むのに一拍掛かったケイナと淡々と返したユークに再び背を向け、ソーマは水底へ向かっていった。

「えーと、ルカ！ネレーナ！ソーマ手伝ってやって！こわい！」

ワーナーっ子が泳げる気がしないケイナは、やはりピナーズに助けを求める事にした。

ピィ、と高く一声鳴いて、青白い小鳥はくると消えた。

「……川遊びとか、するんだ」

夏の山野に似つかわしくない厚手のローブ姿で木陰に縫い止められているのはヨハネスだった。

「一緒に遊んでこーぜ」

「川は遠慮するよ」

「そうか」と返して隣の木陰に腰を下ろす。下半身は水を吸ってすっかり重たくなっている。

「…見たところ、着替えとか持ってなさそうだけど」

着替えどころかタオルすら持っていない。

「すぐ乾くだろう、天気は良いし」

「…バカなの？」

「否定は出来ない」

考えなしに水に浸かってしまった。軽装のピノやビナーズと違って、ケイナもソーマも水遊び出来るような服ではなかった。ソーマは事故だが、ケイナは自ら飛び込んでいる。

「で、呼んでくれれば良かったのに。何だった？」

「訊く立場で呼びつけるのは違うでしょ。まあ、ちょっとタイミング悪かったかも知れないけど」

印象に反して所々見せる律儀さに笑ってしまう。

「気にするな。何が訊きたかった？」

「その…塔って、どんな処」

「ソーマー。もう良いんじゃない？ 持って帰れないでしょそれ以上は」

「いや、この中から厳選するから」

「続けるにしても一度休憩した方がいいですよ。足つつちゃったりしますし。私は上がりうつと」

水に慣れたふたりに引っ張られてソーマも岸へ上がると、途端、ズボンの重たさと身体の冷えを自覚した。

「…ありがとう。冷静じゃなかった」

「そのズボンじゃ中々乾きにくそうね」

「あ！ 乾かしてあげるよ！ 得意得意」

ピノが熱風を起こすのを見て、ネレーナは避難させていた笛を取りに行った。

「おい、私も頼んでいいかー？」

少し離れた場所にケイナとヨハネスを見付け、一同は彼らの傍まで移動した。

ネレーナの魔術拡張術式が張られ、ピノが全員纏めて乾かしに掛かる。ヨハネスは物珍しそうにその様を眺めていた。

「凝固は得意だけど気化は苦手だから、すごい」

「へへ。熱魔術ならなんとかイケるんだ」

凄いと思った人から凄いと褒められて、ピノはゆるゆると表情を弛ませた。

「リリ……ヨハネスは、なんでも凍らせちゃうもんね」

打ち出された肘鉄をギリギリで回避して、ユークはなんとか続けた。

「そう。こんなに色々呼べない。ほら、変なのも来た」

ヨハネスの視線の先には見知らぬ少年。ヨハネスと同じく、夏の山野に似つかわしくないロブ姿だ。細身だが大きな杖を持っている。

「知り合いです？」

ネレーナの問いに誰もが首を振る。十代半ば程の少年は近くまで来ると杖を置き掌を向けた。

「笛の音に呼ばれた。塔の魔術師たちか」

「あの……まさか……あの……」

少年をぐるぐると見回してルカは完全に挙動不審だ。

「演奏を続けてくれないか？ 中々心地良かった」

「あ、いいですよ」

ルカの視線に構う事なく、少年は腰を下ろした。

演奏に聞き入り時折目を瞑る彼を皆無言で眺めている。

やがて意を決し、ルカがそろそろと声を掛けた。

「あの、ひょっとして、貴方は……オルデモイデ？」

一同は息を飲んだ。流石にその名前は知っている。地兔の大玄獣。ホドの守護獣の名だ。少年はゆっくり目を開いてルカを見た。面白そうに笑っている。

「だとしたら？」

ルカは急いで荷物を漁る。

「預かり物が……」

その所作と台詞に僅かに目を見開き、少年は興味深く続きを待つ。

「あったあった、渡しておいてくれて、これ」

差し出されたのは先程ソーマが夢中になっていたのによく似た石だった。

「これは……？」

受け取り、暫くすると、徐々に顔を歪めていった。

「あんのクソ蝙蝠、まだ生きてたのかっ」

「……？ 塔^{ウチ}の先生からなんですけど、渡した証拠も要るそうなので、受け取りのサイン下さい」

「ああそうか、塔。そんな噂も聞いたな。……これひとつ貰うぞ」

「あ、はい」

ソーマが集めた石をひとつ手に取り暫く握るとルカに渡した。

「突きつけてやれ。クソ蝙蝠に宜しく」

「……？ ありがとうございます」

は〜と盛大な溜め息をついて少年は立ち上がる。

「とんだトラップだった。とはいえ、演奏上手な嬢ちゃん、ほらよ」

「？」

ネレーナに渡されたのは、綺麗に研かれた青色の宝石だった。

「わあ…高そうな宝石、貰っていいんですか!？」

「演奏料。大玄獣を喜ばせたんだ、取っとけ」

ピノから「いいなあ」と素直な感想が溢れる。ケイナも「やつは一芸に秀でてるのは強いよな」と肯いた。

音楽に誘われ、知りたくもない旧知の相手の現状を知らされた大玄獣は、片手を振って森の中へ消えていった。

「…そしたら、土の中からガツと腕が…!」

「きゃああ!!」

夜。学生たちは一部屋に集まって怪談を楽しんでいた。近所迷惑な大絶叫も此処なら平気だ。何故なら、此処は結界に護られたヨハネスの部屋である。

「死後硬直の影響でしょ？」

「だから、なんでそんな姿勢で死んだのかって話」

「吃驚系は好きじゃない。そんなの恐いに決まってるじゃん」

魔術師たちの『怪談』は基本的には魔の類いがメインだが、凡そ「人が怖い話」に帰結する。怪談という括りを無くして単に「怖い話」にしてしまえば、狂人か虫か年齢の話になってしまう程度に現実的なのが魔術師だ。

「ボクは幽霊話は好き。人間の深層心理とか共通認識が見える気がして」

「そういう意味ならある程度認める。流石呪術師だな」

とはいえ幽霊話では体験談は出てこない。魔術師にとってはどこまでもお伽噺だ。

「有名になった話の裏を読むの、好き」

「ああ…真実を隠すための怪談、又は警告としての寓話」

「あ、好き好き。実は、って話ね！」

「そのまま楽しむのも良いですけどね」

ヨハネスからこの辺りで有名な怪談を教えて貰い、ユークに語らせると倍怖くなる事を発見し、塔の不思議を語り聞かせ、わいわいと夜は更けて行く。村民をひとり、恐怖に陥れた事も知らず。

「じゃあヨハネスは入学を決めたって事で」

「入試受けるだけだから。ダメだったら戻ってくるし」

「受からないワケないよね」

「そそ。特技枠あるから万一筆記ミスっても大丈夫だって」

ヨハネスはハードルを上げられ苦い顔だ。

「これで憂い無く『何も居ませんでした』と報告出きるな」

それを聞いたヨハネスはまた顔色を変えた。

「…あ。うん。まあ、押し切れるんじゃないかな」

「遅くなりましたー、あの廃墟なんですけど…」

「ああ君たちか、早く彼女に伝えてくれ。『何もなかった』と！」

「うわっととっ！」

ネレーナ、ピノ、ケイナの三人が診療所の扉をノックしながら声を掛けると、速攻で出てきた医者に強く引つ張り込まれた。

顔を合わせるなり、ピノの襟首を掴み兼ねない勢いで彼は捲し立てた。

「ああ貴方たち！居たんでしょ！?!何か居たわよね、昨晚だって悲鳴が、幾つも悲鳴が聞こえて…！」

恐慌状態のその様に三人の血の気が引く。あの廃屋から悲鳴が聞こえていたのなら、それは間違ひなく自分たちのものだ。結界があると安心して騒ぎまくった。嫌な汗を流しながら、恐る恐る医者を見遣る。

「聞こえ：ました？」

「いや：悲鳴を聞いた、と訴えているのは彼女だけだ。廃屋の陰とやらも、他の者は見た事もない」

少しだけホツとする。

「そんなわけない！居るんだよ、何か！見たんだから！聞いたんだから！」

ゴクリと唾を呑み込んで、ケイナは計画を変更した。

「ええ実は、居たんです。サルのような玄獣が。結界が弱って一部綻んでいた影響でしょう。でもそれも張り直して、追いついておいたのもう大丈夫ですよ。それで報告が遅れたんです。昨日の悲鳴は追いつく際のソイツの鳴き声で、高周波なんで聞こえない人も居るんですよ。というか、聞こえる人が稀なんですけど」

「：え、あ、ああ、やっぱり。ああそうか、ああやっぱり」

望み通りの言葉の羅列はゆっくりと彼に染み込んでいく。そうか、やっぱり、と同じ言葉を何度も繰り返して、やがて落ち着きを取り戻した。

「うん、うん。流石塔の学生さんだねえ。頼りになるよ。ありがとう」

「ああ、じゃあ、お礼は僕が渡しておくから。バドゥムさんは此処で番を頼むよ」
手を振るバドゥムに礼をして、三人は医者と共に診療所を出た。

「今のは、どこまで本当ですか？」

「ほぼ出任せですね。今後心配ないのは本当ですよ」

口を挟む隙もなかったピノとネレーナもポカンとしたままだ。

「なるほどの確でした。助かりましたよ。彼女はちよつと、少し…気が疲れているようでした。
この診療所も、今じゃ主に彼女のためにあるくらいで」

「あーなるほど。…お大事にしてください」

「…どういう事？」

「あーつと、多分な…いや。ヨハネスが知ってんだろ」

「そんな態度でしたね」

今ヨハネスは旅館に居る。

「聞いてみよう」

「バドゥムさんね。魔術的不感症」

「なにそれ?？」

ヨハネスから飛び出したのはルカが聞いた事もない単語だった。ピノは記憶を掘り出して目を丸くした。

「聞いた事はあるけど…本当に居るんだ」

よく医療術学講師と共に居るピノは、彼の故郷では増えてきているという話を聞かされていた。直接的な魔術が効かない体質の事だ。被魔術効果を高めるジュースも人避きの結界も、彼には効果がない。

「ケセドでは今やそう珍しくもないかも知れんが、ここはホドの山奥だぞ」

「そう。だからレア中のレア。誰にも理解できない。つまり、精神疾患者」

「……」

一同、表情を曇らせる。穩便に場を納める為とは言え、そのように扱いきってしまったケイナは特に居心地が悪い。

「本人だけにでも真実を伝えた方が良いんじゃない?」

「…ヨハネス、どうだ?」

「折角丸く収まってるのに…とは思うけど。結局、あの人が何を言っても村人は信じないだろうし、好きにしたら」

「そもそもさ」

バドゥムに説明を終えた一行は、覇気の無いソーマの声に軽く頭を向けた。

「この村にある対人魔術なんて、ヨハネスの掛けた分だけだから……」

「そうよね。ヨハネスが出ていくんだから、今後は心配ないわ」

「そうだろうね」

「私がおかしいんじゃないかった」「よかった」と泣いていたバドゥムを思い出すとどうにも後味がよくないが、ヨハネス本人に特に思うところはないらしい。

「まあ真実を知れて少しは気が楽だろうと思うしかない」

今は真実が解った喜びが強いだろうが、その内元凶について思い至るだろう。とにもかくにも。これでミッシェンフルコンプリートだ。

「さー帰るか。長い冬休みだった！」

「夏満喫しましたねー」

ヨハネスは一足先に塔へ向かった。落ちる事はないと思うが、寮割や彼の授業選択なども含め

て塔での再会が楽しみだ。

「それにしても長居したね」

ほうと息を吐いてソーマが少し遠い目をする。

「私たちも慣らしが要りますねーこれは」

伸びをして、ネレーナは身体の調子を確かめた。

「あれ結構ダルいよねーてかあっち冬じゃん！ターミナルで着替えられるようにしとかなないと！」

ピノは慌てて荷物を確認する。

「あー！報告長くなりそー！」

三日は解放して貰えないかも知れないとルカは何処か楽しそうに嘆いた。

「…皆、ありがとう」

首を傾げる一同にユークは付け足した。

「リリファムのこと」

「[[[誰?・?]]]」

ケイナは目を覆って天を仰いだ。

「…ヨハネスの事」

あつという間で長かった冬休みの夏の話は、これでおしまい。

【静寂の落とし子の話】

樹歴　　ゝ八六六年＊



物心ついた時には「自分は養つて貰えているけれど、この家族の一員ではない」という自覚があった。

不必要に厳しくされたことも、虐待を受けたこともない。衣食住も教育も充分に与えて貰っていた。ただ少し、彼らの実子と折り合いが悪かった。扱いに大きく差があった訳ではない。ただ相性が悪かった。それも申し訳なく思っていたし、ソイツとも一緒に居たくなかったので、両親に篤く感謝を伝え半ば強引に家を出た。アテはあると嘘を吐いた。六歳のこどもにそんなものがあるワケない。両親は説得を繰り返したが、隙を衝いて家を出た。

片道馬車で半日の道程を、こどもの足でどのくらい掛けただろうか。体力は尽き空腹も極まり、ポロポロの状態で漸く隣村を発見した直後から記憶がない。気付いた時にはベッドの上で、見知らぬ老女に覗き込まれていた。

「アンタ森の中で倒れてたんだよ。何処の子だい？ 誘拐犯扱いされるのはゴメンだからね。動けるようならさっさと帰りな」

倒れていたこどもを心配するような素振は一切なく、迷惑そうに顔を歪めていた。

「帰る宛は…ありません」

「なんだ親無しか虐待かい？ 面倒だね」

次の言葉を考える間に、盛大にお腹の虫が鳴いた。

「栄養失調で動けなくても困る。取り敢えず何か食べていきな。何日食べてないんだい？」

おばあさんは口と表情に似合わず優しい人だった。空きっ腹に入れられるところのスープを作ってくれたし、暫くゆっくりさせてくれた。

「なるほど。アンタはその歳で、他人の世話になるのが嫌なんだ。難儀だね」

話を聞いたおばあさんはそう言ってやはり面倒臭そうな顔をした。暫くすると、ふとこちらに目を向けた。

「そういうやアンタ、さっき私のノートを見ていたね」

「あれ面白かった」

偶に読めない字もあったが、パラパラと目を通しただけでも興味深い内容だった。

「お願いするだけじゃなくて、こんなに細かく命令できるの知らなかったから」

「お願い？」

「お願いするでしょ、夏は『こっち来て』、冬は『あっち行って』って」

おばあさんは驚いた顔をして、綺麗な真ん丸の石を目の前に置いた。

「これに手を置いてごらん。別に害はないよ、さっさとおし」

躊躇う手をぐいと引っ張られ強制的にそれに触れさせられた。シャボン玉のように透明で虹色だった石は灰色一色に変化した。

「…あんたこれまでに暴走を起こした事は？」

「暴走？」

何の事か思い当たらなかったの、ただ首を傾げておばあさんを見た。おばあさんはとても真剣な顔をしていた。

「…魔術を習った方がいい。基礎だけなら教えてやれる。あんたは今日からあたしの弟子だ」
何だか全然解らなかったが、もう少し話を聞いて、住み込みのお手伝いさんとして雇って貰えるのだと解釈した。それならいいかと、目一杯頷いた。

どうやらちゃんと両親とコンタクトを取っていたらしいとか、そういうことは全ておばあちゃんが亡くなってから判った。手紙だけじゃなくて、会って話をしていたらしい。おばあちゃんの遺言に従って一度両親の元に戻った際に教えて貰った。義弟は主国の学校に入り寮生活をしている事もその時聞いた。戻っておいでと言って貰ったけれど、断った。勝手に出て行って頼るアテがなくなつたから出るなんて、それは違うだろう。

髪を染めて、地下に潜った。黒髪を装えば村人たちも気にしない。合成飲料を売り捌いて生活費と書籍代を賄った。

独力で手に入る書籍が尽きてきた頃、村に呪術師たちがやってきた。ボク宛の受験票を持って。

「入学おめでとう、リ… ヨハネス」

義弟は、
ボクの先輩になった。



こんにちはー

来た来た

はい
いらっしやい

待ってたわー

ご連絡ありがとう
ございませう



廃品回収に
参りましたー

エルレイ・
マテリアル

ですー

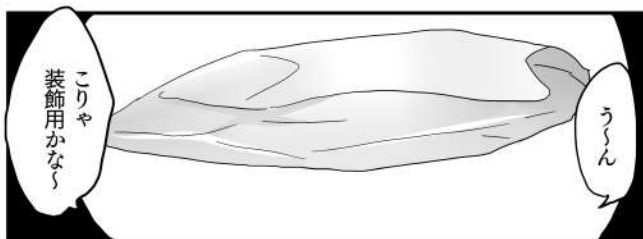
リサイクル
アルティメット







例えばこうー
堆積と研磨を
繰り返してー









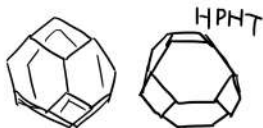
STUDY

合成ダイヤモンドの作り方

①高温・高圧法（HPHT）

自然なダイヤモンド生成過程を再現しようとしたもの。
惑星的な時間感覚で見ると超突貫なので構造が少し甘いのでは
と考える。

ニッケルや鉄を用いる触媒法と、更なる高温・高圧をかける
直接変換法がある。



②気相法（CVD）

炭素含有ガスをプラズマ化してマイクロ波ビームで分解、
炭素を種結晶に堆積させていく方法。
当然層になる。



ジーマさんが最初に使ってたのは高温・高圧の触媒法。
主人公が入って良質なグラファイトが手に入るようになり、
直接変換法を使うようになった。



ダリ先生が薦めて
きたのはチート



